

者カ惡意ヲ以テ保險者ヲ欺罔セントシタル證據明白ナルニ於テハ保險者ハ契約ノ無效ヲ主張シ得ルコト亦明ナリトス

(四十二) 松間長太郎對大阪生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ慢性肺炎症ヲ隱蔽シテ申込ミタル保險契約ハ無效ナリ

判決正本

福井縣大野郡下庄村中野四十三番地
平民農

原告 松間長太郎

右訴訟代理人辯護士

吉村 禎一

大阪府大阪市東區北濱五丁目十七番屋敷
大阪生命保險株式會社事務取締役

被告

原 源太郎
林 龍太郎

右訴訟代理人辯護士

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付キ當地方裁判所ハ判決スル如左

原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔タル可シ

事實

原告ハ被告ニ於テ金七百圓ヲ原告ニ仕拂フ可シトノ判決ヲ申立被告ハ原告請求棄却ノ判決ヲ申立タ

リ

原告カ主張セル事實ノ要領ハ原告ハ當時内縁ノ妻タリシ福井縣大野郡下庄村中野内田コメヲ被保險人トナシ明治三十一年十二月四日被告會社ト金七百圓ノ生命保險契約ヲ締結シ保險料ハ怠リナク之ヲ仕拂ヒ明治三十二年一月廿一日右コメト婚姻登記ヲ爲シタル後同年二月十八日コメハ病死シタルヲ以テ保險金仕拂ヲ請求セシニ被告會社ハ拒絕シテ之レカ仕拂ヲ爲サ、ルカ故ニ本訴ヲ提起シテ之ヲ要求スト云フニ在リ

被告答辯ノ要領ハ保險契約ヲ締結シタルコト並ニ被保險人内田コメノ死亡シタルコトハ之ヲ認ムト雖モ同人ハ明治三十一年四月中慢性肺炎症ニ罹レルモノナルニ契約締結ノ際右已往症ヲ隱蔽シタルコトハ明ナルヲ以テ契約ニ基キ且法律ノ規定ニ從ヒ右契約ハ無效タルモノナレバ被告ハ保險金仕拂ノ義務ナク原告ノ請求ハ不當ナリト云フニ在リ

理由

本訴ノ爭點ハ被保險人内田コメハ果シテ已往症アリテ之ヲ隱蔽シタリシヤ否ヤ其隱蔽シタル已往症ハ重要ニシテ契約無效ヲ來ス可キモノナリヤ否ヤニアリトス依テ審案スルニ醫師秦剛之助カ明治三十一年四月中内田コメヲ診察シタルニ咯痰血液ヲ混シ肺部疼痛ヲ愬フ即チ其病狀ニ從ヒ慢性肺炎ト診斷シテ二號證處方箋ノ如ク投劑治療シ三週日許ニ輕快休藥シ同年六月中同症再發シ一週日許治療

輕快ニ赴キタリトノ證言ハ之ヲ疑フニ足ル可キ何等ノ證憑ナキヲ以テ眞實ナリトシテ信憑ヲ與ヘサルヲ得ス而シテ肺ノ疾患ハ病後攝養其當ヲ得サルニ於テハ常ニ再發ノ虞アルモノニシテ右證人ノ證言ニ依ルモ兩三月ナラサルニ同症ノ再發シタリト云フヲ以テ亦其然ルヲ觀ルニ足レリ果シテ然ラハコメノ已往症ハ著ルシキモノタルコトハ勿論ニシテ特ニ生命保險契約ニアリテハ最モ注意セサル可カラサル已往疾患ナリトス夫レ既ニコメノ已往ニ著シキ疾患アリタリトセハ所謂重要事項ナルカ故ニ生命保險申込證書相當欄ニ其記入ヲ爲ササル可カラサルニ乙一號證第十八欄ヲ閱スルニ何等ノ記載ナク唯タ圈點ヲ付シタルノミ是正ニ已往症即チ重要ナル事項ヲ隱蔽シタリト認メサル可カラス如何トナレハ右ノ記載ノ有無ハ失權ヲ來ス可キ重要ノ事項ナルコトハ申込證書末段ニ於テ此申込證書ニ記載ノ條項云々虛偽隱蔽ノ廉アルカ又ハ保險證書裏面記載ノ條項ニ違反シタルトキハ保險金要求ノ權利ヲ失ヒ云々ノ明文アルヲ以テ誠實ニ契約ノ締結ヲ爲サンニハ必ラスヤ申込書相當欄ニ之レカ記入ヲ爲ササル可カラサルハ事理當然ノ事ナレバナリ

上來説明シタル如クナルニ於テハ保險申込書證ノ約款特ニ保險證書裏書ノ記載ニ(乙三號證)ニ基キ本訴ノ生命保險契約ノ無効タル可キハ明カニシテ原告ハ保險金請求ノ權利ナク其請求ハ不當ナリト判斷セサル可カラス以上ノ理由ニ基キ主文ノ如ク判決ス

明治三十二年十一月二十二日

福井地方裁判所民事部

裁判長判事 山口 武 洪 判事 柴崎 守 雄 判事 岡 忠 亮

附 言

本判決ハ至當ニシテ別ニ評論スヘキ點ヲ見ス

(四十三) 岩井慶隆對仁壽生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者ノ肺病ヲ隱蔽シテ申込ミタル契約ハ無効ナリ

判決正本

愛知縣名古屋市長者町十二番戸平民

原告 岩井 慶隆

右訴訟代理人辯護士 天野 景治

東京市麹町區内幸町一丁目三番地

被告 仁壽生命保險合資會社

右訴訟代表者 辻 新 次

右訴訟代理人辯護士 菊池 武夫

右當事者間ノ生命保險金請求事件ニ付當裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

原告一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ生命保險金四千九百五十六圓六十錢及明治三十二年十月三十一日ヨリ判決執行ニ至ル迄年六分ノ利子ヲ附シ支拂フヘシトノ判決アリタシ其事實トシテ原告ハ原告妻若井カギヲ被保人トシテ明治三十二年六月二十六日被告ト甲第一號證ノ如ク金五千圓ノ終身生命保險契約ヲ締結シ置キタルニ被保人カギハ明治三十二年八月二十九日急性肺炎ニテ死亡セシヲ以テ被告會社ノ定ムル規則ニ基キ相等ノ手續ヲ履行シ保險金支拂ヲ請求スルモ之ニ應セサルヲ以テ本訴ヲ提起シタル次第ナリ而シテ被告會社ノ規則ニ依レハ被保人死亡スルモ其一年分保險料ニ未拂ノ分アルキハ之ヲ引キ去ルヘキモノナルヲ以テ未拂六ヶ月分ノ保險料金四十三圓四十錢ヲ保險金額中ヨリ控除シ本訴金額ヲ請求ス而シテ又原告ハ被告會社ノ保險規則第三十五條ノ規定アルコトハ之ヲ認ムルモ原告カ被告會社ニ差入レタル申込證書ニハ詐欺隱蔽ノ事實毫モ存セスト陳述セリ

被告「答辯ノ要旨」ハ原告ノ請求ハ棄却ストノ判決アリタシト云ヒ其事實トシテ被告會社ハ甲第一號證ノ如ク原告ト保險契約ヲ締結シタルコトハ相違ナキモ原告ハ被告會社ノ保險規則及ヒ保險申込ニ必要ナル手續ヲ承知ノ上其妻カギノ生命保險ニ付被告ト契約シタルモノナリ而シテ被告會社ノ保險申込用紙ニハ會患及現病ノ有無ナル特別ノ一欄ヲ設ケ被保人カ經過シタル又ハ經過シツ、アル重患難症其他著シキ疾病ノ有無及情況ハ被保人及契約人ヲシテ必ス之ヲ告知セシムル規定ナリ然

ルニ原告ハ被保人カギガ明治三十二年六月二十三日即チ保險申込日前ヨリ肺病ニ罹リ居ル事實ヲ詳知シナカラ保險申込證書ノ會患及現病ノ有無ト掲アル欄内ニ「醫士ノ診察ヲ受ケタルモ三日ト臥シタルコトナシ目下ハ御診察ノ通りニ候也」ト記入シ爾來契約締結ニ至ル迄カギカ肺病ニ罹リタル事實ヲ毫モ被告ニ告知セシコトナシ抑被保人カ肺病ニ罹リタル事實ハ保險契約ニ付テハ重要ナル事項ニシテ被告會社ノ保險規則第三十五條ニモ「申込證書ニ詐欺又ハ隱蔽ノ事アルトキハ保險契約ハ無効ナル旨ノ規定アリ之ニ依リテ當事者ノ保險契約ハ無効ノモノナレハ右契約ニ因ル保險金支拂ノ要求ニ應シ難シト陳述セリ

理由

本件ノ争點ハ被保人カギハ保險契約締結前ヨリ肺病ニ罹リ居リタルヤ否原告ハ其事實ヲ承知シ居リテ之ヲ告知セザリシヤ否ヤニ在リ依テ審按スルニ證人稲田宣四郎ノ證言ニ昨年（明治三十二年）指ス）五月七日カギノ病氣ヲ一度診察シタルシニ咳嗽及痰痰アリテ打診スルニ音短ク呼吸音鋭ク右肺炎ニ異狀ヲ認メタルヲ以テ肺炎加答兒ト斷診シタリ其際付添人ニ同人ノ夫（原告ヲ指ス）同道シ來リ妻ノ病狀及ヒ爾後ノ養生法ヲ問ヒシヲ以テ肺ニ異狀アレハ十分ノ手當ヲ爲スヘシト注意ヲ與ヘタリト在リ又證人吉本嘉道ノ證言ニ證人ハ九月十三日（明治三十二年）ノ頃ニ松本太郎方ニテ加納劍太郎ナル者ニ出逢ヒタリ其節話次若井カギノ事ニ及ヒタルニ加納ハ若井カギハ最初ヨリ病氣ラシ、

ト申シタリ又證人カカギノ夫慶隆ハ昨年五月十二三日頃五百圓ノ保險契約ヲ當會社ニ申込ミタルニ咽喉惡シキ故保險契約取結ヒ方一時延期シタル旨加納ニ話シタルニ全人ノ申スニ其後慶隆ハ自分方へ受診ノ爲メ來リシカ其節慶隆ハ妻カギカ肺病ナルカ豫防法ハナキヤト問ヒシ故加納ハ云々ノ養生法ヲ教ヘタリトノ話アリシ旨ノ陳述アリ之ニ依リテ被保險人カギハ保險契約締結前ヨリ肺病ニ罹リ居リタルコト原告ハ之ヲ詳知シ居リシ事實ヲ認ムルニ足ル又原告代人ハ保險申込證書ノ會患及現病ノ有無ト記載アル欄ニ「醫師ノ診察ヲ受クルモ三日ト臥シタルコトナシ目下ハ御診察ノ通りニ候也」ト記入シ疾病ニ罹リシコトナシト申込ミタルコトナシ又甲二、三、四號證ニ依ルモ原告ハカギノ病因ハ胃病ト信シ居リタルモノニシテ肺ヲ患ヒ居ルコトハ毫モ承知セサル旨抗辯スルモ保險契約ハ最モ誠意ヲ要スル契約ニシテ疾病ノ有無其病因病狀等ハ明白ニ告知セサルヘカラス特ニ肺患ハ普通ノ疾病ト異リ生命保險ニ重大ノ影響ヲ及ス事項ナレハ契約者ニ於テ進シテ之ヲ告知セサルヘカラス然ルニ原告ノ申込證書ニハ醫士ノ診察ヲ受ケシ旨ノ通知アルモ其肺病ナル事實ヲ隱蔽シテ告知セサルモノナレハ原告ノ認ムル所ノ被告會社保險契約規則第二十五條ノ申込證書ニ云々隱蔽ノ事アル時トアルニ該當シ契約ハ當初ヨリ無効ノモノナリ又甲第二、三、四號證ハ前説明ノ如ク原告カカギノ病因ヲ承知シナカラ死ニ近接シタル時期ニ於テ原告ノ作成シタル通知書ナレハ之ヲ信用スルニ由ナシ右ノ事實理由ナルヲ以テ主文ノ如ク判決ス

明治三十三年三月十日

名古屋地方裁判所民事第一部

裁判長判事 守 永 兵 治 判事 長 濱 信 太 郎 判事 大 久 保 與 三 吉

附 言

本件ニ於テハ保險契約者カ惡意ヲ以テ被保險者ノ肺患ニ罹レルヲ隱蔽シテ申込ヲ爲シタルモノタルコト判決理由中ニモ明示セラレタレトモ申込書ニ於ケル陳述ヲ以テ察スルモ診査ヲ受ケタルコトアリト記載シテ活路ヲ作り置キ又自今ハ御診察通リト記シテ責ヲ保險者ニ嫁セントスルカ如キ初ヨリ保險金ヲ詐取セントスルノ意思歷然タリ幸ニシテ裁判官カ保險契約ノ善意ヲ要スルモノタルコト、陳示ノ義務ニ重ヲ置キタル爲之ヲシテ目的ヲ達セシメサリシト雖トモ身體診査ヲ以テ開陳責任ノ解除ナルカノ如クニ誤解スル裁判官アラハ或ハ反對ノ判決ヲ與ヘタルヤモ知ルヘカラス保險者ノ醫師ヲ信用スルコト最慎重ナルヲ要ス

四十四 則武トヲ對日宗生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險料拂込期日ヲ經過シ且被保險者カ既ニ疾病ニ罹レルモ會社カ保險料ヲ受取リタルトキ

ハ契約ノ無効ヲ主張スヘキ權利ヲ拋棄シタルモノト見做ス

判決正本

廣島縣廣島市豊匠町平民無職業大島トッ事

原告 則 武 ト ソ

廣島地方裁判所屬辯護士

右訴訟代理人 高 田 似 瀧

東京府東京市日本橋區橋物町十二番地

被告 日宗生命保險株式會社

右會社々長專務取締役

右會社訴訟代理人廣島地方裁判所屬

辯護士

右會社訴訟代理人右會社書記

大 阪 義 一

川 合 芳 次 郎

植 田 壽 作

大 阪 義 一

右當事者間ノ生命保險金請求事件ニ付當區裁判所ハ審理ノ末判決スルコト左ノ如シ

被告會社ハ原告人ニ對シ保險金一百圓ニ明治三十三年二月二十二日ヨリ執行ニ至ル迄年五分ノ割合ヲ以テ利息ヲ加算シ之ヲ支拂フベシ

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人ハ被告會社ハ原告人ニ對シ保險金一百圓ヲ明治三十三年二月二十二日ヨリ執行ニ至ル迄年五分ノ割合ヲ以テ利息ヲ加算シ之レヲ支拂フベシトノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シ其事實ハ原告人ノ死夫則武彌七郎ハ明治三十一年五月十八日被告會社ト尋常終身生命保險契約ヲ締結シタ

而シテ其被保險金額ハ一百圓其保險料ハ一ヶ月金三十四錢三厘其保險金受取人ハ原告ニシテ爾來被保險人タル彌七郎ハ毎月保險料ノ拂込ミヲ怠リタルヲナカリシモ明治三十二年一月二月三月分ハ三月二十七日拂込ヲナシ翌々日即チ三月廿九日ニ至リ胃病ニテ死亡シタリ依テ原告人ハ被告會社ノ廣島出張所ニ對シテ被保人則武彌七郎ノ死亡ヲ證明シ保險金ノ拂渡ヲ請求シタルモ被告會社ノ廣島出張所ハ本社ヨリ契約無効ニ歸シタルヲ以テ拂渡ス限リニアラズトノ答アリタル趣ヲ以テ其拂渡ヲ拒ミタルニヨリ本訴ニ及ヒタル次第ニシテ被告人ニ右終リノ三ヶ月分ノ保險料ヲ受取リタルハ廣島出張所カ一時預リタルモノナリ又廣島出張所ハ拂込ミ期日ヲ怠リタルカ爲メニ無効トナリタル契約ヲ復活スルノ權利ナシ又右最終三ヶ月分保險料拂込ノ際彌七郎ハ大患ナリシニモ不拘健康ナリトノ虛偽ノ陳述ヲナシタルヲ以テ契約ヲ復活スルヲ得サルノミナラズ已ニ復活シタリトスルモ無効ニ歸シタルモノナリト爭フモ最終三ヶ月分ノ保險料ヲ渡シタルハ決シテ預ケタルモノニアラズシテ純然タル拂込ナリ故ニ本案ノ爭點ハ要スルニ第五號證タル保險規則第十四條ノ解決如何ニアリテ被告會社ノ出張所ニ於テ一度保險料ヲ受取リタル以上ハ契約ヲ無効ニ歸セシムヘキ權利ヲ放棄シタルモノナレハ今更抗辯ノ理由ナキモノナリ又原告人ハ最終三ヶ月保險金拂込ノ際被告會社ノ廣島出張所ニ對シテ虛偽ノ申立ヲナシタルヲナシ依テ一定ノ申立ノ如ク判決ヲ求ムト供述シタリ被告訴訟代理人ハ原告人ノ請求ハ之レヲ棄却ストノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲナシ其事實ハ被告會

社ハ原告人ノ主張スルガ如ク被保險人亡則武彌七郎ハ保險契約ヲ締結シタル事ハ相違ナシ然レトモ第一被保險人則武彌七郎ハ本年一月二月三月分ノ保險料ハ三月廿七日ニ至リ被告會社ノ廣島出張所ニ於テ一時預リタルモ毎月拂込ムベキ十八日ノ期限ヲ過キタル爲特別契約ニヨリ全ク保險契約ハ無効トナリタルモノナリ第二假リニ之レヲ本受領ナリトスルモ契約ヲ復活スルノ權利ハ本社ノ特權ニシテ出張所ハ其權利ヲ有セス故ニ未タ本社ヨリ契約ヲ復活セサル間即チ三月廿九日彌七郎ノ死亡シタル以上ハ被告會社ハ本件ノ保險金ヲ支拂スルノ義務ナキモノナリ第三假リニ被保險人彌七郎死亡ノトキハ保險契約ハ復活シ居リタリトスルモ同人ハ最終三ヶ月分保險料ヲ拂込ムトキハ肺結核ニ罹リ大患ナリシニモ不拘健全ナルカ如ク虚偽ノ申立ヲナシタルモノナレハ保險規則第廿七條ノ明文ニ基キ契約ハ無効ニ歸シタルモノナリ以上要スルニ本案ノ保險契約ハ全ク無効トナリタルモノナレハ原告人ノ請求ニ應スルヲ得ズト供述シタリ

理 由

本案當事者間ニ於テハ保險契約締結ノ年月ノ被保險金額保險料高及保險料拂込ノ期日ノ一ハ共ニ爭ヒナキ所ナリ而シテ第一被告人ハ則武彌七郎ノ本年一月乃至三月分タル最終保險料ハ當廣島出張所ニ於テ一時預リタルニ過キサレハ拂込期日ヲ經過シタルノミナラズ既ニ二十日以上ヲ經過シテ被保險人ノ死亡シタルモノナレハ契約ハ當然無効ニ歸シ被告人ハ支拂フベキ義務ナキガ如ク爭フモ被告

人ガ自体ト認ムル甲第二號乃至第三號證ヲ閱スルニ純然タル保險料受取ノ文詞ニシテ其一時ノ預リタルヲ認ムベキノ文詞ナシ故ニ本受領證タルヤ一見シテ明ナリ又甲第五號證ト乙第二號證ノ二ノ第十四條ハ被告會社保險規則ノ第十四條ニシテ同條ノ明文ニ基クトキハ保險料拂込ノ期限ヲ過クルモ三十日以内ナル場合ニ延滞利子トシテ拂込金ニ對シ日歩百分ノ四ヲ添ヘテ拂込ムトキハ契約ヲ繼續スルヲ得ベク又三十日以上ニ及フモ爾後尙ホ二ヶ月以内ナル場合ニハ保險料ノ外保險金百圓ニ付壹圓ノ懈怠料健康證明書ヲ差出シ且ツ身体ニ毫モ異狀ナキ場合ニハ契約ヲ繼續スルヲ得可キ旨ヲ規定セルモ契約ハ當然無効トナルベキノ規定ナシ故ニ被保險人彌七郎ガ保險料支拂ノ期日後タルハ勿論三十日以上ヲ經過シタル三月廿七日ニ保險料ノ拂込ヲナシタリトスルモ契約ハ當然無効ニ歸スベキモノニアラサレハ被告會社ノ代理店タル廣島出張所ニ於テ其無効ヲ主張セズ甘ンジテ保險料ノ支拂ヲ受ケタル限りハ被告會社ハ己レノ利益ヲ拋棄シタルモノニシテ該契約ハ同時ニ常位ニ復シタルモノナレハ假令被保險人タル彌七郎ハ當時大患ニシテ死期切迫シ被告會社ハ之レヲ知ラサリシトスルモ爲メニ今更契約ノ無効ヲ主張スルヲ得サルモノニシテ右ハ理事者ノ不注意タルニ過キズ第二被告人契約ヲ復活スルノ權利ハ本社ノ特權ニシテ出張所ハ其權利ヲ有セス故ニ支拂ノ義務ナシト爭フモ已ニ前段説明シタルガ如ク保險料支拂ノ期日ヲ過キタルガ爲メニ當然契約ハ無効トナラサルモノナレハ被告人ガ之レヲ主張シテ其權利ヲ運用セサル間ハ契約ハ存續スルニ付契約ヲ復活シタ

ルヤ否ヤヲ論斷スルノ必用ナシ第三被告人ハ被保險人彌七郎ガ最終三ヶ月分ノ保險料支拂ノ節ハ同人ハ肺結核ニカゝリ大患ナリシニモ不拘健全ナルカ如ク虛偽ノ申立ヲナシタルヲ以テ保險規則第廿七條ニヨリ契約ハ無効トナリタルモノナリト爭フモ乙第三號乙第四號證ハ何時タリトモ作成シ得ベキモノナルノミナラス原告人ハ之レヲ否認スルヲ以テ之レヲ信用スルニ足ラサレハ果シテ彌七郎カ病氣ナルヲ隠蔽シテ健全ナルカ如ク虛偽ノ申立ヲナシタルヤ否ヤハ之レヲ認ムベキ證據ナク又三月廿七日ニ保險料ヲ拂込ミ同月廿九日ニ至リ死亡シ其間僅ニ一日ヲ隔ツルノミナレハ彌七郎ノ病名ハ胃病若クハ肺病ノ何レニスルモ當時彌七郎ハ病体ナリシハ之レヲ推考シ得ベキモ右ハ保險契約ノ無効ヲ主張スルヲ得ベキ權利ノ拋棄ニ妨ケナシトス要スルニ本案被告人ノ爭ヒハ不當ニシテ原告人ノ請求ハ其ノ理由アルヲ前説明ノ如シ故ニ他ノ證據爭點ノ説明ヲナサズ主文ノ如ク判決ス

明治三十三年四月十八日

廣島區裁判所

判事 谷山國信

四十五 則武トヲ對日宗生命保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

保險料拂込期日ヲ經過シタル爲メ無効ニ歸シタル保險契約ハ保險契約者カ保險者ノ定メタル總テノ條件ヲ充シテ保險料ヲ拂込ミタルニアラサレハ復活シタリト認ムルコトヲ得ス

判決正本

東京市日本橋區箱物町十二番地

控訴人 日宗生命保險株式會社

右會社々長事務取締役

川合芳次郎

右訴訟代理人辯護士

植田壽作

廣島市西紙屋町長崎岸吉方平民大島トヲ事

被控訴人

則武トヲ

右訴訟代理人辯護士

高田似瀧

右當事者間生命保險金請求控訴事件ニ付當地方裁判所ハ判決スル事左ノ如シ

主 文

第一審判決ハ之ヲ廢棄ス

被控訴人ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ第一審第二審共被控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴訴訟代理人ハ原判判決ヲ廢棄シ被控訴人ノ請求相立タストノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シ被控訴訴訟代理人ハ本件控訴ハ之ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シタリ其事實上ノ陳述ハ兩造共第一審判決ニ指示スル處ト同一ナルヲ以テ之ヲ援用ス

理由

本件主要ノ争點ハ第一本件係争ノ保險契約ハ既ニ無効ニ歸シタルモノナルヤ第二右保險契約無効ニ歸シタリトセハ其後復活シタルヤ否ヤノ二點ニ在リトス依テ按スルニ第一點乙第一號證ニヨレハ右保險契約ハ明治廿九年十月廿八日付控訴會社即チ日宗生命保險會社ノ第一類生命保險規則ニ基キテ取結ヒタルモノナリ其契約人即亡則武彌七郎ハ右規則熟知ノ上若シ同人ニ於テ同規則ノ規定ニ違背シタルトキハ保險契約ヲ無効トシ既ニ拂込ミタル保險料ハ其損害トスヘキコトヲ約シタルモノナリ依テ右保險規則即チ乙二號證ノ二(甲第五號證ニ當ル)ヲ閱スルニ保險料拂込延滞スルトキハ保險契約ハ無効ニ屬ス云々トアリテ保險料拂込ノ延滞ハ直ニ保險契約ヲ無効ナラシムルノ定ナルコト明白ナリ此ノ主意ハ同則第二十八條(乙第五號證)ニヨリテ一層之ヲ明確ニセリ曰ク左ノ場合ニ於テハ保險契約ハ無効ニ屬ス云々(中略)七、保險料拂込延滞シタルトキト是ナリ由是觀之亡則武彌七郎ハ若シ自カラ保險料ノ支拂ヲ延滞シタルトキハ前示ノ規定ニヨリ當然保險契約ヲ無効ナラシムルコトヲ約シタルモノナルコト確實ナリ而シテ其保險料拂込ハ一ヶ月拂ナリシコト及同人ハ明治卅二年一月分二月分三月分ノ掛込ヲ延滞シ同年三月廿七日ニ至リ之ヲ支拂ヒタル事ハ被控訴人ニ於テ争ハサル處ノ事實ナリ夫レ然リ亡則武彌七郎ハ右ノ如ク其保險料ノ支拂ヲ延滞シタルヲ以テ前示ノ契約ニ照シ其保險契約ハ三十三年一月分ノ保險料拂込期日經過ノ時ヲ以テ既ニ無効ニ歸シタルモノトス第

二點無効ニ歸シタル保險契約ハ其後復活シタルモノナルヤ否ヤ被控訴人ノ主張シタルハ控訴人ハ甲第二號乃至第四號證ノ如ク異議ナク保險料ヲ受取タルヲ以テ該保險契約ハ依然繼續セルモノナリトノ事ナリ依テ前示ノ保險規則第十四條(乙第二號證ノ二)ヲ閱スルハ保險料拂込延滞スルキハ保險契約ハ無効ニ屬スト雖トモ延滞三十日以内ハ云々(中略)其三十日ヲ過クルモノ爾後尙二ヶ月間内ニ於テ保險料ノ外金百圓ニ付キ壹圓ノ懈怠料ヲ拂ヒ被保險人健康證明書ヲ差出サル、トキハ其身躰毫モ異狀ナキ場合ニ限り特ニ契約ヲ繼續スル事アルヘシトアリ此規定ニヨルトキハ保險料ノ拂込延滞シテ三十日ヲ經過シタル場合ニ於テ其無効ニ歸シタル契約ヲ復活シテ繼續スルニ付テハ四ヶノ條件ヲ要ス即チ一保險料ヲ拂フ事二、懈怠料ヲ拂フ事三、健康證明書ヲ差出ス事四、被保人ノ身躰ニ毫モ異狀ナキ事是ナリ本件ニ於テ保險料ノ拂込延滞シテ三十日ヲ經過シ居リタルコトハ被控訴人ノ争ハサル事實ナリサレハ其保險契約ヲ復活シテ繼續セシメンニハ契約人ニ於テ右四ヶノ條件ヲ充タサルハカラス故ニ假リニ若シ其被保險人ノ身躰ニ毫モ異狀ナシトスルモ他三條件具ハラサルハ契約ハ復活スル事ヲ得ス之レト同シク其一條件タル保險料ノ支拂アリタリトスルモ其他ノ三條件備ハルニアラサレハ其契約ハ繼續スル事ヲ得ス本件ニ於テ契約人カ爲シタル保險料ノ支拂ハ假リニ争ナキモノトスルモ契約人ニ於テ右第二第三ノ條件ニ充タザル事亦争ナキ事實ニシテ第四ノ條件ノ欠缺セル事ハ被保人ノ主治醫タリシ證人大原末太郎ノ證言ニヨリ明白トス曰、自分ハ明治三十二年二

月中頃ヨリ則武彌七郎ノ診察治療ヲ爲シ居リタリ(中略)三月初月ヨリ氣管支加答兒ヲ發シ漸々衰弱シテ死亡スルニ至リタルナリト(延滞保険料ハ其三月廿七日ニ拂込ミタルモノナリ甲第二第三四號證)然リ本件保險契約人ハ延滞保険料ノ拂込ヲ爲シタルモノトスルモ他ノ三條件ニ充タサ、リシヲ以テ其契約ハ依然無効タルモノトス但此條件ハ控訴會社ノ利益ノ爲メニ定メタルモノナルニ付同會社ハ自由ニ之ヲ拋棄シ契約ヲ繼續スル事ヲ得ヘキモ權利ノ拋棄ハ之ヲ推測スル事ヲ許サス而シテ本件ニ於テハ其拋棄ニ付テモ證據ノ見ルヘキモノナキノミナラス會社カ保險料ヲ受取リタル翌々日醫士永田良治ヲシテ被保人ノ身体ヲ檢診セシメタル事實ハ永田良治ノ訊問調書ニ徴スレハ反テ會社ニ於テ權利ヲ拋棄シタルモノニアラサル事ヲ認ムルニ足ル而已ニテ甲第六號證ハ廣島出張所カ被控訴人ノ爲メニ本社ニ向テ特別ニ盡力シタル事ヲ示スノミニテ控訴人ノ權利ノ拋棄ヲ認ムルニ足ラス

要スルニ本件保險契約ハ其契約人タル亡則武彌七郎ニ於テ保險料ノ拂込ヲ延滞シタル爲メ契約無効ニ歸シ遂ニ其繼續ヲ得サリシモノトス隨テ該契約ノ履行ヲ求ムル本件被控訴人ノ請求ハ其當ヲ得サルヲ以テ之ヲ排斥スヘキモノナリ然ルニ原裁判所カ反テ控訴人ニ敗訴ヲ言渡シタルハ失當タルヲ免カレス結局本件控訴ハ其理由アルニ付更ニ主文ノ如ク判決ス訴訟費用ハ民事訴訟法第七十八條一項第七十二條ニヨル其他ノ爭點ニ對シテハ一々説明ヲ爲スノ要ヲ認メス

明治卅三年七月十一日

廣島地方裁判所民事部

裁判長判事

高橋嘉一郎

判事

津田銀太郎

判事

吉原謙亮

附言

本件ノ爭點ハ一ニシテ足ラスト雖トモ其最重要ナルモノハ日宗生命保險會社ノ規則ニ拂込期日ヲ經過シタルトキハ契約ハ無効ニ歸シ以後保險契約者ニ於テ會社ノ定メタル期間内ニ會社ニ定メタル條件ヲ滿シテ契約ノ復活ヲ求ムルトキハ會社ハ之ヲ承諾スルコトアルヘシトノ意アルニモ拘ハラス保險契約者カ規則上ノ條件ヲ滿サスシテ保險料ヲ拂込ミ會社ノ出張所カ之ヲ領收セルカ故ニ保險契約者ハ此領收ノ事實ヲ以テ會社カ條件缺乏ノ爲ニ無効ヲ主張シ得ル權利ヲ拋棄シタルモノト主張シ會社ハ之ヲ反駁セルニアリ卑見ニヨレハ條件ノ中ニモ懈怠料ヲ拂フコト及健康證明書ヲ差出スコトハ當事者間ニ明白ナル事實ナルカ故ニ保險者カ之ヲ要求セスシテ保險料ヲ領收シタルトキハ其權利ヲ拋棄シタルモノト見做シテ支障ナシト雖トモ被保險者ノ身軀ニ異狀ナキコトハ保險者ノ知ルヲ得サル所ナルカ故ニ彼カ之ヲ問ハスシテ保險料ヲ領收シタルハ保險契約者ノ善意ナルコト即チ被保險者ノ身軀ニ異狀ナキコトノ推定ノ下ニ之ヲ爲シタルモノナルカ故ニ本件ノ如ク當時被保險者既ニ瀕死ノ境ニ在リナカラ保險契約者カ之ヲ告ケスシテ保險料ヲ拂込ミタル行爲ハ其效ナシト言ハサル

ヘカラス第一審判決ニ於テハ之ヲ以テ保險者ノ權利ノ拋棄ト見做シ第二審判決ニ於テハ單純ナル保險料ノ領收ハ權利拋棄ノ證據ト爲スト云ヘリ第二審ノ判決ハ恰モ廿九濱野市五郎對日宗生命保險株式會社事件ノ判決要旨ニ似タルカ故ニ宜シク參照スヘシ

(四十六) 渡邊ヨシ對酒家生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被告ハ不充分ナル證據ヲ以テ抗辯ノ根據ト爲スト得ス

判決正本

富山縣富山市海濱町百九十三番地平民賣藥商

原告 渡邊ヨシ

東京市京橋區銀座一丁目十二番地

被告 酒家生命保險株式會社

右訴訟代理人辯護士 平松福三郎

右法律上代理人取締役 宮川作藏

右訴訟代理人辯護士 關 皆 治

右當事者間ノ明治三十三年ノ第二三四號生命保險金支拂請求事件ニ付キ當地方裁判所ハ判決スル左ノ如シ

被告ハ金壹千圓及ヒ明治三十三年九月十七日ヨリ右金圓辨濟ノ日ニ至ルマテ年五分ノ利率ニ相當スル損害金ヲ原告ニ辨濟スヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

事實

原告ハ被告ハ原告ニ對シ金壹千圓及ヒ明治三十二年九月十七日以後本金完濟ノ日ニ至ルマテ年五分ノ割合ヲ以テ損害日歩ヲ支拂フヘシトノ判決ヲ求ムト申立其陳述スル事實ノ要旨ハ原告ハ明治三十二年五月十五日被告ト生命保險契約ヲ結ビタリ其契約ニ於ケル保險者ハ被告被保險者ハ保正ツヤ保險契約者兼保險金受取者ハ原告保險金ハ壹千圓保險金ノ支拂期間ハ被告カ死亡證明書類ヲ受取リタルヨリ六十日以内ナリ然ルニ被保險者保正ツヤハ同年七月十日病死シタルニ因リ原告ハ主治醫ノ死亡證明書ヲ添ヘ保險金ノ請求書ヲ被告ニ宛テ差出シ同年九月十六日ヲ以テ保險金支拂期間満了シタルニ被告ハ尙ホ其支拂ヲ爲サス保險金ト支拂期日満了ノ翌日ヨリ保險金支拂ノ日ニ至ルマテ之ニ對スル年率五分ノ損害金ヲ請求スルモノナリト云フニ在リ
被告ハ原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其陳述スル事實ハ原告陳述ノ如シ然レトモ被保險人保正ツヤハ明治三十二年五月十四日原告カ被告ニ向ヒ生命保險ノ申込ヲ爲シタル後ニ於テ急性腸加答兒ニ罹リタリ故ニ原告ハ其事實ヲ知ルト否トニ拘ハラズ之ヲ被告ニ通知スヘキ義務アルモノナルニ其義務ヲ盡サスシテ保險契約ヲ結フニ至リタルモノナレハ原告被告間ノ保險契約ハ無効ナリト云フニ在リ

理由

本件ニ於テ先ツ判断スルヲ要スル争點ハ保險契約ノ申込後其取結前被保險者保正ツヤカ疾病ニ罹リタルヤ否ヤニ在リ案スルニ被告カ原告ヨリ保險契約ノ申込ヲ受ケタルハ明治三十二年五月十四日ニシテ其當時被保險者保正ツヤカ富山市鍛冶町十八番地松倉方ニ居リタルコトハ當事者間ニ争ナシ然ルニ被告ノ援用スル證人堀銀平ノ供述ニハ證人ハ明治三十二年五月十四日午後富山市鍛冶町十八番地松倉方ニ於テハ松倉ツヤナル者ヲ腸胃加答兒患者トシテ診察シタル旨アルヲ以テ其ツヤナル者ハ恰モ被保險者保正ツヤナルカ如シ然レトモ被告會社ノ醫師ノ明治三十二年五月十四日午後一時頃富山市東三番町渡邊梅次郎方ニ於テ被保險者保正ツヤノ身軀検査ヲ行ヒ其當時ツヤノ身軀ニ異狀アラサリシコトハ當事者間ニ争ナキ事實ナリ同一ノ日ニ於テ然モ午後ニ於テ同一ノ人カ一方ニ於テ腸胃加答兒ニ罹リ一方ニ於テ健全ナリシトノ事實ハ之ヲ想像シ得ラレサルノミナラス診察ノ場所ヲ異ニシ姓ヲ異ニスルヨリ推セハ腸胃加答兒患者松倉ツヤナル者ハ被保險者保正ツヤトハ別人ナリト断定セサルヘカラス既ニ之ヲ別人ナリトスレハ被告ノ抗辯ハ根據ヲ失スルヲ以テ其他ノ争點ハ之ヲ判断スルノ必要ナキモノトス以上證明ノ理由ニ依リ被告ノ抗辯ヲ排斥シ原告ノ請求ヲ相當ナリト認メ主文ノ如ク判決シタリ

明治三十三年五月十七日

東京地方裁判所第二民事部

裁判長判事 横山 寛平

判事 嘉山 幹

判事 水原 親次

附 言

判決ノ理由ノ如クンハ本件ハ殆ント訴訟ノ價モ無キ程單純ナルモノナレトモ事實ハ頗ル容易ナラサルモノト想像スルヲ得ヘシ裁判官ハ同一ノ日而モ午後ニ於テ同一ノ人カ一ノ場所ニテ腸胃加答兒ニ罹リ一ノ場所ニ於テ健全ナリトハ想像スヘカラス故ニ同一人ニアラスシテ別人ナリト断定セサルヘカラスト言ヘルハ最大膽ナル断定ナリト謂ハサルヘカラス何トナレハ午後ト雖トモ敷時間アリ身軀診査ハ二三十分ニテ終ルヘキモノナレハ保正ツヤト松倉ツヤトハ同一人ニシテ先ツ渡邊方ニテ保險ノ診査ヲ受ケ松倉方ヘ歸リテ後腸胃加答兒ノ診察ヲ受ケタルコトモ有リ得ヘシ將又渡邊方ニテ診査ヲ受ケタル保正ツヤ(即チ松倉ツヤ)ナル者ハ間々詐欺保險ニ例アル被保人ノ替玉ナルモノニシテ本人ハ松倉方ニテ病氣ニ罹リ診察ヲ受ケツ、アル間ニ替玉ハ他家ニテ保險ノ診査ヲ受ケタルニアラサルヤトモ想像シ得ヘシ如何ニ當事者ノ主張ニ就テノミ判決スル文明ノ裁判官トハ言ヒナカラ是非曲直モ別タント欲セス慢然妄斷ヲ以テ職務ヲ盡シ得タリトス豈嘆スヘキノ至ナラスヤ

(四十七) 柴田ロク對日宗生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

甲 保険料拂込猶豫期間中ノ死亡ニ對シテハ保險者ハ保險金支拂ノ責ニ任セス
 乙 保險者カ嘗テ拂込期日ヨリ數十日ヲ經テ保險料ヲ領收シタル事實アルモ之ヲ以テ保險者
 カ拂込期日ニ關スル自己ノ權利ヲ暗黙ニ變更シタルモノト見做スヲ得ス

判決正本

東京市本所區向島須崎町三百三十九番地

原告 柴田 正三

前同所

全 柴田 正三

前同所

右正三法律上
代理人實母

柴田 正三

東京市京橋區金六町十二番地辯護士

右訴訟代理人 關 直彦

東京市日本橋區檜物町十二番地

被告 日宗生命保險株式會社

前同所

右會社法律上
代理人取締役

川合 芳次郎

東京市京橋區宗十郎町一番地辯護士

右訴訟代理人 王木 爲三郎

全 上 根本 仙三郎

右當事者間ノ明治三十三年(ワ)第八九號保險金請求事件ニ付キ當地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如

主 文

原告ノ請求ヲ却下ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告ハ被告ハ原告兩人ニ金壹千圓ヲ辨濟スヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決アリタシト申立
 テ明治三十年八月二十一日柴田正直ハ被告ト養老保險契約ヲ取結ヒタリ而シテ其内容ノ大要ハ正直
 ハ年々保險料金五拾六圓八十八錢ヲ八月二十一日及ヒ二月二十一日ノ兩度ニ半額宛支拂フ可ク會社
 ハ正直カ五十五才ニ達シタルトキ保險金千圓ヲ拂渡ス可ク若シ其年令ニ達セシテ正直カ死亡ス
 ルトキハ直ニ右保險金ヲ原告共ニ拂渡スヘシ正直カ保險料支拂期日ニ其支拂ヲ爲サシテ爾后三十
 日ヲ經過スルトキハ保險契約ハ無効トナル然レトモ其後二ヶ月内ニ保險料及ヒ保險金百圓ニ付キ金
 壹圓宛ノ割合ノ懈怠料ヲ支拂フトキハ保險契約ヲ繼續ス又正直カ保險料支拂未濟ノ儘死亡スルト
 キハ保險金ヨリ之ヲ差引キ其殘額ヲ拂渡ス可シトイフニ在リ而シテ正直ハ保險料ヲ支拂ヒ來リタル
 ニ明治三十二年九月十二日死亡シタリ仍テ原告共ハ其死亡届出ヲ被告方ヘ差出シ保險金ノ拂渡ヲ請
 求シタルモ被告ハ之カ拂渡ヲ爲サス己ムヲ得ズ本訴ヲ提起シタリ被告陳述ノ如ク正直ハ明治三十二
 年八月廿一日ニ支拂フ可キ保險料ヲ支拂ハサリシトスルモ同人ハ猶豫期日內即チ明治三十二年九月
 十二日ニ死亡シタルカ故ニ保險契約ハ無効トナルヘキモノニアラズ且同人ハ同年二月二十一日ニ支
 拂フ可キ保險料ヲ支拂ハサリシ爲メ同年四月廿一日被告ヨリ請求ヲ受ケ同年五月一日頃支拂ヒタル
 ニ被告ハ之ヲ受領シタルカ故ニ保險料ヲ支拂ハサルトキハ保險契約ハ無効ト爲ルトノ條項ハ暗黙

ノ合意ニ因リ變更セラレタルノミナラズ該條項ハ慣習上實際ニ行ハレ居ラス從テ若シ正直カ保險料ヲ支拂ハサリシトスルモ被告ハ保險金ノ内ヨリ之ヲ差引クヲ得ルニ止マリ其殘額ハ之ヲ拂渡ス可キ義務アルモノナリト陳述シ證據方法トシテ甲第一號證一及ヒ二ヲ提出シ、乙第一號證ノ成立ヲ認めタリ

被告ハ原告ノ請求ヲ却下シテ訴訟費用ハ原告ノ負擔トスルノ判決アリタシト申立テ明治三十年八月廿一日被告ハ柴田正直ト保險契約ヲ取結ビ同人死亡ノ節ハ保險金壹千圓ヲ原告共ニ拂渡スコトヲ約シタルニ相違ナシ然レトモ右保險契約中ニハ被保險人カ保險料支拂期日ヲ延滞スルトキハ保險契約ハ無効トナルトノ條項アリ而シテ正直ハ明治三十二年八月二十一日ノ保險料支拂期日ニ其支拂ヲ爲サ、リシカ故ニ保險契約ハ無効ニ歸シタリ原告ハ支拂期日ノ後三十日ノ猶豫期日アリトイフモ三十日間ハ保險料ニ一日百分ノ四ノ割合ノ利息ヲ附シテ拂込ミ又ハ其後二ヶ月間ニ保險料及ヒ懈怠料ニ醫師健康診斷書ヲ添ヘ拂込ムトキハ一旦無効ト爲リタル契約カ復活ストノ條項アルニ過キス正直ハ此復活ノ手續ヲ爲サスシテ死亡シタルカ故ニ原告ノ請求ハ不當ナリ次ニ被保險人カ保險料支拂期日前ニ死亡シタルトキハ其一年分ノ保險料ヲ差引キ保險金ヲ拂渡ス旨ノ條項アレトモ右ハ支拂期日ヲ慮リタル後被保險人カ死亡シタル場合ニ關スルモノニアラス明治三十二年二月廿一日ニ支拂フヘキ保險料ヲ同年同月中請求シ同年五月一日支拂ヲ受ケタルコトアルニ相違ナキモ支拂期日ニ保險

料ヲ支拂ハサルトキハ保險契約ハ無効ト爲ルトノ條項ハ之カ爲メ暗黙ニ變更セラレタルニアラス、又該條項ハ一般ハ行ハレ居ラストノ原告ノ主張ハ之ヲ否認スト陳述シ甲第一號證ノ一及ヒ二ノ成立ヲ認メ證據方法トシテ乙第一號證ヲ提出シタリ

理由

明治三十年八月二十一日ニ柴田正直カ被告ト養老保險契約ヲ取締ヒタルコト及ヒ正直カ明治三十二年九月十二日ニ死亡シタルコトハ爭ナシ然レトモ原告ハ被告ノ爭フニ拘ハラズ正直カ明治三十二年八月二十一日ニ拂込ム可キ保險料ヲ拂込ミタルコトヲ立證セサルカ故ニ同人ハ右期日ニ之カ拂込ヲ爲サスシテ死亡シタルモノト認メサルヘカラス原告ハ保險契約ニ係ルトキハ保險料支拂期日ニ之カ拂込ヲ怠ルモ爾后三十日ヲ徒過スルニアラサレハ保險契約ハ無効ト爲ラス其保險料ヲ保險金ヨリ引キ去ルニ止マルトカ主張スレトモ甲第一號證ニ據ルモ被告主張ノ如ク保險料支拂期日ニ之カ支拂ヲ怠ルトキハ保險契約ハ無効ト爲リ三十日内ニ又ハ其後二ヶ月内ニ一定ノ手續ヲ爲ストキハ一旦無効ト爲リタル保險契約カ更ニ復活スル旨ノ約定アリタルコト及ヒ被保險人カ死亡シタルトキハ其年度ノ未タ拂込期到達セサル保險料ハ保險金ヨリ之ヲ引キ去ル旨ノ約定アリタルコトヲ認ムルヲ得ルニ過キス又原告ハ明治三十二年二月二十一日ニ拂込ム可キ保險料ヲ正直カ拂込マサリシ爲メ被告ヨリ請求ヲ受ケ同年五月一日ニ至リ之ヲ拂込ミタルコトアルニ因リ保險料ノ拂

込ヲ爲ササルトキハ保險契約ハ無効ト爲ルトノ約定ハ暗黙ニ變更セラレタリト主張スレトモ右ノ事實ヲ以テ直ニ該約定ヲ暗黙ニ變更シタルモノト認ムルニ由ナシ次ニ該約定ハ習慣上行ハレ居ラストノ原告ノ主張モ亦立證ナキカ故ニ之ヲ認ムルコトヲ得ス既ニ然リトスレハ本件保險契約ハ被告主張ノ如ク正直カ明治三十二年八月二十一日ニ拂込ム可キ保險料ヲ拂込マザリシニ因リ無効ト爲リタリトイハサル可カラス依テ原告請求ヲ理由ナシト認メ主文ノ判決ヲ爲シタリ

明治三十三年六月四日

東京地方裁判所第一民事部

裁判長判事 和 仁 貞 吉 判事 岩 田 一 郎 判事 島 田 鉄 吉

附 言

保險料拂込猶豫期間中ノ死亡ニ對シテハ猶豫期間ノ性質上保險者カ當然其責ニ任スヘキ道理ナルコトハ(四)畑鎮雄對大日本生命保險會社事件ニ就テ明ニ知ルコトヲ得ヘシ然ルニ本件ニ於テ拂込期日後三十日ノ猶豫期間内ニ保險料ノ拂込ナキ間ニ被保險者カ死亡シタルヲ以テ契約ハ既ニ無効ニ歸シテ又復活スヘカラスト判決セルハ猶豫期間ノ性質ヲ没却シタルノ感アリ然レトモ日宗生命保險會社ノ規則ハ大日本生命保險會社ノ分トハ其文言ヲ異ニシ「保險料支拂期日ニ保險料ノ拂込ナキトキハ契約ハ無効ニ歸ス」ト明定セルカ故ニ裁判官ハ一旦無効ニ歸シタル契約ハ保險ノ目的タル被保險

者ノ存在ナクシテ復活スヘカラスト判決ナシタルナリ日宗生命ノ規則ノ文理解釋上ヨリスレハ或ハ止ヲ得サルヘシト雖トモ苟モ拂込期日ニ猶豫ヲ與ヘタルノ精神ナレハ會社ハ被保險者ノ生死ニ拘ハラヌ契約ヲ有效ナラシムルヲ以テ適當ナリトセサルヘカラス又判決要旨ノ第二ニ付テハ斯業ノ實際カ此ノ如キ斷案ヲ求ムルコト頗ル多シ何トナレハ保險契約者カ保險料拂込期日ヲ無視シテ之ヲ怠ルコトハ比々皆然ラサルナシト雖トモ保險者カ其契約ノ條項ヲ嚴守スルトキハ非常ニ多クノ契約失效ヲ招キテ一方ニハ保險契約者ノ不利トナリ一方ニハ會社ノ損失トナルカ故ニ保險者ハ此點ニ於テ成ルヘク寛大ナル處置ヲ取り猶豫期間内ハ勿論其後ト雖トモ拂込ヲ督促シテ保險料ヲ領收スルコトアリト雖トモ決シテ之ヲ以テ正當拂込期日ヲ無視シタルモノト推定スヘキニアラス從テ此ノ如キ習慣ヲ以テ契約ノ約款ヲ暗黙ニ變更シタルモノト見做スヲ得サルハ無論ナリ而モ世間多數ノ被保險者ハ自己ノ利益ノ爲ニ此ノ如キ獨斷ノ臆說ヲ主張スルモノナキニアラス本判決カ此誤解ヲ喝破シタルハ斯業ノ進歩ノ爲ニ頗ル利益アリト謂ハサルヘカラスナルナリ

(四十八) 柴田ロク對日宗生命保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決ニ同シ

判決正本

東京市本所區向島須崎町三三十九番地

控訴人 柴田ロク

右 同 所

控訴人 柴田正三

右同所實母

法定代理人 柴田ロク

東京市東橋區南金六町十二番地辯護士

右代理人 關直彦

全市區木挽町四丁目九番地辯護士

全 木下佐太郎

東京市日本橋區檜物町十二番地

被控訴人 日宗生命保險株式會社

右會社取締役

右法定代理人 川合芳次郎

東京市東橋區元數寄屋町三丁目五番地辯護士

右代理人 宮田四八

右當事者間ノ明治三十三年(ヲ)第五百四十九號保險金請求控訴事件ニ付當院ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴代理人關直彦一定ノ申立ハ原判決ヲ廢棄シ更ニ被控訴人ハ控訴人ニ對シ保險金千圓ヲ支拂フ

ヘシ訴訟費用ハ第一二審共被控訴人ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云フニアリ其事實上ノ供述ハ明治三十年八月廿一日控訴人柴田ロクノ夫ニシテ控訴人柴田正三ノ實父ナル柴田正直ヲ被控訴人會社ト養老保險契約ヲ締結シタリ其概要ハ正直ニ於テ年々保險料金五拾六圓八拾八錢ヲ八月廿一日及二月廿一日ノ兩度ニ半額宛支拂フヘク會社ハ正直カ五十五歳ニ達シタルトキ又ハ其年齡ニ達セシテ死亡シタルトキハ保險金千圓ヲ控訴人兩名ニ拂渡スヘキコトト定メタリ而シテ正直ハ明治三十二年九月十二日死亡シタルニ因リ控訴人等ハ被控訴會社ニ保險金ノ支拂ヲ求メタル處會社ハ正直カ明治三十二年八月廿一日ニ納ムヘキ保險料ヲ怠リタリトノ故ヲ以テ保險規則第十四條前段ニヨリ保險契約ハ無効ニ歸シタリト稱シテ控訴人等ノ求メニ應セス然レモ同規則第十四條ニハ保險料拂込延滞スルトキハ保險契約ハ無効ニ屬スト雖モ延滞三十日以内ハ延滞利子トシテ拂込金ニ對シ日歩百分ノ四ヲ添ヘテ拂込マルトキハ契約ヲ繼續スルコトヲ得云々トアリテ正直カ三十二年八月廿一日ニ支拂フヘキ保險料ヲ支拂ハサリシハ事實ナレモ其日ヨリ起算シテ三十日以内ナル九月十二日ニ正直カ死亡シタル次第ナレハ未ダ契約ヲ繼續シ得ル期間内ニ屬スルニヨリ控訴人等ハ保險料並ニ延滞利子ノ拂込ヲ爲サントシタルモ被控訴會社ハ之ヲ拒絕シタリ然レトモ此ノ如キ場合ハ三十日ノ猶豫期間内ナルヲ以テ保險契約無効ニ歸スルコトナク只被控訴會社ハ保險規則第十二條ニヨリ未拂保險料ヲ保險金中ヨリ差引クコトヲ得ルニ過キサレナリ殊ニ正直カ明治三十二

年二月廿一日ニ支拂フヘキ保険料モ被控訴會社ヨリハ同年四月八日甲第三號證ノ如ク督促ヲ受ケ而シテ同年五月一日ニ支拂ヒタル次第ニシテ保險料拂込期日ハ當事者間ニハ嚴守セラレヌ即チ保險料拂込ヲ延滞スルトキハ保險契約ハ無効ニ歸ストノ條項ハ當事者間ニ於テ之ヲ勵行セサルコトニ暗黙ノ合意ヲ以テ變更セラレタリト云ハサルヘカラサルノミナラス該條項ノ如キハ實際一般ニ行ハレ居ラサル次第ナレハ結局被控訴會社ニ於テハ本件ノ保險金ヲ控訴人等ニ拂渡スヘキ責任アリト云フニアリ被控訴代理人宮田四八一定ノ申立ハ本件控訴ハ之ヲ棄却シ訴訟費用ハ控訴人ノ負擔タルヘシトノ判決ヲ求ムト云フニアリテ其實質上ノ陳述ハ第一審判文ニ摘示スル所ト同一ナルヲ以テ之ヲ引用ス

理由

明治三十年八月廿一日柴田正直カ被控訴會社ト養老保險契約ヲ締結シタルコト並ニ正直カ明治三十二年八月廿一日ニ拂込ムヘキ保險料ヲ支拂ハスシテ同年九月十二日ニ死亡シタルコトハ當事者間ニ爭ナキ事實ナルヲ以テ本件ノ爭點トスル所ハ第一保險料拂込ノ延滞スルルキハ保險契約無効ニ歸ストノ保險規則ノ條項ハ暗黙ノ合意ニヨリ變更セラレタリヤ否第二若シ變更セラレストスルモ保險料拂込期日後三十日ハ猶豫期間ニ屬スルヲ以テ被保人死亡スルモ尙契約ヲ繼續シ得ルヤ否ノ二點ニ歸着ス依テ先ツ第一點ヲ審按スルニ控訴人ノ認ムル被控訴會社ノ保險規則第十四條ニハ保

險料拂込延滞スルルキハ保險契約ハ無効ニ屬スト雖モ延滞三十日以内ハ延滞利子トシテ拂込金ニ對シ日歩百分ノ四ヲ添ヘテ拂込マルルキハ契約ヲ繼續スルコトヲ得トアルヲ以テ若シ保險料ノ拂込ヲ怠ルルキハ其保險契約無効ニ歸スルハ論ヲ俟タサル所ナリ控訴人ハ明治三十二年二月廿一日拂込ムヘキ保險料ヲ同年五月一日ニ拂込ミタルニ被控訴會社ハ之ヲ受領シテ敢テ保險契約ヲ無効トセサリシニヨリ當事者間ニ於テハ保險料支拂ヲ延滞スルモ保險契約ヲ無効トセサルコトナリト主張スレモ被控訴會社カ單ニ一回保險料拂込延滞ヲ承諾シタリトテ爲メニ前條項ノ規則ヲ變更スルノ合意アリタルモノト認ムルコトヲ得ス若シ夫レ被控訴會社カ本件ノ保險契約者ニ對シ其拂込期日延滞ヲ承認セルコト數多アルカ若クハ各保險契約者ニ對シ保險料拂込延滞ヲ承認スル場合多キコトヲ控訴代理人ニ於テ立證シ得ルニ於テハ或ハ被控訴會社カ本件契約者ニ對シテモ亦拂込期日ヲ嚴守セサルノ意思ナリシコトヲ認定スルニ足ルヘキヤモ計ラレサレモ控訴代理人ハ單ニ證人龜田政賢ヲ以テ柴田正直ヨリ明治三十二年二月廿一日ノ拂込ムヘキヲ五月一日ニ拂込ミタルコトヲ被控訴會社カ承認シタリトノ一事ヲ立證スル旨申立テタルニ過キササルヲ以テ證人龜田政賢ハ當公廷ニ於テ控訴代理人ノ立證目的通り陳述シ且ツ該證言ハ信ヲ措クニ足ルモノト認メ得レモ該證言ノミニテハ前顯說明ノ如ク被控訴會社カ保險規則第十四條ノ前段ヲ變更スルノ默諾アリタルモノト認ムルヲ得ス第二ノ爭點ヲ按スルニ保險規則第十四條ノ趣旨ハ保險料拂込ヲ延滞スルルキハ其保險契約ハ一旦全然無効

ニ歸シ若シ三十日內ニ保險契約者ニ於テ保險料并ニ延滞利子ヲ支拂フハ被控訴會社ノ意思如何ヲ
 問ハヌ之ヲ復活セシムルコトヲ得ルニ過キスト解釋スヘクシテ控訴代理人ノ如ク右三十日ハ猶豫期
 間內ニ屬スルヲ以テ保險契約ハ初ヨリ全然無効ニ歸スルモノニ非スト解釋スヘキモノニ非サルナリ
 而シテ歸ニ前段ノ如キ解釋スル以上ハ本件ノ被保人タリ保險契約者タル柴田正直ノ死亡ハ右保險
 契約ノ一旦無効トナリ未タ復活セラレサル時期ニ屬スルモノト云ハサルヘカラス即チ保險契約ノ無
 効トナリタル時ニ於テ保險契約ノ目的物消滅ニ歸シタルモノナレハ其後ニ至リ之ヲ復活セシムルコ
 トヲ得サルハ極メテ明瞭ナリトス故ニ控訴人等ニ於テ假令正直死亡後ニ至リ保險料及延滞利子ヲ
 被控訴會社ニ拂込マントシタル事實アリトスルモ爲メニ本件保險契約ヲ復活セシムルコト能ハス況
 シヤ右事實ハ被控訴會社ノ否認スル所ナルニ拘ハラヌ控訴代理人ヨリ之ヲ證明セサルカ故ニ右ノ事
 實モ尙信用スルニ足ラサルニ於テヤ之ヲ要スルニ本件ノ保險契約ハ結局無効ニ歸シタル儘ニテ復
 活セザリシモノト認ム

以上説明ノ如クナルヲ以テ控訴人等ノ保險金請求ハ失當ニシテ隨テ本件控訴ハ其理由ナキモノトス
 是則チ民事訴訟法第四百二十四條第七十七條ニヨリ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

明治三十三年十二月廿一日

東京控訴院民事第一部

裁判長判事 田代律雄 判事 高橋文之助 判事 鈴木喜三郎
 判事 堀田馬三 判事 平島及平

(四十九) 岩間茂對護國生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

代理店ハ解除ニ屬シタル契約ノ回復ヲ認諾スルノ權限ヲ有セス

判決正本

三重縣鈴鹿郡横尾村大字山田三番屋敷平民

東京市京橋區南紺屋町十一番地

原告

岩

間

茂

被告 護國生命保險株式會社

右全所

右法定後見人

岩

間

權三郎

右會社取締役

高島

嘉右衛門

全縣飯南郡松坂町大字港町六十番屋敷辯護士

全市全區本村水町三丁目廿八番地辯護士

右訴訟代理人

中

島

太

右訴訟代理人

宮

古

啓三郎

右當事者間ノ當廳明治三十三年ヲ第七十八號保險金請求事件ニ付審理判決スルコト左ノ如シ

原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告代理人ハ被告ハ原告ニ對シ保險金貳百圓ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其事實トシテ陳辯シタル要旨ハ原告ノ父亡岩間權次郎ハ明治卅一年二月十八日被告會社ト甲第一號證ノ如ク原告ヲ保險金受取人トシテ三十年滿期保險金貳百圓ノ養老保險契約ヲ締結シ爾來一ヶ月金五拾四錢貳厘宛ノ保險料ヲ明治三十二年一月十七日迄ハ甲第二號證ノ如ク拂込ミ全月十八日ニ拂込ムヘキ分ニ付テハ拂込猶豫期限六十日ヲ經過シタルモ被告會社ハ之ニ對シ別ニ契約解除ノ意思表示ヲ爲サズ被保人岩間權次郎ヨリ全年四月十七日迄ノ分ト共ニ全月三日被告會社ノ津代理店ヘ拂込タルニ同代理店ハ之ヲ受取全月五日甲第三號證ノ如ク之カ領收證ヲ交付シタリ然ルニ被保人岩間權次郎ハ全日午前五時ニ死亡シタルヲ以テ原告ハ被告會社ニ對シ右保險金ノ支拂ヲ請求スルモノナリト云フニ在リ被告代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却シ訴訟費用ハ原告ノ負擔タル様判決ヲ求ムト申立テ其事實トシテ陳辯シタル要旨ハ被告會社ハ原告カ主張スル如ク原告ノ父岩間權次郎ハ明治三十二年一月十八日ニ拂込ムヘキ保險料ヲ其拂込期限後六十日ノ猶豫期間内ニ之カ拂込ヲ爲サザリシヲ以テ其猶豫期限ノ經過ト同時ニ同號證ノ保險契約ハ乙第二號證保險規則ノ規定ニ依リ已ニ解除セラレタルモノナレハ被告會社ハ本訴ノ請求ニ應スヘキ謂レナク尤モ右保險料ハ同年四月五日午前九時頃被告會社ノ津代理店ヘ拂込アリタルモ其拂込當時ハ已ニ被保人岩間權次郎カ死亡シタル後ニシテ全代理店ヲ欺キ之ヲ受取ラシメタルモノナレハ全代理店カ之ヲ受取リタル意思表示

ハ法律行爲ノ要素ニ錯誤アリテ無効ノモノナルノミナラス元來全代理店ハ右猶豫期限ヲ經過シタル者ニ對シ新ニ前契約ト同一ノ保險契約ヲ締結シ又ハ前契約ヲ回復若クハ繼續セシムル契約ヲ締結スル權限ナキハ勿論保險料ヲモ受取ヘキ權限ナキモノナレハ之ヲ受取リタルコトアルモ固ヨリ何等ノ效果ヲモ生セサルモノニシテ被告會社カ被保人ノ身體ニ異狀ナキヲ認メ之ヲ承諾シタル場合ニ於テ始メテ前契約ト同一ノ保險契約ヲ成立セシメ又ハ前契約ヲ回復若クハ繼續セシムル效果ヲ生スルコトアルヘキモ全代理店カ右保險料ノ受取方ニ付テハ被告會社ニ於テ未タ之ヲ承諾セザルモノナレハ原告カ被告會社ニ對シ本訴ノ請求ヲ爲スハ不當ナリト云フニ在リ

理由

原告ノ父亡岩間權次郎ハ被告代理人カ主張スル如ク乙第二號證被告會社ノ保險規則ヲ承諾ノ上被告會社ト甲第一號證ノ保險契約ヲ締結シタルモノナルコトハ原告カ其成立ヲ認ムル乙第一號證生命保險申込證書ニ其旨記載アルニ依リ明瞭ナリ而シテ乙第二號證被告會社ノ保險規則第五章第四條ニハ保險料ニ付期日後六十日ヲ經テ尙ホ保險料ヲ拂込マサルトキハ本社ハ解約ト見做スヘシト明記シアルヲ以テ被告代理人カ主張スル如ク被告會社ヨリ被保人ニ對シ別ニ契約解除ノ意思表示ヲ爲スヲ要セス被保人カ拂込期日後保險料ノ拂込ヲ爲サシテ六十日ヲ經過スルトキハ其期限ノ經過ト全時ニ當然保險契約ハ解除セラレモノト解釋シ得ヘク從テ被保人岩間權次郎カ被告會社

ニ對シ明治三十二年一月十八日ニ拂込ムヘキ保險料ヲ其期日後六十日以内ニ拂込マザリシコトハ原告代理人ノ認ムル所ナレハ其六十日ノ期限ノ經過ト同時ニ甲第一號證ノ契約ハ當時已ニ解除セラレタルモノト認メサルヲ得ヌ尤モ其後被告會社ノ津代理店カ右延滞保險料ヲ受取リタル事實ハ双方ノ爭ナキ所ニシテ之ヲ認メ得ヘキモ全代理店カ被告會社ニ代リテ一旦解除セラレタル前保險契約ヲ回復若クハ繼續セシムル契約ヲ締結スル權限アリト認ムルヘキ證左ナク被告代理人ニ於テモ之ヲ認メサルニ依リ全代理人カ主張スル如ク全代理店ハ結局受取ルヘカラサルモノヲ受取リタルマテニ過キスシテ之ヲ受取リタルカ爲メ被告會社ニ對シ何等ノ效果ヲ生セサルモノト斷定セサルヲ得ヌ因テ主文ノ如ク判決スルモノナリ

明治三十三年十一月七日

安濃津地方裁判所民事部

裁判長判事 聡 孚 志 判事 多 湖 實 判事 寺 澤 健 吉

附 言

本判決ハ代理店ノ權限ヲ理由トシテ被告ノ勝訴ニ判決シタリト雖トモ是レ不當ナリト言ハサルヘカラス何トナレハ假ニ此事實カ會社ノ本店ニ起ルトスレハ保險者ハ保險金ヲ支拂ハサルヘカラサルカ故ナリ然レトモ縱令回復ヲ承諾スルノ權限ヲ有スル本店ニ於テモ猶豫期間ヲ經過シテ保險契約

全然無効ニ歸シタル後保險料ヲ拂込ムハ被保險者カ生存セルコトヲ前提シテノコトニシテ保險者カ保險料ヲ受取ルモ亦之ヲ前提シテノコトナリ被保險者既ニ死亡シテ在ラサルコトヲ知ラハ何レノ保險者カ之ヲ受取ルノ愚ヲ爲サンヤ故ニ萬一之ヲ受取リタラハ契約ヲ繼續セシムル積ニアラスシテ錯誤ナリ本判決モ亦此理由ニ據ランコトヲ望ムナリ

(五十) 藤ノ木ハツ對北海生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

- 甲 保險契約ノ當時被保險者カ惡意ニ因リ心臟痙攣症ヲ告ケサリシヲ以テ契約ハ無効ナリ
- 乙 心臟痙攣症ハ發作間歇ニ方リテハ本人ノ告知ナシニ醫師ノ發見シ得ヘキモノニアラス故ニ該契約ノ無効ヲ妨ケス

判決正本

函館區豐川町四十八番地平民無職

原告 藤ノ木ハツ

全上 ハツ養母

法定代理人 藤ノ木フユ

函館地方裁判所々關辯護士

右訴訟代理人 三 坂 交 吉

北海道小樽區入舟町四十五番地

被告 北海生命保險株式會社

右代表者 高野源之助

札幌地方裁判所々關辯護士

右訴訟代理人 中川一介

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付判決スル事左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔タルヘシ

事 實

原告主張ノ要旨ハ原告ノ實父上野丈助ハ其生前明治三十二年十二月二十四日附ヲ以テ自己ヲ被保險人トシ原告ヲ被保險金受取人トシ保險金壹千五百圓ノ終身生命保險契約ヲ被告會社ト函館ニ於テ締結シタリ而シテ被保險人タル原告ノ實父上野丈助ハ明治三十三年二月五日病ノ爲メ函館病院ニ於テ死亡シタルニヨリ原告ハ契約ニ基キ被保險金ノ支拂ヲ請求シタルモ被告會社ハ之ニ應セサルニヨリ本訴ニ及ヒタル次第ニシテ原告ニ於テ被告會社ニ支拂ヘキ被保險料未納金六拾六圓拾五錢ヲ控除シ其殘金壹千四百參拾參圓八拾五錢ヲ支拂ヘキ旨ノ判決ヲ求ムト云ニアリテ甲第一號證ヲ提出シテ立證セリ

被告答辯ノ要旨ハ原告實父上野丈助カ其ノ生前明治三十二年十二月二十四日自己ヲ被保險人トシ原告ヲ被保險金受取人トシテ保險金壹千五百圓ノ終身生命保險契約ヲ被告會社ト締結シタルコト並ニ上野丈助カ明治三十三年二月五日病ノ爲メ死亡シタルコトハ事實ナリ然ルニ上野丈助ハ明治三十二年十一月廿一日ヨリ病ニ罹リ十二月十日醫師永井貞之氏診斷ノ結果心臟痙攣病トシテ全人及家族共ニ注意ヲ受ケ當時ノ痙攣發作一日二三回アリシニモ不拘會テ生命保險契約ヲ爲シタルコトナキ身ニシテ遽ニ保險申込ヲ爲シ十二月十二日申込ノ際被告會社診斷醫ノ診查ヲ受ルニ當リ共ニ其病症ヲ告ケサリシハ惡意ニ非サレハ重大ナル過失ニ因リ重要ナル事實ヲ告ケサリシモノナルカ故ニ保險契約ハ當然無効ニ歸シタルモノナリ尙ホ當時ノ被保險人ノ疾病ハ心臟痙攣症ニシテ其發作時ニハ之ヲ認メ得ヘキモ其間歇時ニ於テハ之ヲ確認スル頗ル至難ニシテ多クハ爲シ難キコトニ屬スルカ故ニ當時診查醫ノ之ヲ發見シ得サリシモ決シテ被告ニ於テ過失ノ責ニ任スヘキモノニ非ス故ニ被告會社ハ原告ニ對シテ保險金ヲ支拂ヘキ義務ナキヲ以テ原告ノ請求ヲ棄却スル旨ノ判決ヲ求ムト云ニアリテ第一號乃至六號證人及鑑定人ノ陳述ヲ以テ立證セリ

理 由

原告ノ實父上野丈助カ其生前明治三十二年十二月二十四日自己ヲ被保險人トシ原告ヲ被保險金受取人トシ保險金壹千五百圓ノ終身生命保險契約ヲ被告會社ト締結シタルコト並ニ上野丈助カ明治三十三年二月五日病ノ爲メ死亡シタルコトハ被告ノ是認スル處ニシテ本訴所爭ノ要點ハ第一、原告實父上野丈助カ三十二年十一月以降心臟部ノ病症ニ罹リ居ルコトヲ知リナカラ重大ナル過失ニヨリ被告會社ニ告ケサリシヤ否第二、右ノ病症ハ被告會社ニ於テ之ヲ知リ得ヘキモノナリシヤ否ノ二點

ニ歸着ス依テ以下項ヲ分ツテ説明スヘシ

第一、原告實父上野丈助カ明治三十二年十二月十日心臟痙攣症ニ罹リ居リシコトハ證人永井貞之ノ證言ニヨリ明了ニシテ全人カ十二月十日即チ最初診察ノ當日右病症ハ二回發作シ其當時、丈助ニ對シ心臟ニ病症アル旨ヲ告ケ家族ニハ充分ニ保養スヘキ様注意シ服藥セシメシ旨ノ陳述ニ徴スレハ當時丈助カ其病症ヲ覺知セシノミナラス原告カ其成立ニ於テ異議ナキ乙第三號證即チ函館病院醫員主治醫近藤清吉ノ死亡證明書徵候經過ノ欄ニ「昨年十一月來胸骨上部發痛發作アリ(酒不嗜)本年一月十三日當院入院云々」トアリテ右ノ記載ハ丈助カ其自覺的徵候ヲ告ケシニ基キ醫師カ記載セシモノト看做ヘキハ當然ニシテ丈助カ昨年十一月以來已ニ胸部ニ發痛アリシヲ自覺セシモノタリヤ疑ナシ而シテ鑑定人佐藤廉ノ鑑定ニヨレハ心臟部ノ病症ハ諸種ノ病症ノ内重キ種類ニ屬スルコト明了ニシテ丈助カ其病症ヲ被告會社ニ告ケサリシコトハ乙第一號證即チ生命保險申込書中被保險人現今健康ノ狀況ノ項ニ「目下健康ト自覺ス」トアルト證人立澤峰太郎ノ證言ニ全人カ被告會社ノ囑托醫トシテ丈助ヲ診察スルニ當リ毫モ異狀アリシ旨丈助カ告ケサリシトアルニヨリ之ヲ認定シ得ヘシ然ラハ丈助カ昨年十一月以來胸部ニ發痛ヲ自覺シ十二月十日永井貞之ノ診察ヲ受クルニ當タリ心臟ニ病症アルコトヲ告知セラレ服藥セシニ拘ハラヌ保險契約ノ當時其病狀ヲ被告會社ニ對シテ告ケサリシコトハ仮令丈助ノ惡意ニ出タルモノニ非ストスルモ重大ナル過失ニヨリテ重要ナル事項ヲ告ケサ

リシモノタルコト毫モ疑ナシ

第二、然レモ右ノ病症ハ被告會社ニ於テ之ヲ知り得ヘキモノナリシヤ否先ツ鑑定人佐藤廉ノ鑑定ニヨレハ心臟痙攣症ハ其發作時ニ於テハ充分ニ之ヲ診察シ得ルモ其間歇時ニ於テハ病者ヨリ自覺的徵候ヲ告知セラル、ニ非サレハ他覺的ニ之ヲ鑑識スルハ困難ナルコト明了ナリ而シテ證人立澤峰太郎ノ證言ニヨレハ全人カ被告會社ノ囑托醫トシテ丈助ヲ診察スルニ當リ自覺的徵候ヲ告ケラレサリシ爲メ其痙攣症ヲ識スル能ハサリシコトモ亦明了ナリ次ニ鑑定人タル佐藤廉ノ供述ニ全人カ本年一月十三日丈助ヲ診察スルニ際シ僅カニ心尖ノ肥大ナルト心音ノ微弱ナルヲ覺知セシノミニシテ此ノ如キ兆候ハ果シテ一月以前ニ於テ之ヲ他覺的ニ認識シ得ヘキヤ否ハ之ヲ判斷スル能ハストアルニヨリ見レハ被告會社ノ囑托醫タル立澤峰太郎カ十二月十二日丈助ヲ診察スル際ニ於テ其心臟部ニ異狀アルヲ他覺的ニ認識セサリシハ全人ニ於テ過失アリシモノト認ムルヲ得ス從テ又被告會社ニ於テ其病症ヲ知り得サリシモノニシテ何等ノ責任ナキモノタリ

以上説明スル如ク之ヲ要スルニ被保險人タル上野丈助カ保險契約ノ當時其重要ナル事項タル自己ノ病症ヲ被告會社ニ告ケサリシハ重大ナル過失ニシテ又其病症ハ被告會社ニ於テ之ヲ知ルコトヲ得ヘカラサリシモノナルヲ以テ商法第四百二十條ニヨリ右保險契約ハ當然無効ニ屬シ本訴原告ノ請求ハ毫モ其理由ナキモノトス依テ主文ノ如ク判決セリ

明治三十三年十二月一日

國館地方裁判所民事部

裁判長判事 齊藤金平 判事 遠藤恭太郎 判事 和田哲也

附言

本判決ハ商法第四百廿九條ノ最完全ナル適用ニシテ非難スヘキ點ナシ

(五十一) 愛國生命保險株式會社對淺妻駒吉事件(始審)

判決要旨

既往症及現症ノ自覺ヲ隠蔽シテ締結シタル保險契約ハ無効ナリ故ニ一旦支拂ヲ受ケタル保險金ハ之ヲ返還スヘシ

判決正本

東京市日本橋區本村木町二丁目二番地

原告 愛國生命保險株式會社

右代表者會社取締役

三浦篤次郎

右訴訟代理人辯護士

安原吉政

新潟縣四浦原郡金卷村平民農

被告 淺妻 駒吉

右訴訟代理人辯護士

高橋吉五郎

右當事者間ノ明治三十三年(第六四號)保險金返還請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決スル左ノ如シ

被告ハ金四百九十三圓七十六錢ヲ原告ヘ返還ス可シ
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

事實

原告陳述ノ要旨ハ被告ハ明治三十二年四月六日被保人横木徳八ノ生命保險ヲ申込ミ甲一號證ノ通リ被保人ニ關スル身上ノ關係ヲ明記シタル申込書ヲ差出シタルヲ以テ原告ハ同月十二日尋常終身保險金額五百圓ノ契約ヲ取結ヒタリ而シテ被保人横木徳八ハ明治三十二年七月二十二日死亡シタルヲ以テ被告ヨリ甲二號證ノ通リ保險金支拂請求アリタルヲ以テ原告ハ其請求ニ應シ未収掛金六圓廿四錢ヲ差引キ金四百九十三圓七十六錢ヲ支拂ヒタリ然ルニ其後原告ハ被保人横木徳八ノ死因及經過ニ付取調ノ結果保險申込書第十四項被保人現今ノ疾病有無及第十五項被保人ノ既往症ニハ何等ノ記載ナキニ拘ラス幼時天然痘及麻疹ヲ經過シ最近ノ既往症トシテハ明治三十二年一月十五日頃ヨリ同月廿九日マテ居村大字上和田醫師島野喜一郎ノ治療ヲ受ケ血痰ヲ吐ケルコトアリ同三月七日更ニ新潟病院ノ診察ヲ受ケ又同月廿八日西浦原郡金卷村醫師萩野練平ノ診察ヲ受ケ同人ハ其咯血ヲ検査シ肺結核ト思量シ念ノ爲メ新潟病院ヘ其咯血ヲ送付シ其検査ヲ依頼シタルコトアリテ一月以來肺患ニ罹リ居リタル事實ハ判明ナリ依テ保險申込書第十四項第十五項ニ付テハ事實ヲ隠蔽シテ之レヲ記載セサリシモノト思料セリ而シテ當會社保險規則第三十九條ニハ終身及養老ノ各種保險契約ハ左

ノ場合ニ於テ全ク無効ニ屬シ本會社ハ一切ノ責任ヲ解除シ且既ニ拂込ミタル掛金ノ拂戻ヲ爲サス一
 保險申込證書記載ノ事項並ニ本會社ノ醫員ニ對スル陳述ニ詐僞又ハ隱蔽ノ廉アリタル時ト有之被告
 ハ右規則ヲ承認ノ上保險契約ヲ申込ミタルモノニシテ前記ノ如ク申込證書ニ隱蔽ノ事實アル以上ハ
 本件當事者間ニ於テ締結シタル保險契約ハ無効ノモノナリ然ルニ原告ハ被告ヨリ保險金拂渡請求ノ
 當時右事實ヲ發見スルヲ得サリシ爲メ保險金ヲ支拂ヒタルモノナレハ被告ニ對シ之カ返還ヲ請求ス
 ル次第ニ付被告ハ金四百九拾參圓七拾六錢ヲ原告ニ返還スヘシトノ判決ヲ受ケタシト云フニ在リテ
 甲一號乃至九號證ヲ提出シ且證人トシテ萩野練平ノ喚問ヲ申請シタリ

被告答辯ノ要領ハ被告ハ親族横木徳八ノ生命保險ヲ原告ヘ申込ミ徳八死去セシニ因リ本訴原告ノ請
 求スル金圓ヲ受取タルニ相違ナキモ元ト被告ハ原告會社ノ出張員及ヒ其代理店ノ勧誘ニ依リ親族横
 木徳八ノ生命保險ヲ申込ミ原告ハ之ヲ承諾シ直ニ被保人徳八ニ就キ親シク同人ノ身上ニ關スルコト
 ヲ聞糾シ且原告會社ノ囑託醫松井信吉ヲシテ身体ノ検査ハ勿論既往及ヒ現在ノ疾病等ヲ取糾シタル
 後差支ナキニ付保險申込證書ニ調印スヘント云フニヨリ之レニ調印シタル次第ニシテ被告ハ原告ニ
 對シ毫モ詐僞ノ陳述ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルコト之レナキヲ以テ從テ被告ト原告トノ間ニ締結
 シタル保險契約ハ無効ニ屬スヘキモノニアラス依テ原告ノ請求ハ不當ニ付却下セラレタシト云フニ
 在リテ證人トシテ渡邊平治松井信吉ノ喚問ヲ申請シ且甲第九號證ヲ引用シタリ

理由

被告ニ於テ被保人横木徳八ノ死亡ニ依リ原告會社ヨリ保險金四百九拾參圓七拾六錢ヲ受領シタルコ
 トハ同人ノ自認スル處ナリ依テ是ヨリ當事者間ニ締結セラレタル保險契約カ有效ナルヤ否ヤノ點ニ
 付之ヲ按スルニ甲一號證即チ保險契約人タル被告及被保人タル横木徳八兩名ヨリ原告會社ニ差入レ
 タル生命保險申込書ノ末文ヲ見ルニ「右ハ今般貴社保險規則承認ノ上保險契約申込候ニ付テハ前記
 ノ諸項相違無之候也」トアルヲ以テ被告並ニ徳八ハ原告會社ノ規則ヲ熟知ノ上被告ハ原告會社ト契
 約ヲ爲シタルモノト云ハサルヘカラス然リ而シテ原告會社ノ規則タル甲第三號證第三十九條ニ據
 レハ終身及ヒ養老ノ各種保險契約ハ左ノ場合ニ於テ全ク無効ニ屬シ本會社ハ一切ノ責任ヲ解除シ云
 々一保險申込證書記載ノ事項並ニ本會社醫員ニ對スル陳述ニ詐僞又ハ隱蔽ノ廉アリタル時ト規定シ
 アリ然ルニ被保人タル横木徳八ハ保險契約ノ數月以前肺病ニ罹リ醫師ノ診斷及ヒ治療ヲ受ケタルコ
 トハ證人萩野練平ノ陳述及ヒ甲四號乃至六號證ニ徴シテ明カナルニ拘ラス甲一號證中被告現今ノ
 疾病有無トアル欄内及被保人ノ既往症トアル欄内ニハ前記疾病ニ罹リタル事實ニ付何等ノ記載ナク
 又原告會社ノ囑託醫タル松井信吉カ徳八ノ身軀検査ヲ爲シタル際同人ハ信吉ヨリ既往症ノ有無ニ付
 尋問ヲ受ケナカラ之ニ對シ前記疾病ニ罹リタル事實ヲ告ケサリシコトハ甲第九號證診查報狀ニ徴シ
 テ明カナリ左スレハ被保人タル徳八ハ生命保險ニ於ケル最も重要ナル事項即チ保險者ノ決意ニ重

大ナル關係ヲ有スル前記事項ヲ隱蔽シタルモノト認定セサルヲ得ヌ而シテ原告會社ノ規則第三十九條ニハ右ノ如キ事實ノ隱蔽ハ保險契約人又ハ被保人何レニ存スル場合ナルカ區別之ナキモ被保人自カラ保險契約人ナル場合ハ格別保險契約人並ニ被保人アル場合ニ於テハ被保人ノ既往症ノ如キ被保人一身ニ關スル事柄ハ保險契約人ニ於テ之ヲ了知セサルコト往々之アルヘキヲ以テ右ノ如キ生命保險契約ニ重要ナル關係ヲ有スル事項ニ付テハ其隱蔽何レニ存スルヲ問ハス契約人ハ其責任ヲ免カル、コトヲ得サルモノト認ムヘキハ相當ニシテ契約人ハ右等ノ事實ヲ知ラサリシユヘ契約書ニ之ヲ記載セサリシハ或ハ單ニ契約人ハ契約書ニ調印セシ迄ナリトノ無責任ナル辭柄ヲ以テ契約上ノ無責任ヲ免カル、コトヲ得サルハ保險契約ノ性質上ヨリ見ルモ又條理ニ於テモ然ラサルヘカラサルモノト断定ス然ラハ即チ原告會社ノ規則第三十九條ノ規定ニ依リ甲一號證ノ契約ハ全然無効ニ屬スルモノナリト認定スヘキハ相當ナルニ付原告ニ於テ其無効ヲ原因トシ該無効ノ契約ニ基キ給付シタル金圓ノ返還ヲ求メタル本訴請求ハ至當ナルヲ以テ被告ハ之レカ返還ヲ拒ムヘキ理由ナキモノトス而シテ本訴ハ元ト三浦篤次郎ニ於テ原告會社ノ支配人トシテ之ヲ提起シ後チ取締役ト訂正シタルモ被告ニ於テ該訂正ニ異議ナキノミナラス右ハ民事訴訟法第九十六條第一號ニ依レルモノト認ムルヲ以テ其手續ニ付テハ瑕瑾ナキモノトス以上説明スル如クナルヲ以テ訴訟費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決セリ

明治三十三年十二月廿七日

新潟地方裁判所民事部

裁判長判事 千谷 泰次郎

判事 水島川 唯一郎

判事 吉田 錄作

附 言

本件ハ詐欺保險既遂ノ後保險者カ其證據ヲ發見シテ保險金ノ取戻ヲ請求シタルニアリ事實詐欺ニ相違ナクハ本判決ハ固ヨリ至當ナリ而シテ會社ハ同時ニ同一被保險者ニシテ別人(鈴木清吉)ノ契約者タルモノニ對シテ本件同様ノ訴訟ヲ提起シ金三百九十五圓八厘ノ返還ヲ受クヘキ判決ヲ受ケタレトモ同裁判所ニ於ケル同文判決ナレハ之ヲ省ケリ

(五十二)

本田キタ對護國生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

申込書ニ詐欺隱蔽ノ點アラハ其事ノ保險契約ニ重要ナルト否トニ關セス契約ハ無効ナリ

判決正本

富山縣富山市室屋町

原告

本田 キタ

右訴訟代理人辯護士

樺島 信郷

全 上

富田 信英

東京市京橋區木挽町五丁目

護國生命保險株式會社取締役

被告

高島・嘉右衛門

右訴訟代理人辯護士

宮古 啓三郎

右當事者間ノ保險金請求訴訟事件ニ付キ判決スルコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ハ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔タル可シ

事 實

原告一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ對シ保險金千圓ノ内延滞保險料金八圓十四錢及一ヶ月百分ノ一ノ利子並ニ保險金高百圓ニ付キ三圓以下ノ金額ヲ扣除シ明治三十三年十月十二日ヨリ判決執行終局ニ至ルマテ年五分ノ利子ヲ付シテ支拂フ可ク訴訟費用ハ被告ノ負擔タルヘシトノ判決ヲ求ムト云ヒ請求ノ原因事實ハ原告ノ弟亡白石松次郎ハ松次郎自身ヲ被保人ト爲シ原告ヲ保險金受取人トシテ明治三十三年六月四日被告會社ト養老生命保險金千圓ノ契約ヲ締結シ全年全月八日全年九月四日全年十二月四日ノ三回契約ノ保險料ヲ拂込ミタル處松次郎ハ意外ノ疾病ニ罹リ明治三十三年三月九日富山市室屋町十二番地ニ於テ死亡セリ由テ被告ハ保險金ノ内延滞保險料等ヲ控除シ起訴ノ日ヨリ法定利息ヲ附シ支拂フベキ義務アルモノトス本訴ニ於テ被告ハ第壹松次郎ノ保險申込書職業欄ニ賣藥商ト記載シタルハ全ク偽リノ處爲ナリト抗辯スルモ松次郎ハ當時一定ノ職業ヲ有セズ時々富山市千石町ノ賣藥商田口義貞及富山縣上新川郡堀川村大字布瀬村賣藥商平野吉次郎方へ出入シ賣藥事業ニ

従事シタルヲ以テ其實際ニ基キ右ノ記載ヲ爲シタルニ過ギヌ第二全申込書ニ已往症等ヲ隱蔽シタルト主張スルモ故意ニ之レヲ隱蔽シタルニ非ラズ第三松次郎ガ他ノ保險會社ト保險契約ヲ爲シナガラ之ヲ隱秘セリト云フモ此等ノ事項ハ契約成立ニ何等ノ影響ヲ生ズベキモノニ非ラズ要スルニ被告ノ抗辯ハ一モ其理由ナシト云フニ在リ

被告ハ原告ノ請求ヲ棄却シ訴訟費用ハ原告ノ負擔トスヘキ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シ其抗辯ノ事實ハ被告會社ノ保險規則ハ他ノ保險會社ト同ジク保險ノ原理ニ基キ申込證書ニ詐僞又ハ隱蔽ノ廉アルトキハ保險契約ヲ無効トシ已ニ拂込ミタル保險料ハ返付セザル定メナル處本件ノ保險契約人ニシテ被保人タル松次郎ガ保險契約ヲ爲スニ當リ固ヨリ右規則ヲ承認シタルモノナリ然ルニ同人ノ申込證書ニハ以下三點ニ於テ詐僞隱蔽ノ廉アリ第一松次郎ハ版摺職ナルニ拘ハラズ賣藥商ト記載シ第二全人カ保險申込ヲ爲シタル以前明治三十一年九月廿五日ヨリ全年十月十七日迄醫師大内彌高ノ治療ヲ受ケ其病症ハ肺ニ關スル著患ナルコトハ爭フヘカラス而シテ其死亡ハ此病症進行ノ結果ナリ然ルニ同人ハ其申込證書ニ此已往症ヲ隱蔽シ又全人カ北陸生命保險會社ニ差出シタル生命保險申込書ニ依レハ十四歳ノトキ傷寒ニテ三十日許リ服藥セルコトノ記載アルモ被告ニ差入レタル申込證書ニハ此著患ヲモ隱蔽セリ第三松次郎ハ明治三十一年三月中北陸生命保險會社ト養老保險百圓明治三十二年三月中全會社ト尋常終身保險二百圓全年二月中大阪生命保險會社ト尋常終身保險四

百圓ノ保險契約ヲ爲セルニ申込證書ニハ此事實ヲ隱蔽シタリ右三點ハ何レモ獨立シテ保險契約無効ノ原因タルヘキモノナレハ本件ノ保險契約ハ何等ノ效力ナシ特ニ松次郎ハ曩ニ重罪ノ刑ニ處セラレタル如キモノナレハ初メヨリ其病症永ク生命ヲ保ツ能ハサルヲ察知シ保險金受取人ニシテ不正ニ利得セシメン爲メ被告會社ヲ欺キ契約ヲ結ハシメタルモノナルコト明カナレハ原告ノ請求ニ應スル能ハスト云フニアリ

理 由

乙第二號證被告會社ハ保險規則第九章第三條ニ據レハ保險申込證書ニ詐僞又ハ隱蔽ノ廉アルトキハ保險契約ハ無効ニ屬スルコトヲ規定シ保險契約人ニシテ且被保險者タル松次郎ハ乙第一號證ノ保險申込證書ニ右規則ヲ認諾シテ申込ヲ爲ス旨記載セリ去レハ申込證書ニ詐僞又ハ隱蔽ノ點アラハ其事ノ保險契約ニ重要ナリト否トニ關セス保險契約ハ無効ニシテ被告ニ於テ保險金支拂ノ義務ナシ然リ而シテ第一同申込書ニ被保險者ノ職業ヲ賣藥商ト記載シタルモ乙第四號證富山市役所ノ乙第八號證富山縣警察部ノ各證明書ニ憑スルニ松次郎ハ賣藥商ノ免許ヲ受ケタルヲナク殊ニ全人カ北陸生命保險會社ニ差入レタル保險申込書第七號證ノ一、二、ニハ其職業ヲ版摺職ト記述シ且證人熊本甚四郎ハ全人カ會テ版摺ノ業務ヲ執リタル旨ヲ陳供スルニ徵シ其職業ハ賣藥商ニアラスノ版摺職工ナルヲ認メ得可シ尤モ乙第七號證ハ原告ノ否認ニ係ルモ八木房吉ノ證言ニ依リ信憑スルニ足ル第二乙

第一號證ニ被保險者ノ已往病症ハ八歳ノトキ天然痘幼年ノトキ麻疹ヲ經過ストノミアルモ大内彌高ハ松次郎カ乙第九號證ノ病症ニ罹リシト證言セリ此病患ハ著シキモノナルニ此已往症ヲ告ケス第三松次郎カ他ノ保險會社ト生命保險契約ヲ締結シ居タルハ乙第三號證全第七號證並ニ山崎祐次郎八木房吉ノ其證言ニ照シ明確ナル事實ニ屬ス以上第一乃至第三ハ最モ顯著ノ事實ナルニ保險者タル被告ニ對シ之ニ異ル不實ノ事ヲ告ケ若クハ眞事實ヲ告ケサルハ乙第二號證ニ所謂詐僞又ハ隱蔽ノ所爲アルモノト斷定セサルヲ得ス乃チ被告ノ抗辯ハ正當ナリトス

明治三十四年二月五日

富山地方裁判所民事部

裁判長判事 山 内 璞 判事 渡 邊 浩 判事 能 勢 寬 吾

附 言

曩ニ東京控訴院判決(十七)ニハ申込書ニ記載ノ事項ハ保險契約ニ重要ナルモノニ限り其不陳ヲ以テ無効ノ原因トシ而シテ他會社トノ契約ノ有無ノ記載ノ如キハ重要ナル事項ニアラスト判決シタリシカ本判決ハ之ト兩極端ニ走り申込書ニ詐僞隱蔽ノ點アラハ之カ重要ナルト否トニ關セス契約ヲ無効ナラシムトシ職業ノ虛陳既往症ノ不陳ニ加フルニ他會社トノ契約ニ付テ告知ヲ爲サ、リシコト總テ契約無効ノ原因トセリ何ソ相背馳スルノ爾ク甚シキヤ彼カ是ナレハ此カ非ナリ一ノ國家一ノ法律

ノ下ニ生息スル人民ニシテ幸ト不幸ト此ノ如ク相反スルハ何故ソヤ法理ノ不統一法律の知識ノ不發達轉々慨嘆ニ堪エサルナリ

(五十三) 上谷八次對北陸生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ契約ノ當時重患ニ罹レルニモ拘ハラス保險申込書ニ疾病ノ感覺ナシト記載シタルハ保險契約ノ重要ナル事項ニ付不實ノコトヲ告ケタルモノニシテ該契約ハ無効ナリ

判決正本

石川縣金澤市池田町登番丁廿七番地平民職業不詳

富山縣富山市袋町拾番地

原告 上谷八次
右訴訟代理人辯護士 米田直作

被告 北陸生命保險株式會社
右社長 中田清兵衛
右訴訟代理人辯護士 江守精一

右當事者間明治三十四年(第二四號)保險金支拂請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告代理人一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ對シ被保險人亡上谷リワノ尋常終身生命保險金壹千圓ニ其不履行ニ依ル賠償トシテ明治三十三年十二月ヨリ本案判決執行迄年六分ノ割合ノ損害額ヲ加ヘテ支拂フヘントノ判決ヲ求ム事實上ノ供述ハ原告ハ自己ノ養母上谷リワヲ被保險人トシ生命ニ對シテ被保險人ノ死後壹週間内ニ被告會社ヨリ其保險金壹千圓ヲ被保險人ノ養子ニシテ保險金受取人タル原告ニ支拂フベキ約旨ヲ以テ明治三十三年七月廿八日被告會社ト尋常終身保險契約ヲ締結シタルモノトス而シテ原告ハ便宜上半ケ年拂ノ保險料拂込時期ヲ撰ヒ明治三十三年九月四日金貳拾參圓八拾四錢ヲ拂込ミタルニ被保險人上谷リワハ同年十月廿四日疾病ニ依リ死亡セリ依テ原告ハ其約旨ニ基キ生命保險金壹千圓ヲ請求セシモ被告ハ應ゼサルヲ以テ本訴ヲ爲スト云フニ在リテ甲第壹號乃至參號證ヲ提出シ中村宇三郎辻庄松鈴木忠順ノ人證ヲ申請セリ被告代理人一定ノ申立ハ原告ノ請求ヲ棄却ストノ判決ヲ求ム事實上ノ供述ハ被告ハ原告ヨリ其供述スルカ如ク生命保險ノ申込ヲ受ケ又保險料半ケ年分貳拾參圓八拾四錢ヲ領收シタルハ事實ナリ而シテ明治參拾參年拾壹月原告ヨリ右上谷リワノ死亡證明書ヲ添付シ保險金請求書ノ交付ヲ受ケ之ヲ檢閱スルニ被保險人ハ安政元年八月二日生ナルコト及明治三十三年三四月頃ヨリ引續キ病中ナリシコトヲ認メ原告ノ申込書ト大ナル差異アルコトヲ發見シタリ仍テ捜査シタルニ右リワハ明治三十三年五月廿三日ヨリ子宮癌腫ニテ金澤市正善堂

病院ニ入院シ六月卅日不治ノ姿ニテ退院ノ上八月十二日迄外來診療ヲ受ケ居リタルモノニシテ其中
込書ハ全ク詐欺又ハ隠蔽ノ事項アル事判明セリ即チ本件保險契約ハ當然無効ナリト云フニ在リテ乙
第壹號證乃至六號證ヲ提出シ高口保太郎ノ人證ヲ申請シタリ

理由

案ヌルニ亡上谷リワハ明治三十三年五月下旬子宮癌腫ノ爲メ金澤市正善堂病院ニ入院シ六月下旬ニ
不治ノ姿ニテ退院シ尙ホ八月十二日迄同院ニ於テ診療ヲ受ケアリシ事實ハ證人高口保太郎ノ供述及
乙第三號證ニ徴シテ明瞭ニシテ尙ホ乙第二號及甲第三號モ相符合スル記載ヲ具フルニ依リ一層明確
ナリト認ム斯ノ如ク亡リワハ當時頗ル重患ニ罹リアルニ不拘明治三十三年七月二十一日即リワノ正
善堂病院ニテ診療ヲ受ケツ、アル日時ニ在リテ原告ハ乙第一號保險申込書ニ於テ被告ニ對シ現今疾
病ノ感覺ナシト陳述シタル行爲ハ少ナクトモ原告ノ重過失ニ因リ保險契約ノ重要ナル事項ニ付キ不
實ノ事ヲ告ケタルモノト認ムルニ十分ナリトス由テ本訴保險契約ハ商法第四百廿九條ニ依リ無効ナ
ルカ故ニ之ニ基ク原告ノ請求ハ其當ヲ得サルモノト爲シ主文ノ如ク判決スルモノトス

明治三十四年六月廿九日

金澤地方裁判所民事部

裁判長判事

入江良之

判事 今村勝次

判事 小川信行

五十四 上谷八次對北陸生命保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

甲 第一審判決ニ同シ

乙 保險者カ保險料ノ割増ヲ請求シテ保險契約ヲ締結シタルコトハ之ヲ以テ被保險者ノ隠蔽シ
タル疾病ヲ發見シテ知り居レリト認ムルコトヲ得ス

判決正本

控訴人石川縣金澤市池田町壹番丁廿七番地平民無職粟

被控訴人富山縣富山市袋町拾壹番地

右訴訟代理人辯護士 上谷八次 米田直作

北陸生命保險株式會社 右法定代理人取締役 中田清兵衛
右訴訟代理人辯護士 江守精一

右當事者間ノ保險金支拂請求ノ控訴事件ニ付當院ハ判決スルコト左ノ如シ

主文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事實

控訴人ハ第一審判決ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ對シ亡上谷リワノ尋常終身生命保險金壹千圓ニ其

不履行ニ依ル賠償トシテ明治三十三年十二月ヨリ此判決執行濟迄一ケ年六分ノ割合ノ損害金ヲ加ヘテ支拂フヘシトノ判決ヲ求ムル旨申立且ツ被控訴會社ハ保險契約當時ニ於テ被保險人上谷リツカ疾病ニ罹リ居ルコトヲ知悉セルニ依リ其保險料ヲ五ケ年ノ割増トシ契約ヲ締結シタルモノナリト供述シ被控訴人ハ本件控訴ハ之ヲ棄却ストノ判決ヲ求ムル旨申立且ツ原判決事實摘示中「被告ハ原告ヨリ其供述スル如ク」トアルヲ「被告ハ原告ヨリ明治三十三年七月廿一日」ト訂正シ又タ保險契約申込當時ニ於テ上谷リツカ疾病ニ罹リ居リタルコトハ之ヲ知ラスト供述シタル外當事者事實上ノ主張ハ原判決ニ摘示スル處ト同一ナルヲ以テ之ヲ引用ス

理由

按スルニ第一控訴人ハ被保險人上谷リツカ保險申込ヲ爲ス當時ニ於テハ身體健全ナリシヲ以テ疾病ヲ隠蔽シタルコトナシト云フモ控訴人カ其主張ヲ證明スル甲第四號證ハ被控訴會社ニ於テ之ヲ否認スルノミナラス被保險人上谷リツカ子宮癌腫ニテ明治三十三年五月廿四日ヨリ正善堂病院ニ入院シ加療中同年六月三十日不治ノ姿ニテ退院シタルモ尙ホ同年八月十二日迄テハ外來治療ヲ受ケ居リタル事實ハ證人高口保太郎ノ供述並ニ乙第三號證ニ徴シ明白ナルニ依リ甲第四號證ハ被保險人上谷リツカ身體健全ナリシコトヲ證明スル證據トシテハ之ヲ採用スルヲ得ス左スレハ被保險人上谷リツカハ保險申込ノ當時即チ明治三十三年七月廿一日前後ニ於テハ子宮癌腫ニテ正善堂病院ニ於テ治療ヲ受

ケツ、アリシニモ拘ラス被控訴會社ニ對シテハ乙第一號證保險申込書ヲ以テ現今疾病ノ感覺ナシト告ケ又タ同會社ノ診査醫ニ對シテハ乙第六號證ノ如ク「メトリチス」ニ罹リ正善堂病院ニ入院加療セシモ三ケ月間ニテ全治シ目下健全ニシテ異常ナシ云云（現今自他覺疾病ナシ）ト告ケタルハ被控訴會社ニ對シ自覺ノ疾病ヲ隠蔽シテ保險申込ヲ爲シ之ニ因リ尋常終身生命保險契約ヲ締結シタルモノト認定ス

第二控訴人ハ假リニ被保險人上谷リツカ保險申込ノ當時ニ於テ其疾病ヲ告ゲサリシトスルモ被控訴會社ハ之ヲ知悉セルニ依リ保險料ヲ五ケ年割増ト爲シタルモノナレハ保險契約ハ有效ナリト云フモ保險契約ニ於テハ保險申込人カ健全ナルモ身體組織ノ強弱ニ因リ保險料ノ割増ヲ以テ契約ヲ締結スルコトアルカ故ニ被控訴會社ニ於テ控訴人ノ主張ヲ否認スル上ハ保險料ノ割増ノミヲ以テ被控訴會社ハ直ニ被保險人上谷リツカ保險申込ノ當時疾病ニ罹リ居リタルコトヲ知悉セリトハ認め難ク從テ控訴人ノ援用スル乙第六號證ハ其主張ヲ證明スルニ足ラサルモノトス加之鑑定人飯塚正平ノ甲第三號乙第三、五號各證ノ記書ヲ基礎トシ診察ヲ遂クルトキハ上谷リツカ子宮癌腫ニ罹レルコトヲ確診スルコト能ハストノ供述ニ參酌セハ被控訴會社カ被保險人上谷リツカノ疾病ヲ知ラスシテ尋常終身生命保險契約ヲ締結シタリトノ供述ハ之ヲ信用スルニ足ルヲ以テ控訴人ノ主張ハ之ヲ採用スルコトヲ得ス

上來説明スル理由ニ依レハ被保險人上谷リヲハ自覺ノ疾病ヲ隠蔽シテ保險申込ヲ爲シタルコト明白ナルノミナラス被控訴會社ニ於テ其疾病ヲ知悉シタル上保險契約ヲ締結シタリトノ事實ノ見ルヘキモノナキカ故ニ同會社ハ上谷リヲ爲シタル不實ノ申込ヲ信シ保險契約ヲ締結シタルモノト認定ス依テ被控訴會社カ乙第一號證並ニ乙第四號證第十四條ノ約款ニ違ヒ保險金支拂ノ義務ナシト云フハ固ヨリ相當ナルニ付本件控訴ヲ理由ナシトシ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

明治三十五年四月十八日

大阪控訴院民事第一部

裁判長判事 石川 正 判事 安井 璞 判事 久田 濟 衆

判事 榊原 周次郎 判事 高木 成 則

附 言

本件判決ハ商法第四百廿九條ノ適用ニシテ第一審第二審共ニ至當ナリ本件ノ如キハ被保險者タルモノカ明ニ保險契約ノ性質ヲ誤解シタルカ又ハ故意ヲ以テ保險金ヲ獲ントシタルニ外ナラス保險思想ヲ不良ナル方向ニ發達セル結果全國到ル處ニ其例ヲ見ルト雖トモ就中富山縣福井縣等ニ多キハ事業ノ統計並ニ裁判ノ統計ノ證スル所以ナリトス

五十五 吉田イト對北陸生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ身躰診査ヲ受ケタル後契約成立前ニ疾病ニ罹リタルコトヲ通知セヌシテ締結シタル契約ハ無効ナリ

判 決

福井縣大野郡鹿谷村志田井番地

原告 吉田 イ ト

右後見人 川 端 正 隆

富山縣富山市殿町

被告 北陸生命保險株式會社

右社長 中 田 清 兵 衛

右取締役 三 田 勝 俊

右訴訟代理人辯護士 江 守 精 一

右當事者間保險金請求事件ニ付判決スル左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告ハ被告ハ金六百圓ヲ原告ニ支拂フベシトノ判決ヲ求ムル旨一定ノ申立ヲ爲シ其事實ハ原告ノ亡

夫會平ハ明治三十三年五月十五日被告ニ保險金額六百圓ノ終身生命保險ヲ申込ミ全年六月十七日ニ於テ保險契約ハ成立シ受取人ハ原告ト定メタリ然ルニ會平ハ全年十一月十五日肋膜炎ニ罹リ其翌三十四年一月十八日終ニ死亡シタルニ依リ原告ハ被告ニ對シ保險金額ノ支拂ヲ求ムルモ被告之ニ應ゼザルヲ以テ本訴ヲ提起スト云フニ在リ

被告ハ原告ノ請求ニ應ゼサル旨ヲ答辯シ其事實ハ本件保險契約ハ之ヲ締結シタルニ相違ナキモ被保險人タル會平ハ申込ミノ當時疾患ニ罹リナガラ之ヲ隠蔽シ申込書ニハ現在疾病ノ感覺ナシト記載シ尙申込ミノ時ヨリ契約成立ニ至ルマデノ間ニ身体ニ異狀ヲ生ジタルニ体格ノ再診ヲ求メザル等保險契約ノ約款違背ノ行爲アリタルヲ以テ本件保險契約ハ無効ニ販シタルガ故ニ被告ハ保險金額支拂ヒノ義務ナシト云フニ在リ

理由

被告ノ申請ニ係ル證人醫師河野徹ハ本件保險契約ノ被保險人タル會平ヲ明治三十三年六月七日ニ於テ初診ヲ爲シ肋膜炎ト認メ全月十八日マデ投藥シタル結果肋膜炎ハ治愈シタルモ尙ホ腸胃カタル并ニ眼病等ノ輕症アリタルガ爲メニ全年七月二日マデ引續キ投藥シタリト證言セリ而シテ其證言ハ別ニ疑ヲ狹ムベキ點ナキニ依リ全ク眞實ナリト認ム抑モ肋膜炎ハ人体ノ貴要部ナルガ故ニ該部ニ炎症ヲ起スガ如キハ頗ル重大ナル身体ノ異狀ト謂ハザルヲ得ス然ルニ乙第一號證即チ保險申込書ニ保險

申込後契約成立前被保險人身体ニ異狀ヲ生シタル場合ニ再診ヲ求メサリシキハ保險契約ハ無効ニ販スヘキ旨ノ記載アリ且ツ本件保險申込ハ明治三十三年五月十五日ニシテ其契約ノ成立シタルハ全年六月十七日ナレハ會平カ肋膜炎ニ罹リタルハ恰モ其中間ノ出來事ナルカ故ニ會平ハ須ラク前掲約款ニ基キ其体格ノ再診ヲ求ムヘキ筋合ナルニ其之ヲ求メサリシ事實ハ原告ノ認ムル處ナリ果シテ然ラハ此點ニ依リ本件保險契約ハ已ニ無効ニ販シ被告ニ保險金支拂ノ義務ナキコト明瞭ナルニ依リ其他ノ爭點ハ別ニ説明ノ要ナク主文ノ如ク判決スルモノナリ

明治三十四年十月廿三日

福井地方裁判所民事部

裁判長判事 前 田 道 一 判事 吉村利三郎 判事 西田 秋 作

(五十六) 吉田イト對北陸生命保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

甲 保險契約ハ當事者間ノ契約ニ因リ第一回保險料ノ拂込ヲ以テ其效力ヲ生セシムルコトヲ得

乙 第一審判決ニ同シ

判決正本

福井縣大野郡鹿谷村志田貳拾番地平民

富山縣富山市殿町貳拾壹番地

控訴人 吉田 イト

被控訴人 北陸生命保險株式會社

右後見人 川端 正隆

右代表者取締役 中田 清兵衛

右訴訟代理人辯護士 竹澤 節藏

右訴訟代理人辯護士 江守 精一

右當事者間ノ保險金請求事件ノ控訴ニ付當院ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴人ハ第一審判決ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ對シ金六百圓ニ明治三十四年七月廿六日ヨリ判決執行濟ニ至ル迄ヲ年五分ノ利息ヲ加ヘ辨濟スヘシトノ判決ヲ求ムル旨申立且ツ控訴人ノ亡夫會平ハ明治三十三年五月五日被控訴會社ニ保險契約ヲ申込ミ醫師ノ診查ヲ受ケ同月廿日ニ至リ被控訴會社ハ年増掛契約ヲ取結フ旨通知シタルニヨリ直チニ之ヲ承諾シタルヲ以テ保險契約成立シタルモノニシテ保險料五圓七拾參錢六厘ヲモ支拂タリ而シテ亡夫會平ノ体格不健全ナリシコトハ被控訴會社カ年

増掛契約ノ通知ヲ爲シタルニ據ルモ契約申込ノ當時ニ於テ同會社ノ之ヲ知悉セル等ナルヲ以テ輕微ノ疾病ヲ告ケサリシトテ保險契約ノ無効ニ歸スヘキモノニアラス又亡夫會平ハ明治三十三年六月七日ヨリ肋膜炎ニ罹リタルコトナシ若シ斯ノ如キ疾病ニ罹リタルトスルモ保險契約ハ同年五月廿日ニ成立シタルモノナレバ其以後ノ疾病ニ對シテハ再診查ヲ求ムルノ義務ナシト供述シ被控訴會社ハ本件控訴ヲ棄却ストノ判決ヲ求ム旨申立且ツ控訴人ノ供述ヲ否認シタル外控訴人ノ右供述ト齟齬スル部分ヲ除キ當事者事實上ノ供述ハ第一審判決ニ摘示スル處ト同一ナルヲ以テ之ヲ引用ス

理 由

本訴ノ爭點ハ第一亡吉田會平ト被控訴會社トノ間ニ於ケル生命保險契約ハ明治三十三年五月廿日ニ成立シタルモノナルヲ將々同年六月十五日ナリシヤ第二亡吉田會平ハ被控訴會社ニ對シ右契約申込以後契約成立ノ間ニ於テ疾病ニ罹リタルヲ隱蔽シテ再診查ヲ求メサリシヤ否ニ在リトス
依テ審案スルニ控訴人ハ第一亡夫會平ハ明治三十三年五月五日ニ被控訴會社ニ對シ生命保險契約ヲ申込ミ同會社醫師ノ診查ヲ受ケタル末同月廿日ニ至リ年増掛契約ヲ取結フ旨通知シ來リ會平ハ之ヲ承諾シタルヨリ同日保險契約ハ成立シタルモノニシテ保險料ヲ支拂ヒタリト云フモ亡吉田會平ハ被控訴會社ニ對シ保險契約ノ申込ニ該リ甲第九號證保險規則ヲ遵守スヘキ義務アルコトハ控訴人ノ認ムル所ニシテ該規則中被控訴會社ノ採用スル乙第四號證ニ據レハ「前略第一回掛金拂込ヲ爲サハル

間ハ何等ノ申込アルモ保險契約ヲ取結タルモノト看做スコトヲ得ス」ト有ルヨリ第一回掛金拂込ヲ契約成立ノ要件トセルコト洵ニ明白ナレハ亡吉田會平ト被控訴會社トノ間ニ於ケル生命保險契約ハ甲第七號證ヲ以テ第一回掛金拂込ヲ爲シタル日即チ明治三十三年六月十五日ニ於テ成立シタルモノト認定ス故ニ亡吉田會平カ被控訴會社ヨリ明治三十三年五月廿日ニ甲第五號證年増掛契約ノ通知ニ接シ之ニ承諾ヲ與ヘタルノミニテハ該保險契約ヲ直チニ成立シタルモノト謂フヲ得サルモノトス

第二亡吉田會平ハ明治三十三年六月七日ヨリ肋膜炎ニ罹リタルコトナシ若シ斯ノ如キ疾病ニ罹リタリトスルモ該保險契約ハ同年五月廿日ニ成立シタルモノナレハ其以後ノ疾病ニ對シテハ再診査ヲ求ムルノ義務ナシト云フモ亡吉田會平ト被控訴會社トノ間ニ於ケル生命保險契約ハ第一項ニ於テ説明スル如ク明治三十三年六月十五日ニ成立シタルモノニシテ證人河野衛ノ調書ニ據レハ亡吉田會平ハ肋膜炎ニ罹リ腸加多兒ト眼病ヲ併發シ明治三十三年六月七日ヨリ同月十八日迄テ引續キ診査投藥ヲ受ケタルコト明白ナルヲ以テ保險申込後即チ同年五月五日ヨリ該契約成立前即チ同年六月十五日ニ至ル間ニ於テ疾病ニ罹リタルニモ拘ラス之ヲ隱蔽シテ再診査ヲ求メス第一回掛金拂込ヲ爲シタルモノト認定ス左スレハ乙第一號證保險申込書ニ「前略契約成立前被保險人ノ身体ニ異狀ヲ生シタル場合ニ再ヒ体格診査ヲ請ハサリシハ保險契約無効ニ歸セラル、共聊カ異議無之候」トノ約款ニ違背シタルモノナレハ被控訴會社ノ云フ如ク保險契約ノ無効タルヘキハ勿論乙第二號證保險規則第二條

同第十五條第一項ニ據リ被控訴會社ハ本訴保險金支拂ノ義務ナキコト洵ニ明白ナリトス
上來說明スル理由ニ依レハ控訴人ハ被控訴會社ニ對シ保險金ノ辨濟ヲ求ムル權利ナキコト明白ナリ
依テ主文ノ如ク判決ス

明治三十五年二月十四日

大阪控訴院民事第一部

裁判長判事 遠山正總 判事 石川正 判事 安井璞

判事 久田濟衆 判事 高木成則

附言

本件ハ前件ト頗ル類似セル事件ニシテ只隱蔽シタル疾病カ身体診査後ニ發生セルノ差違アルノミ之ニ對スル判決ハ第一審第二審共ニ至當ナルヲ以テ喋々ノ必要ナシ

五十七 仁壽生命保險株式會社對池崎再五郎事件(始審)

判決要旨

甲 身體診査ノ際強健ナリシ者カ前年ニ於テ肋膜炎又ハ肺結核症ニ罹リシト云フ道理ナシ
乙 申込書ノ「會患及現症ノ有無欄」ニ何等ノ記入ナキトキハ之ヲ隱蔽シタリト見做サス

判決正本

二五四

東京府東京市麹町區内幸町一丁目三番地

原告 仁壽生命保險合資會社

右業務擔當社員

法定代理人 辻 新 次

右訴訟代理人辯護士 安 武 千 代 吉

熊本縣天草郡池村千六十一番地平民商

被告 池崎 再 五 郎

同縣同郡同村九百八十九番地平民商小林清太郎相續人

同 小 林 倫 太 郎

右訴訟代理人辯護士 田 村 彌 吉

右當事者間明治三十四年ヲ第五十一號委託金請求及反訴事件第二ノ欠席判決ニ對スル被告ノ故障ヲ受理シ更ニ判決スルコト左ノ如シ

主 文

曩ニ言渡タル欠席判決ハ之ヲ廢棄ス

被告兩名ハ連帶シテ金參百圓ヨリ(一)金六圓七拾八錢及ヒ之ニ對スル明治三十二年七月六日ヨリ(二)金八拾參圓八拾四錢六厘及ヒ之ニ對スル同年十月六日ヨリ(三)金八拾壹圓拾六錢九厘及ヒ之ニ對スル同年十二月六日ヨリ(四)金貳圓七拾壹錢貳厘及ヒ之ニ對スル明治三十三年一月六日ヨリ(五)金七拾五圓四拾五錢九厘及ヒ之ニ對スル同年四月六日ヨリ(六)金拾六圓參拾四錢五厘及ヒ之ニ對スル同年五月六日ヨリ各同年六月一日迄金百圓ニ付一日金四錢ノ利率ニヨリ計算シタル損害金トヲ合セタル總額ヲ差引キ其殘額ニ同年六月一日ヨリ同月六日マテノ法定利息ヲ加ヘタル金額ヲ(七)金五拾八圓九拾參錢八

厘ヨリ差引キ而テ其殘額及之ニ對スル同年六月六日ヨリ(八)金五拾四錢壹厘及ヒ之ニ對スル同年七月六日ヨリ各金百圓ニ付一日金四錢ノ利率ニヨル損害金ヲ計算シテ原告ニ支拂ヘシ
反訴ハ之ヲ却下ス

事 實

原告訴訟代理人ハ被告兩名連帶シテ(一)金六圓七拾八錢又ヒ之ニ對スル明治三十二年七月六日ヨリ(二)金八拾參圓八拾四錢六厘及ヒ之ニ對スル同年十月六日ヨリ(三)金八拾壹圓拾六錢九厘及ヒ之ニ對スル十二月六日ヨリ(四)金貳圓七拾壹錢貳厘及ヒ之ニ對スル明治三十三年一月六日ヨリ(五)金七拾五圓四拾五錢九厘及ヒ之ニ對スル同年四月六日ヨリ(六)金拾六圓參拾四錢五厘及ヒ之ニ對スル同年五月六日ヨリ(七)金五拾八圓九拾參錢八厘及ヒ之ニ對スル同年六月六日ヨリ(八)金五拾四錢壹厘及ヒ之ニ對スル同年七月六日ヨリ各辨濟マテ金百圓ニ付一日金四錢ノ利率ニヨリ計算シタル損害金トヲ合セ速ニ原告ヘ支拂ヘキ旨及ヒ反訴ハ之ヲ棄却ストノ判決ヲ求メ其事實ハ明治三十二年二月二十一日原告會社ト被告再五郎トノ間ニ生命保險事務取扱上ノ代理店業務ニ關スル約定ヲナシ被告倫太郎先代清太郎ハ其保證人トナリテ被告再五郎ト連帶シテ責任ヲ負擔シタリ而テ被告再五郎ハ明治三十二年六月以降一定ノ申立ニ係ル第一乃至第八ニ至ル保險料(原告會社ヨリ被告ヘ支拂ヘキ手数料ヲ差引キタルモ

二五五

ノヲ受領シタルニヨリ其都度原告會社ニ送金スヘキ筈ナルニ之ヲ履行セサルニ付豫約ニ基キ遅延利息即チ被告カ受領シタル其月ノ第六日ヨリ百圓ニ付一日四錢ノ計算ニヨル損害金ヲ併セテ請求スル次第ナリ又反訴ニ對シテハ被告倫太郎先代清太郎ト明治三十二年三四月頃生命保險(金額參百圓)ノ契約ヲ取結ヒタルニ相違ナシ然レトモ清太郎ハ被保險人ニシテ其保險申込ニ付テハ既往ノ健全、曾思ノ有無及ヒ發病年齡病名經過等ノ如キ最重要ノ事項ハ誠實ニ遺漏ナク其事實ヲ告知セサルヘカラサルニ其申込書ハ勿論診查醫高根佐久一郎ノ診斷ニ對シテモ明治三十一年四月ヨリ同年六月ニ跨ル肋膜炎疑似肺結核初期ノ曾患アリテ爲メニ醫師ノ診斷治療ヲ受ケタル事及十年以前ニモ亦肋膜炎ニ罹リシコトアルニモ拘ラハス之ヲ祕シテ告ケサリシニヨリ右保險契約ハ無効ナルカ故其支拂義務ナキ旨ヲ陳述シテ甲第一號乃至第六號證ヲ提出シ尙證人松本寛一ノ供述ヲ援用スト申立タリ被告訴訟代理人ハ本訴ニ對シ原告請求金ノ内ヨリ反訴金員參百圓ニ明治三十三年六月一日ヨリ法定利率ノ損害金ヲ加ヘタル額ヲ差引キタル殘額ノ外原告ノ請求相立タス反訴ニ付テハ原告ハ被告倫太郎ニ對シ保險金參百圓ニ明治三十三年六月一日ヨリ法律上ノ損害利息ヲ加ヘ本訴請求金ヨリ差引クヘントノ判決ヲ求メ其事實ハ被告再五郎カ原告會社ノ保險業務代理店トシテ尙被告倫太郎先代清太郎カ其連帶保證人トナリ保險料ヲ受領シタルニ相違ナク且ツ其金額モ之ヲ認ム然レモ清太郎ハ明治三十二年三月中原告會社ト保險契約ヲ取結ヒ居リシカ不幸ニシテ明治三十三年四月十三日死亡シタ

ルニ付被告ハ相當ノ手續ヲ以テ之ヲ報告シ保險金參百圓ノ拂渡ヲ請求セシニ原告會社ハ謂レナキ苦情ヲ唱ヘテ拂渡ヲ爲サ、リシニヨリ被告ハ原告會社ニ對シ被告ヨリ引渡スヘキ保險料ト相殺ヲ主張シテ今日ニ至リシモノナル旨ヲ抗辯シ反訴ニ付テハ清太郎カ原告會社ト保險契約後死亡ノ時マテ相當ノ保險料ヲ支拂タルヲ以テ會社ハ保險金參百圓ヲ拂渡サ、ルヘカラサルニ其義務ヲ盡サスシテ單ニ保險料ノ請求訴訟ヲ提起シタルニヨリ反訴ヲ爲シタル旨ヲ陳述シテ乙第一、二號證ヲ提出シ尙證人梅田縫三郎ノ供述ヲ援用スト申立タリ

理由

原告會社ト被告間ニ甲第一號證ノ如ク生命保險事務取扱上ノ代理店ニ關スル契約ヲナシタルコト及ヒ被告カ受領シタル保險料ノ數額ニ付テハ双方ノ爭ナキ處ニシテ本案主要ノ論點ハ第一被告倫太郎先代清太郎ト原告會社間ノ保險契約ハ無効ナリヤ否第二被告主張ノ如ク夙ニ原告會社ニ對シ其相殺ヲ主張シタルコトアリヤ否ヲ決スルニ在リ案スルニ其第一ハ原告會社カ清太郎間ノ保險契約ヲ無効ナリト主張スル論點ハ清太郎カ明治三十二年三月中保險申込ニ際シ凡ソ其十年前乾性肋膜炎ニ罹リタルコトアルノミナラス明治三十一年中ニモ肋膜炎若クハ肺結核ニ罹リタルコトアリシニモ拘ハラヌ申込書ニ之ヲ掲載セス且ツ會社診查醫カ検査ヲ爲シタル節其曾患事實ヲ告ケサリシニヨリ會社定款第三十五條第一號ニ申込書ニ詐偽又ハ隱蔽ノ事アルトキハトアルニ該當スルモノナリト云フニ在

ルモ甲第三號證ノ記載ニヨレハ明治三十二年三月頃ハ清太郎ノ体格強健且ツ營養佳良ニシテ全身各器能皆調整シ毫モ病態ノ徵候ナカリシモノナルコトヲ認メ得ヘシ故ニ其前年ニ於テ果シテ肋膜炎若クハ肺結核病ニ罹リシモノナリシヤ否ハ疑ヲ容ルヘキ地ナキノミナラス假ニ清太郎ニ於テ會テ肋膜炎等ニ罹リタルモトアリシトスルモ保險申込當時記憶ニ浮ハサリシモノナリヤ知ルヘカラス殊ニ検査醫ニ對シ會患事實ヲ告ケサリシトテ定款ノ「申込書ニ云々」トアル規定ニ該當セス且ツ申込書ニ其記載ナキニヨリ直ニ定款ニ謂所詐欺又ハ隱蔽ヲナシタルモノト論スルコトヲ得スシテ少クモ進爲ノ點ナカルヘカラス換言セハ會患ナキコトヲ記入シタル場合ナラサルヘカラス然ルニ申込書（甲第三號ノ一）ノ「會患及現症ノ有無」トアル欄内ニハ何等ノ記載ナク且消欄シタル形跡ナキニヨリ隱蔽若クハ詐欺ノ所爲アリシモノトナスコトヲ得ス既ニ然リトセハ原告會社ハ被告ヨリ要求ヲ受ケタルト同時ニ保險金支拂ノ債務ヲ負擔シタルモノト云ハサルヘカラス第二原告ハ被告ノ抗辯事實ヲ否認セシモ被告カ清太郎死亡後明治三十三年四月中之ヲ報告シテ保險金ノ請求ヲ爲シタルコトハ原告モ爭ハサル處ナリ而テ原告會社カ契約ノ無効ナルヲ唱ヘテ支拂ヲ爲サリシニヨリ被告ハ原告會社ニ送金スヘキ金額ト相殺スルノ必要ナル位置ニアルト及ヒ双方ノ債權額ハ僅少ナル差異アルニ過キサル等ノ情況ヨリ參酌スレハ既ニ被告ヨリ原告會社ニ對シ相殺ノ意志ヲ表示シタルモノト認定スルニ足ル依テ双方債務ノ各期限カ到來セシ時期ニ遡リ之ヲ計算スヘキモノトス反訴ニ付テハ要ス

ルニ原告ニ於テ本訴請求金ト被告ノ債權タル保險金參百圓ト相殺スヘントノ判決ヲ求ムルニ在リ然レトモ相殺ハ其意志ヲ相手方ニ表示スルヲ以テ其效力ヲ生スルモノナルカ故ニ敢テ訴訟ヲ提起スルノ要ナキノミナラス前記説明ノ如ク既ニ相殺ノ意思ヲ表示シタルニモ拘ラス尙反訴ヲ提起シタルハ畢竟無益ノ訴ナルヲ以テ之ヲ却下スヘキモノトス
以上ノ理由ニシテ新辯論ニ基キ爲スヘキ判決カ欠席判決ト符合セサルヲ以テ民事訴訟法第二百六十一條ニ據リ主文ノ如ク判決ス

明治三十四年十月七日

熊本地方裁判所民事部

裁判長判事 仁保久四郎

判事 樋口龜次郎

地方裁判所判事代理 判事 朝廣正男

(五十八) 仁壽生命保險合資會社對池崎再五郎事件(控訴)

判決要旨

既往症隱蔽トハ沈黙ノ意ナリ故ニ申込書ノ「會患ノ有無欄」ニ何等ノ記載ヲ爲サ、リシハ被保險者カ之ヲ隱蔽シタルモノト見做ス

判決

東京府東京市麹町區内幸町一丁目三番地

控訴人 仁壽生命保險合資會社

右法定代理人同會社業務擔當社員

右訴訟代理人辯護士

辻 新 次
島 山 重 明

熊本縣天草郡鬼池村千六十一番地平民

被控訴人 池 崎 再 五 郎

全所平民

右訴訟代理人辯護士 小林 倫 太 郎
瀬 戸 彌 吉

右當事者間ノ明治三十四年(四)〇五號委託金請求控訴事件及附帶控訴ニ付判決スルコト左ノ如シ

主 文

第一審判決中本訴ニ關スル部分ヲ廢棄ス被控訴人ハ連帶シテ控訴人ノ爲メニ取立タル保險料(一金六圓七拾八錢ニ之ニ對スル明治三十二年七月六日ヨリ辨濟迄百圓ニ付一日金四錢ノ割ノ損害金ヲ合セ(二)金八拾參圓八拾四錢六厘ニ之ニ對スル全年十月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(三)金八拾壹圓拾六錢九厘ニ之ニ對スル全年十二月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(四)金貳圓七拾壹錢貳厘ニ之ニ對スル明治三十三年一月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(五)金七拾五圓四拾五錢九厘ニ之ニ對スル全年四月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(六)金拾六圓參拾四錢五厘ニ之ニ對スル全年五月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(七)金五拾八圓九拾參錢八厘ニ之ニ對スル全年六月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セ(八)金五拾四錢壹厘ニ之ニ對スル全年七月六日ヨリ辨濟迄全上率ノ損害金ヲ合セテ控訴人ニ支拂フヘシ

訴訟費用ハ第一、二審トモ被控訴人ノ負擔トス
附帶控訴ハ之ヲ棄却ス

事 實

控訴人ハ第一審判決中反訴ニ關スル部分ヲ除キ其他ノ部分ヲ主文記載ノ如ク變更セラレタキ旨申立テ被控訴人ハ控訴棄却ノ申立ヲ爲シ尙附帶控訴一定ノ申立トシテ第一審判決中本訴ニ關スル訴訟費用ノ部分ヲ廢棄シ全部控訴人ノ負擔タルハントノ判決アランコトヲ求メ控訴人ハ附帶控訴棄却ノ申立ヲナシタリ而シテ双方事實上ノ供述ハ第一審判決ニ摘示スル所ト同一ナルヲ以テ茲ニ之ヲ引用ス

控訴人ハ被控訴人ノ相殺抗辯ニ對シ當會社ノ保險規則ハ申込證書ニ詐偽又ハ隱蔽ノコトアルトキハ保險契約ヲ無効トスルモノニシテ被保人タリシ小林清太郎ハ之ヲ知テ保險申込ヲナシタルモノナルニ其申込ニ際シ同人カ明治三十一年四月ヨリ同年六月マテ肋膜炎、肺結核初期ノ疾病ノ爲メ醫療ヲ受ケタルコト及十年前ニモ乾性肋膜炎ニ罹リタルコトアルニ拘ラス之ヲ隱蔽シテ陳告セサルニヨリ保險契約ハ無効ナレハ控訴人ニ於テ保險料支拂ノ義務ナク從テ相手方ニ於テ相殺ヲ爲シ得ヘキ原因ヲ有セスト辯駁シタリ

被控訴人附帶控訴ノ趣旨ハ被控訴人カ原審ニ於テ反訴ヲ提起シタルハ不必要ナリシニモセヨ本訴ニ

於ケル判決ハ全部被控訴人ノ主張ヲ認可セラレタルニ訴訟費用ニ付本訴ノ分三分ノ二ヲ被控訴人ニ負擔セシメラレタルハ不當ナリト云フニ在リ

理由

控訴人カ請求原因トシテ陳述セル事實及被控訴人ニ於テ取立タリト主張スル金額ハ被控訴人ノ認メテ争ハサル所ナレハ本件ニ於テ決スヘキ争點ハ被控訴人ノ相殺抗辯ハ相當ナリヤ否ヤ即チ亡小林清太郎ト控訴會社カ取結ヒタル保險契約ハ有效ナリヤ否ヤニ在リ

仍テ按ヌルニ甲六號證控訴會社保險規則ニ依レハ其第三十五條ハ申込證書ニ詐僞又ハ隱蔽ノコトアルトキハ保險契約ハ無効ニ屬シ既ニ拂込ミタル保險料ハ之ヲ返戻セサル旨記載シアリテ甲三號證ノ一小林清太郎保險申込證書ニ貴會社保險規則熟知ノ上保險申込候云々トアルニヨリ小林清太郎ハ右規則承認ノ上保險申込ヲナシタルヤ明カニシテ其申込ニ詐僞又ハ隱蔽ノコトアルトキハ保險契約ハ當然無効ニ屬ス可ハ言ヲ待タヌ然而シテ小林清太郎ハ明治三十一年四月十七日ヨリ同年六月十一日マテ肋膜炎ニ罹リ醫師ノ治療ヲ受ケタルコトハ證人松本寛一カ其旨ヲ證言ヲナスニ依リ明確ニシテ是ノ如キ事實ハ保險契約ヲナスニ於テ斟酌セラルヘキ重要ノ事項ト謂フヘキモノナルニ甲三號證ノ一ニハ曾患及現病ノ有無ナル欄アルモ空欄ニシテ右曾患ノ記載ナシ而シテ甲三號證ノ二診查醫ノ診查報狀ニヨルモ曾患トシテハ幼時麻疹ヲ經過シ十二才ノ時麻疹利亞ニ罹リタル旨ノ外何等ノ記載ナキ

ニ由テ之ヲ觀レハ小林清太郎ハ保險申込ノ當時診查醫ニ對シテモ前記肋膜炎ニ罹リタルコトヲ告ケサリシハ明カニシテ且同人カ保險申込ヲナシタルハ甲三號ノ一ニ記載スル如ク明治三十二年三月廿七日ナレハ其前年ニ於ケル曾患ヲ全ク遺忘スルノ理ナキヲ以テ同人カ保險申込證書ニ曾患ヲ記載セサリシハ故意ニ之ヲ秘シタルモノト認メサルヲ得ス被控訴人ハ證人梅田健三郎ノ證言ヲ援用シタルモ同證人ハ前示認定ノ事實ニ反對シタル陳述ヲナシアラサルニヨリ以テ反訴トナスニ足ラス又被控訴人ハ隱蔽トハ或行爲ニ依テ事實ヲ蔽フノ謂ナルカ故ニ單ニ曾患ヲ陳告セサルハ隱蔽ト云フヲ得スト主張スルモ甲六號證保險規則ニハ詐僞又ハ隱蔽トアリテ二者ヲ區別シアルヲ以テ或行爲ヲ用ユルトキハ常ニ詐僞トナルヘキニヨリ其所謂隱蔽トハ控訴人主張ノ如ク沈黙ノ意義ナルコト明瞭ナリ然レハ小林清太郎ノ保險申込ハ同規則ノ所謂隱蔽ノコトアルモノニ該當スルヲ以テ同人カ控訴會社ト締結シタル保險契約ハ當然無効ニシテ控訴會社ハ保險金支拂ノ義務ナク從テ被控訴人ノ相殺抗辯ハ其當ヲ得サルモノトス

左スレハ控訴人ノ請求ハ相當ニシテ控訴理由アルモ之ニ抵觸スル附帶控訴ハ其理由ナシ是主文ノ如ク判決スル所以ナリ

明治三十五年七月十七日

長崎控訴院民事部

裁判長判事 勝浦徳二郎 判事 日高實容 判事 小山松吉

同院判事代理 内藤每輔 判事 佐伯經臣

附言

本件ハ仁壽生命保險會社ノ代理店ノ保證人カ既往症ヲ隱蔽シテ會社ト保險契約ヲ締結シテ死亡セルヲ以テ會社ハ保險金ノ支拂ヲ拒ミシカハ代理店主並ニ其保證人ノ相續人相謀リテ會社ヘ送金スヘキ保險料收入金ヲ押ヘ義務相殺ト稱シ之ヲ會社ヘ送付セサルカ故ニ會社ハ委託金請求ノ訴ヲ提起シタルニ被告ハ保險契約ニ因テ得タル保險金請求權ノ享受ヲ以テ抗辯ト爲シ且義務相殺ノ反訴ヲ起シタルナリ故ニ判決モ亦此二點ニ亘レリト雖モ保險契約ノ效力ニ關シテハ要スルニ會社ハ被保險者ノ既往症隱蔽ヲ主張シ第一審ニ於テハ其判決要旨ニ掲ケタルカ如ク裁判官ハ會社ノ不利ニ判決シタリト雖モ是固ヨリ不當ノ判決ニシテ第二審ニ於テハ明ニ隱蔽ノ意義ヲ解釋シ會社ノ勝訴ニ歸セシメタリ

五十九 草川畝彦對護國生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險利益ヲ有セサル保險金受取人ヲ定メタル契約ハ無効ナリ

判決正本

秋田縣秋田郡寺内村土族

原告 草川 畝彦

東京市京橋區南船場町十一番地

被告 護國生命保險株式會社

右會社取締役 法定代理人 板倉 勝 巳

右當事者間ノ明治三十四年(ワ)第一二〇三號保險金請求事件ニ付當裁判所ハ判決ヲ爲スコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人横山寛平ハ一定ノ申立トシテ被告ハ原告ニ金參百圓ヲ辨済スヘシトノ判決ヲ求ムト申立テ事實トシテ訴外那珂小市ナルモノ明治三十年十二月十六日訴外眞鍋長守ヲ被保人トシテ原告ヲ保險金受取人ト定メ被告會社ト保險金參百圓ノ終身生命保險契約ヲ締結シタリ契約ヲ締結スルニ付那珂小市ヲ眞鍋長守ノ債權者トシ長守ヲ原告ノ債權者トナシタルモ是唯形式上ノ事ニシテ眞實債權債務ノ關係アリシモノニ非ス然ルニ明治三十三年十月九日午後十一時被保人眞鍋長守ハ病死シタルヲ以テ原告ハ保險金ノ支拂ヲ請求スルモノナリ被告代理人供述ノ事實ハ之レヲ認メスト供述シタリ

被告訴訟代理人宮古啓三郎ハ原告ノ請求ヲ棄却シ訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ事實トシテ原告供述ノ如キ生命保險契約ヲ締結シタルコトアルモ本件ノ契約ニハ申込證書ニ詐僞若クハ隱蔽ノ廉アルトキハ契約ヲ無効トスル旨ノ約束アリ然ルニ本件契約ノ申込證書ニハ被保人カ明治二十六年六月頃ヨリ死亡ノ原因タリシ貧血癩痢病ニ罹リ居リタル事實ヲ記載セス之ヲ隱蔽シタル廉アルヲ以テ該契約ハ當然ニシテ被告ハ保險金支拂ノ義務ナシト供述シタリ

理由

原告訴訟代理人ノ供述スル所ニ依レハ本件ノ生命保險契約ノ保險金受取人タル原告ハ被告人眞鍋長守ノ生命ニ付キ法律上若クハ經濟上全ク何等ノ關係ヲ有セス此ノ如キ契約ハ生命保險契約トシテ果シテ有效ナルヤ否ヤ是第一ニ決定スヘキ問題ナリ審案スルニ本件ノ契約ハ明治三十年十二月十六日ノ締結ニ係ルヲ以テ其效力ノ有無ハ舊商法若クハ現行商法ノ規定ニヨリテ判斷スルコトヲ得ス而シテ當時保險契約ニ關シテハ何等ノ法文ナク又此點ニ關スル慣習法モナシ故ニ此問題ハ須ラク條理ニ據テ判定セサルヘカラス惟フニ保險契約ヲ以テ偶然ナル事故ニ因リテ産シタル損害ヲ賠償スルヲ目的トスル有償契約ナリトシ保險契約ニ利益ノ存在ヲ必要トスルハ一般ノ法理ナリ而シテ沿革ニ徴スルニ生命保險ハ偶然ナル事故ニ因ル損害ノ賠償ヲ目的トスル保險制度ノ一トシテ發達シタルモノナルカ故ニ立法ノ手段ニ依リ生命保險ニ全ク之レニ異ナリタル意義ヲ與ヘサル以上ハ生命保險ハ火災

保險其他ノ損害保險ト同シク損害賠償ノ思想ニ基クモノニシテ其骨子タル生命保險契約モ亦偶然ナル事故即チ人ノ生死ヲ原因トシテ損害賠償ヲ目的トスル有償契約ナリト言フヲ至當トス從テ他ノ保險契約ト同シク其有效ナル成立ニハ利益ノ存在ヲ必要トス生命保險契約ノ保險金受取人タルニハ被保人ト法律上若クハ經濟上ノ關係ヲ有スルコトヲ以テ其要件トスルハ外國ニ於ケル多數ノ立法例ニシテ唯之ト異ルハ普漏西ノ法律ニ於テ被保人ノ承諾アルキハ何人ニテモ保險金受取人トナルコトヲ得ル旨ヲ定ムルアルノミ故ニ生命保險契約ノ保險金受取人ノ資格ニ關シテ法律ノ規定ナキ場合ニ於テ之ヲ最モ廣義ニ解シ被保人ト法律上若クハ經濟上何等ノ關係ナキ者ト雖モ保險金受取人トナルコトヲ得トスルハ正當ナラス而シテ其資格ナキ者ヲ保險金受取人ト定メタル生命保險契約ハ結局被保險利益アキ保險契約ニシテ其無効ナルコト論ヲ俟タス當裁判所ハ此理由ニ據リ本件契約ヲ無効ノモノト判定スルヲ至當ト評決シタルヲ以テ他ノ爭點ニ付キ判斷ヲ爲サスシテ原告ノ請求ヲ理由ナシトシ主文ノ判決ヲ爲シタリ

明治三十四年十月十八日

東京地方裁判所第二民事部

裁判長判事 和 仁 貞 吉

附 言

判事 設 樂 勇 雄

判事 横 田 五 郎

本判決ハ生命保險ノ被保險利益ニ關スル學理ノ最明確ナル應用ニシテ我邦ニ於テ保險契約ニ關スル
 特定法規ノ存在セサル時ニ締結セラレタル契約ニ對シテハ至當ナル判決ナリト謂ハサルヘカラス舊
 商法ニ據レハ保險契約者ト被保險者間ニ利害ノ關係アルヲ必要トシ現行商法ニ於テハ保險金受取人
 ト被保險者間ニ親族關係アルヲ必要トシ此關係ノ欠缺セル契約ハ無効ナリトセサルヘカラス(但シ
 新商法ニ於テハ反對說即チ契約有效說アリ保險雜誌第八十一號及第八十三號參照)而シテ是等ノ法
 律無キ場合ニ於テハ勿論保險契約ノ原理即チ保險契約ハ被保險利益ノ保護ヲ目的トシ而シテ生命保
 險ニ於ケル被保險利益ハ被保險者ト保險金額ヲ受取ルヘキ者トノ關係ニ存スルノ點ニ向ツテ判決ヲ
 下サハルヘカラスアルハ當然ニシテ而モ此事タル公安ニ關スルモノナルカ故ニ判官カ當事者ノ主張ノ
 如何ニ拘ハラヌ之ヲ以テ爭點トシタルハ其善ク保險契約ノ性質ニ通シタルヲ稱賛セサルヲ得サルナ
 リ

(六十) 金澤國松對帝國生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

甲 保險契約ノ當時被保險者カ自己ノ既往症ヲ知ラサル結果之ヲ告知セザリシハ隱蔽ト見做
 スヲ得ヌ

乙 保險者ニ於テ知ルコトヲ得ヘカリシ疾病ノ隱蔽ハ被保險者ヲ騙取セス

判決正本

大坂市北區北野大藏寺町千八百五十六番屋敷平民種物商

原告 金澤國松

同市東區今橋一丁目二十八番屋敷

右法定代理人實母親權者 金澤マサ

被告 帝國生命保險株式會社

右訴訟代理人辯護士 竹中鶴二郎

右法定代理人取締役 福原有信

右訴訟代理人辯護士 吉田平三郎

右當事者間ノ明治卅四年(第二七九號)保險契約金請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決ヲ爲ス如左

主文

被告ハ原告ニ對シ金壹千圓ニ明治卅四年三月十六日ヨリ本件執行濟ニ至ル迄年百分ノ五ノ利子ヲ
 付シ原告ニ支拂フヘシ

訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

事實

原告代理人ハ前掲主文ト同一ナル一定ノ申立ヲナシ其事實トシテ主張ノ要旨ハ明治三十一年十二月
 廿八日原告ノ實姉風岡エツハ被保險人兼保險契約人トシテ被告會社ト尋常終身生命保險契約ヲ締結
 シ該保險金ハ壹千圓ニシテ爾來明治卅四年三月廿七日マテ引續キ割増ノ保險料ヲ支拂ヒ被保險者ニ
 於テ死亡セシキハ右保險金ハ原告ニ於テ受取ルヘキ約定ナリシ而シテ被保人「エツ」ハ明治三十四年

二月十七日午前五時三十分病ヲ以テ死亡セリ

被告人「エツ」ハ契約締結ノ際ハ風岡作二ノ妻タリシモ其後協議上離婚シ原告家ニ復歸セリ而シテ右事實ハ明治卅三年六月四日被告會社ニ於テ承認セシニ依リ爾來保險料ハ金澤エツ名義ヲ以テ支拂ヒ居リタリ

右ノ事實ナルニヨリ原告ハ明治三十四年二月廿二日被告ニ對シ保險金ノ支拂ヲ要求セシ處被告ハ種々口實ヲ設ケ之カ請求ニ應セサルニヨリ茲ニ本訴ヲ提起シタル旨申立甲第一號乃至同第三號證ヲ提出セリ

被告代理人ハ原告ノ請求棄却ノ判決ヲ要求シ其事實トシテ明治三十一年十二月廿八日金澤エツニ對シ尋常終身生命保險ニ年増ノ條件ヲ以テ金壹千圓ノ契約ヲ締結シタルコトハ原告主張ノ如ク事實ナリトス然リ而シテ右金澤エツカ死亡ノ故ヲ以テ明治三十四年二月廿二日保險金受取人金澤國松ヨリ保險金ノ請求ヲナシ來リシ際右ニ使用スル一定ノ用紙ヲ交付スルハ被告會社從來ノ慣例トシテ受取人ニ便宜ヲ與フルモノニシテ其死因ニ異常ナキ限リハ固ヨリ之ヲ支拂フノ意思ナリ然ルニ乙第一號證ノ主治醫矢島狹太郎ノ死亡證明書ニ據レハ被告人ハ十九歳ノトキ右肋膜炎ニ罹リシコトヲ發見シタリ斯ル罹病ノ事項ハ社則並ニ申込書ニヨリ之ヲ明示スヘキハ契約人ニ於テ詳知スルニモ拘ハラヌ之ヲ隱蔽シタルヲ以テ被告會社ニ於テハ既往病隱蔽ノ事由ヲ以テ當然該契約ノ無効ヲ宣言シタル次

第ナリトス依テ本件請求ハ不當ナル旨答辯シ乙第一號證乃至第四號證ヲ提出シ證人堀見克禮ノ供述ヲ援用セリ

理由

本訴ノ要點タル被告人金澤エツハ明治二十九年五月中ニ右肋膜炎ニ罹リシ事實ヲ保險申込ノ際隱蔽セシヤ否ヤニ在リ依テ審案スルニ「エツ」ハ明治二十九年中大坂醫學校病院ニ或疾病ノ爲メ入院セシコトハ原告モ認メテ異議ナキ處ナリトス而シテ乙第四號證ハ其事實ニ符合スルニヨリ當時ノ疾病ハ右肋膜炎ナリシト認定ス然リ而シテ醫師ハ患者ノ精神沮喪シ爲メニ病勢ノ増進スルヲ慮リ其病名ヲ告知セサルコトハ往々見ル處ノ事實ニシテ殊ニ婦女子ノ如キ普通神經ノ過敏ナルモノニ對シテハ然ルコトハ是亦其例ニ乏シカラサルモノトス故ニ本件「エツ」右疾病ノ際其右肋膜炎ナルコトヲ主治醫ニ於テ患者ニ告知シタリトノ事ハ被告ニ於テ立證セサルヘカラス而カモ此點ニ關シテハ一モ見ルヘキ證據ナキニヨリ「エツ」ハ該事實ヲ知ラザリシモノト論定セサルヲ得ス左スレハ保險申込ノ際其事實ヲ告知セザリシト之ヲ以テ既往症ヲ隱蔽シタリト論スルヲ得ス加之保險申込ノ際被告會社ニ於テ醫師ヲシテ「エツ」ノ身体検査ヲナサシメタルコトハ乙第三號證ニヨリ明確ナリ該證ニ依ルニ「エツ」ハ體質脆弱ナリシトノ事ナレハ此ノ如キ者ハ往々諸種ノ疾病ニ犯サレ易キニヨリ深ク此點ニ留意シ精密検査ヲナスニ於テハ縦シヤ右肋膜炎ニ罹リシ事實ヲ告知セザリシニモセヨ僅々二年

有余以前ノ疾病ニ係ルノミナラス證人堀井克禮ノ供述ニヨルニ「エツ」ハ保險契約申込ヨリ一年以前即チ明治卅年二月及ヒ九月ノ兩度ニ大阪醫學校病院ニ治療ヲ受ケニ來リシコトアリ其際ニ於ケル投藥ハ肋膜炎並ニ肺結核ニ關スルモノナリト云フニアリテ明治二十九年五月ニ患ヘシ右肋膜炎ノ未タ全治シ居ラサリシ形跡ノ存セル等ノ事實ニ徴シテ右疾病ヲ發見シ得ヘキモノナリシヤ蓋シ疑ヲ容レズ殊ニ保險申込ヨリ僅々一年以前ニ肺結核症ニ罹リシ事實ヲモ發見シ能ハサリシ事實ニヨリ推考スルニ被告何社ノ檢査ノ其當ヲ得サリシコトハ明確ナリトス要スルニ「エツ」カ右肋膜炎ニ罹リシ事實ハ被告ニ於テ知ルコトヲ得ヘカリシモノト認ムルニヨリ旁々被告ノ抗辯ハ排斥セサルヲ得ス右ノ理由ナルニヨリ被告ハ甲第一號證ノ約旨ニ基キ金壹千圓ニ起訴ノ當日ヨリ年五分ノ利息ヲ附シ原告ニ支拂フヘキハ當然ナリトス依テ主文ノ如ク判決ス

明治三十四年五月二十四日

大阪地方裁判所民事第四部

裁判長判事 鼓 鍊之助 判事 菰 淵 清 雄 判事 清 水 鐵 太 郎

附 言

保險契約ニ於テ危險ニ關スル重大ナル錯誤ノ事實存在スル場合ニハ縱令被保險者カ之ヲ知ラストスルモ契約ノ效力ニ影響アルコトハ契約上ノ原則ナリト雖トモ帝國生命保險會社ノ約款並ニ主張ニ隱

蔽云々トアルカ故ニ知ラサル事實ハ隱蔽スルヲ得ストノ理由ヲ以テ被告ノ敗訴トナリシハ己ムヲ得ストスルモ裁判官ノ第二ノ理由トシテ被保險者ノ肋膜炎ハ保險者ノ知ルコトヲ得ヘカリシモノト認ムルカ故ニ假令隱蔽ナリトスルモ保險者ハ之ニ抗辯スルヲ得スト論シタルハ法律上何等ノ根據ニ基ケルヤヲ問ハサルヘカラス現行商法第四百廿九條但書ニハ裁判官ノ理由トスル如キ規定アリト雖トモ本件ノ保險契約ハ明治三十一年十二月廿八日ノ契約ニシテ當時ハ保險契約ニ關スル法律無ク全ク相互ノ契約ニ依ルノ外未タ施行セラレサル舊商法ノ規定ヲ參酌スルノ外ナキ時ナルニ之ニ對シテ新商法ノ主義ヲ適用シタルカ如キハ吾人ノ感ナキ能ハサル所ナリ

(六十) 金澤國松對帝國生命保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決要旨甲ニ同シ

判決正本

大阪府東區今橋一丁目二十八番屋敷	控訴人 帝國生命保險株式會社	大阪府北區北野大融寺町千百五十六番屋敷平民稱物商	被控訴人 金 澤 國 松
右法定代理人取締役	福 原 有 信	右法定代理人實母親權者	金 澤 マ サ
右訴訟代理人辯護士	吉 田 平 三 郎	右訴訟代理人辯護士	竹 井 鶴 二 郎

右當事者間ノ保險契約金請求事件ニ付判決スルコト左ノ如シ

主 文

明治三十五年一月十七日當院カ言渡シタル欠席判決ヲ維持ス

欠席判決後ノ訴訟費用モ控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴代理人ハ原判決ヲ廢棄シ更ニ被控訴人ノ請求相立タス訴訟費用ハ從テ被控訴人ノ負擔タルヘシトノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シ被控訴代理人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムト一定ノ申立ヲ爲シタル外事實上主張要旨ハ双方共原判決事實ニ摘示スル所ト同趣旨ナルヲ以テ該摘示ヲ引用ス

理 由

本訴ニ於テ先ツ解決スヘキハ被保人亡金澤エツカ保險申込ヲ爲スニ當リ明治二十九年五月中肋膜炎ニ罹リシ事實ヲ隱蔽シタルヤ否ヤニアリ依テ審按スルニ證人堀見克禮ノ證言ニ依レハ「エツ」カ明治廿九年五月中疾病ニ依リ大阪府立病院へ入院シタル事實明ニシテ真正ト認ムヘキ乙第四號證ニハ明治廿九年中金澤エツカ肋膜炎ニ罹リ醫學校病院へ入院セリト記載シアルニ依リ明治廿九年五月中「エツ」ハ肋膜炎ニ罹リ治療ヲ受ケタル事實ヲ認ムルニ足レリト雖モ醫師ハ常ニ必シモ病名ヲ告知スルモノニアラス其心神沮喪ヲ慮リ之ヲ告知セサルコトハ屢々見ル所ノ事實ニ屬ス依テ控訴人ハ更ニ

進ンテ「エツ」カ保險申込ノ際會テ肋膜炎ニ罹リタルコトヲ告知シ居リタリトノ事實ヲ證明セサルヘカラス此點ニ關スル證明方法タル甲第五號證ハ醫師カ「エツ」ノ已往症ニ肋膜炎アリシコトヲ認メタル書面ニ過サレハ之ニ依テ「エツ」カ右ノ已往症ヲ知リタリトノ事實ヲ證スルニ足ラス左レハ「エツ」ハ肋膜炎ニ罹リタル事實ヲ知ラスシテ保險契約ヲ爲シタルモノト認ムヘキニ依リ被控訴人ノ請求至當ニシテ控訴ハ其理由ナク曩ニ言渡シタル欠席判決ニ符合スルヲ以テ本文ノ如ク判決ス

明治三十五年四月二十日

大阪控訴院民事第一部

裁判長判事 石 川 正 判事 桃 田 教 彦 判事 宮 井 璞

判事 久 田 濟 衆 判事 石 井 政 吉

(六十二) 金澤國松對帝國生命保險株式會社事件(上告)

判決正本

大坂市東區今橋一丁目十八番屋敷 上告人 帝國生命保險株式會社
右法定代理人取締役 福 原 有 信 右法定代理人實母親權者 金 澤 國 松
右訴訟代理人辯護士 原 嘉 道

右當事者間ノ保險契約金請求事件ニ付大坂控訴院カ明治三十五年四月三十日言渡シタル判決ニ對シ
上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告趣旨ノ要領ハ原判決ハ本件ノ争點ハ被保人亡金澤エツカ保險申込ヲ爲スニ當リ明治二十九年五
月中肋膜炎ニ罹リシ事實ヲ隱蔽シタルヤ否ヤニ在リトシ同人カ明治二十九年五月中疾病ニ依リ大坂
府立病院ニ入院シタルコト同年中同人カ肋膜炎ニ罹リ醫學校病院ニテ治療ヲ受ケタル事實ハ之レヲ
真正ト認ムルモ同人カ其病氣ノ肋膜炎ナリシコトヲ知得シタリト見ルヘキ證據ナシトノ理由ニ依リ
被上告人ノ請求ヲ採用セリ然レトモ保險申込ヲ爲ス際ニ保險申込人ヨリ告白スヘキ既往症ハ肋膜炎
ニ限ルニアラス普通ノ感冒腸胃病等ノ輕易症ヲ除キ苟クモ病院ニ入り治療ヲ要スルカ如キ顯著ナル
病歴ハ總テ之レヲ告白セサルヘカラス此告白アリテ之レニ基キ精細ニ身体ヲ検査スルニ非ラサレハ
醫師ト雖モ保險契約ニ影響ヲ及ホスヘキ總テノ疾患ヲ知了スルコトヲ得サルコトアルハ論ヲ竣タス是
レ法律學ニ於テ保險契約ハ最上ノ信義ニ依ル契約ナリトシ保險申込人ハ其知リ得タル總テノ事實ヲ
告白スルヲ要スト爲ス所以ナリ故ニ上告人ハ原院ニ控訴ヲ提出スルニ當リテハ特ニ重キヲ此點ニ置

キ金澤エツニ於テ明治二十九年中ニ疾患ニ罹リ入院治療シタル事實アル上ハ其何病タルニ論ナク之
レカ醫療ヲ受ケタル事實ヲ告白セサルヘカラスアルニ之レヲ告白セサリシハ既往症掩蔽ト謂ハサルヘ
カラストシ之レヲ第一審判決ニ對スル不服ノ第一理由ト爲シテ控訴狀ニ掲起シタリ既ニ此趣旨ヲ以
テ控訴ヲ提起シタル上ハ本件ニ於ケル第一ノ争點ハ明治二十九年中ニ金澤エツカ病院ニ入り治療ヲ
受クルカ如キ重患ニ罹リタル事ヲ告白セサリシ事實カ既往症隱蔽トシテ保險契約ヲ無効ナラシムヘ
キモノナルヤ否ヤニ在リテ其既往症カ肋膜炎ナリシコトヲ知リテ之ヲ掩蔽シタルヤ否ヤニ非ス然
ルニ原告カ單ニ肋膜炎ヲ掩蔽シタルヤ否ヤヲ以テ本件ノ争點ナリトシ金澤エツカ罹病醫治ノ事實、
總テ之レヲ認メナカラ肋膜炎ナル病名ヲ知得シタリト認メ難シトノ理由ノミヲ附シ被上告人ノ請求
ヲ採容シタルハ必要ナル争點ヲ遺脱シ且ツ判決ニ必要ナル理由ヲ備ヘサル不法アルモノナリト云フ
ニ在リ

然レトモ原院ノ口頭辯論調書ヲ査閱スルニ事實及ヒ争點ニ關シテハ上告人ハ唯第一審判決事實摘示
ト同一ノ陳述ヲ爲シタル旨記載アルニ止マリ控訴狀ニ掲起シタル如キ事項ヲ陳述シタル形蹟一トシ
テ徴スルコトヲ得ス而シテ第一審判決ノ事實摘示ニハ上告人カ主トシテ抗辯方法ト爲シタル事項ハ
金澤エツカ十九歳ノ時右肋膜炎ニ罹リシコトヲ詳知セシニ拘ラス之ヲ隱蔽シタリト云フニ在リテ本
論旨ニ於テ主張スル如キ争點アリシヲ觀ス然レハ則チ原判決ハ當事者ノ争點ニ適切ナル判断ヲ爲シ

タルコト誠ニ明ニシテ本論旨ノ如キ不法アルコト無シ

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

明治三十五年九月廿二日

大審院第一民事部

裁判長判事男爵 南部 颯 男 判事 井上 正一 判事 岡村 爲藏

判事 馬場 愿治 判事 志方 鍛 判事 富谷 銈太郎

判事 田代 律雄

附言

本件第一審ニ於テハ保險者カ被保險者ニ於テ肋膜炎ヲ隱蔽シタリトノ狭キ範圍ノ主張ヲ爲シタル筈
ニ保險者ノ敗訴ニ歸シタリト雖トモ若シ彼カ廣ク疾病ニ罹リシコトヲ隱蔽シタリト主張セハ或ハ勝
訴ヲ得タルヤモ知ルヘカラス是ニ於テカ大審院ニ對シテハ本來斯ク主張シタルナリト申立テタリト
雖モ採用セラレス主張以外ニ付テハ何等ノ參酌ヲモ爲サル文明國ノ裁判所ニ對シテハ爭フ者モ亦
其覺悟ヲ有セサルヘカラサルナリ

六十三 岩井慶隆對明治生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險契約ノ當時保險契約者及ヒ被保險者カ被保險者ノ曾テ肺病ニ罹リシコトヲ知リナカ
シ之ヲ告ケザリシヲ以テ契約ハ無効ナリ

判決正本

神奈川縣横濱市管木町十二番地平民

原告 岩井 慶隆

名古屋地方裁判所々屬辯護士

右訴訟代理人 大喜多 寅之助

愛知縣名古屋市榮町七丁目百十四番戶

被告 明治生命保險株式會社

名古屋支店取締役

右代表者 阿部 泰藏

東京地方裁判所々屬辯護士

右訴訟代理人 岡村 輝彦

名古屋地方裁判所々屬辯護士

右訴訟代理人 細野 辰三郎

右當事者間生命保險金請求事件ニ付判決スル左ノ如シ

主文

原告ノ請求ハ之レヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實

原告ハ被告ヨリ金千九百六拾六圓四錢及ヒ損害トシテ明治三十二年十一月二日ヨリ本件判決執行ニ至ルマテ年六分ノ利子ヲ支拂受度ト申立其事實ハ被告保險會社ニ妻カギヲ被保人トシテ明治三十二年六月二十日金貳千圓ノ生命保險契約ヲ締結シ其保險料三月分金拾壹圓參拾貳錢ヲ拂渡シタリ然ルニカギハ全年八月二十九日病死シタルヲ以テ會社ノ規約ニ依リ未拂九ヶ月分金卅三圓九拾六錢ヲ保險金二千圓ヨリ引去リ殘額千九百六拾六圓〇四錢及ヒ之ニ對スル損害金トシテ明治三十二年十一月二日ヨリ判決執行ニ至ル迄年六分ノ利子ヲ付シ支拂ヲ受ケタシト云フニアリテ甲一號證乃至甲四號證ヲ提出セリ被告ハ主文ノ如ク判決受度ト申立其事實ハ原告ト保險契約ヲ結ヒタルコトハ原告陳述ノ如シト雖モ原告ハ最初其申込ヲ爲スニ際シ被保人タルヘキ原告ノ妻カギハ全ク肺病患者ナルニモ拘ハラヌ生後健全云々醫師ノ診査ヲ受ケタルモ三日以上就寢セシコトナシト記シ恰カモ無病健全ナルカ如ク虚偽ノ陳述ヲ爲シ以テ保險契約ニ重要ナル病歴及現症ニ付テ詐僞ノ陳述ヲ爲シタルモノナルヲ以テ本件原告トノ契約ハ全ク無効ノモノトス故ニ其請求ニ應スルノ義務ナシト言フニアリテ乙一號證乃至乙四號證ヲ提出セリ

理 由

本件保險契約ノ締結ハ明治三十二年六月二十日ナルコトハ當事者ニ爭ナキ事實トス而シテ本件ノ爭點ハ該契約ノ申込ヲ爲スニ當リ重要ナル被保人カギノ病歴及現症ヲ原告ニ於テ知了シナカラ之レヲ

被告會社ニ告知セス恰モ普通健全者ノ如ク陳述シ以テ契約ヲ締結シタルモノナリヤ否ヤニアリ案スルニ乙四號證ナル證人稲田宣四郎ハ明治三十二年五月被保人カギヲ肺尖加答兒ト診斷シ其付添人タルシ原告ニ對シ肺ニ異狀アレハ十分ノ手當ヲ爲スヘシトノ注意ヲ與ヘタリト證言セルヲ以テ當時原告ハ被保人カギカ肺病ニ罹レルコトヲ知リタル事實ハ之ヲ認ムルニ足ル而シテ被保人カ全年五月ヨリ全年六月十九日迄肺病ニ罹リ川原病院ノ治療ヲ受ケ居タル事實ハ乙三號證ニ依リ明白ニシテ即チ原告カ本件ノ保險契約ヲ締結シタルハ其以後ニ係ルヲ以テ已往又ハ現在ニ於テ被保人カ肺病ニ罹リタルヤ否ハ生命保險契約ヲ爲スニ於テ重要ナル事項ナレハ契約者タル原告ハ進テ之ヲ告知セザルヘカラサルモノナルニ其告知ヲナサハリシノミナラス乙一號證申込證書ニ三日以上就寢セシコトナシト陳述シタルカ如キハ契約申込ニ對シ詐欺隱蔽ノ廉アルモノトス然ルニ原告ハ甲二號證ニ依リ川原汎ニ診察ヲ受ケタルモ病名判然セスト主張スレトモ乙三號證ニ依リ數回診察ノ結果肺滲潤症ト診斷シタリトアリ尙甲四號證ヲ以テ稲田宣四郎ノ申立ハ充分記憶ナシトアルヲ以テ斷定シタル申立ニアラスト主張スレトモ乙四號證ニ依レハ全人カカギヲ肺尖加答兒ト診斷シ之ニ相當スル投藥ヲ爲シ且原告ノ間ニ對シ病狀及自後ノ養生法ニ付注意ヲ與ヘタル點ハ明瞭ナリ唯數月後ノ今日ハ詳細ハ記憶セスト云フニ過キサルヲ以テ之レヨリ其全部ノ證言ヲ不判明ノモノトナスヲ得ス要スルニ原告カ本件契約ノ當時被保人カカガ會テ肺病ニ罹リタルコトヲ知ラサリシトノ主張ハ前顯説明ニ依リ當時之

ヲ知了シ居タルモノト認ムルカ故ニ原告カ之ヲ告知セサリシ事實ハ乙一號證ノ申込當時ノ條件ニ背違シタル者ニシテ本件當事者間ノ生命保險契約ハ全然無効ノモノトシ原告ノ請求ヲ理由ナシトナス所以ナリ其他ノ双方カ主張ハ必要ヲ認メサルヲ以テ説明ヲ爲サス主文ノ如ク判決スルモノナリ
明治三十四年十二月五日

名古屋地方裁判所民事第一部

裁判長判事 藤田 菊江 判事 岩下 知 敬 判事 橋倉 次雄

本件ハ四十三岩井慶隆對仁壽生命保險株式會社事件ト同一ニシテ説明ヲ要セス本判決ハ至當ナリトス

六十四 山取ミ子對共濟生命保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險契約ノ當時被保險者カ重要ナル既往ノ疾病ヲ告知セサリシヲ以テ契約ハ無効ナリ

判決正本

原告 山取ミ子
被告 共濟生命保險株式會社
右全社取締役法定代理人 安田善四郎

京市本所區表町十六番地平民無業

全市日本橋區小舟町三丁目九番地

右當事者間ノ明治三十四年ノ第六六四號生命保險金請求事件ニ付當裁判所ハ判決ヲ爲スコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人平井恒之助ハ一定ノ申立トシテ被告ハ原告ニ金五百圓ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ事實トシテ原告ノ亡夫山取龜次郎ハ明治三十三年九月五日被告ト生命保險契約ヲ締結シ保險金額五百圓保險料一ヶ年金三十二圓六十五錢保險期間ヲ明治四十八年九月五日マテト定メ且自ラ被保險者トナリ原告ヲ以テ保險金受取人ト定メタリ然ルニ被保險者山取龜次郎ハ明治三十四年一月十四日食道狹窄症及左肺結核症ニ因リ死亡シタルヲ以テ原告ハ全月十九日其旨ヲ被告ニ通知シ尋テ保險金額ノ支拂ヲ請求シタルニ言フ左右ニ托シテ之ヲ支拂ハス因テ本訴ニ及ヒタリ龜次郎カ明治三十三年八月六日ヨリ全月十二日マテ相州葉山ニ轉地療養ヲ爲シタルハ事實ナルモ被告ノ供出スルカ如キ疾病ノ爲メニ爲シタルモノニ非ス龜次郎ハ平素酒ヲ好ミ其當時多量ニ飲酒セシト氣候ノ變遷トニ因リ醫師ノ勸告ニ從ヒ轉地シタルニ葉山ヨリ歸京後十月十九日醫師ノ

診察ヲ求メタルニ食道狭窄症ノ初期ナリトノ診断ヲ受ケタルモノニシテ契約締結ノ當時即チ明治三十三年九月五日ニ於テハ此ノ如キ疾病ニ罹リ居リタルモノニ非ス本件ノ契約ニ被保險者カ契約申込ノ際重要ナル事實ヲ告ケヌ又ハ重要ナル事實ニ付キ不實ノ事ヲ告ケタルトキハ契約ヲ無効トスル旨ノ約款アルコトハ之ヲ認ムト供述シ甲第二三號證ヲ提出シ石井久成ノ證言及ヒ高山正雄ノ鑑定ヲ引用シ乙號證ノ成立ヲ認メタリ

被告訴訟代理人太田資時ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト申立テ其答辯ノ要旨ハ本件ノ契約ノ成立及ヒ被保險者山取龜次郎死亡ノ事實ハ之ヲ認ム然レトモ被保險者山取龜次郎ハ契約締結ノ際其死因タル食道狭窄症及左肺結核症ノ疾病アルコトヲ隠蔽シテ其事實ヲ被告ニ告知セザリシモノナルカ故ニ本件契約ハ原告カ認ムル約款ニ依リ當然無効ナリ初メ龜次郎カ被告ニ生命保險契約ノ申込ヲ爲シタルハ明治三十三年九月二日ニシテ當時被告ハ醫員ヲシテ龜次郎ノ身體検査ヲ爲サシメルニ同人ハ既往ノ病歴ニ付キ天然痘及癩疹ヲ經過シタル外他ニ疾病外症ナシト陳述シタルノミナリシヲ以テ醫員ハ死亡ノ原因タル食道狭窄症アルコトヲ知ル能ハサリシ蓋シ食道狭窄症ハ其初期ニ在リテハ他覺的徵候ナク唯自覺症ニ止マルヲ以テ名醫ト雖モ患者ノ自覺的病症ヲ聞クニ非サレハ之ヲ知ルコト能ハス然ルニ龜次郎ハ常ニ慢性咽頭炎及胃加答兒ヲ固有シ本件契約ノ申込ヨリ二十餘日前ニ於テ該症増進シテ自覺ノ程度ニ達シ數回醫師ノ診察治療ヲ受ケ居リタリシカ漸

次嚥下ニ際シ温液ノ食道ニ刺激スルニ至リ醫師ハ之ヲ以テ食道糜爛ナリト認メ龜次郎ニ其病狀ヲ告ケ飲食物ヲ嚴戒シ攝生法ヲ命シ約三週間餘服藥セシメタル後葉山ニ轉地療養ヲ爲サシメタリ龜次郎ハ醫師ノ命ニ從ヒ服藥攝生ヲ爲シ轉地先ヨリ歸京後凡二十餘日ヲ經テ九月二日日本訴契約ノ申込ヲ爲シタルモノナルカ故ニ該申込書ニ記載セル既往病歴中咽頭炎及ヒ胃加答兒ハ勿論食道狭窄症ハ之ヲ隠蔽シテ告知セザリシモノナリ從テ本件契約ハ無効ニシテ被告ハ保險金支拂ノ義務ヲ負ハスト云フニ在リ立證トシテ乙第一、二、三號證ヲ提出シ石井久成ノ證言高山正雄ノ鑑定及ヒ甲第二號證ヲ引用シタリ

理由

本件ノ争點ハ被保險者山取龜次郎ハ契約ノ當時被告ニ重要事項ノ告知ヲ爲サザリシ者ナルヤ否ヤニ在リ案スルニ明治三十三年八月中龜次郎カ慢性咽頭炎及胃加答兒症ヲ有シ醫師ノ診断ヲ受ケ其疾病アルコトヲ知リ居リタル事實ハ乙第三號證及ヒ石井久成ノ證言ニ依リテ容易ニ認ムルコトヲ得被告ハ胃加答兒ト食道狭窄症トノ間ニ密接ノ關係アルガ如ク論ズト雖モ此二ノ病症ノ間ニ病理上何等ノ關係ナキコト高山正雄ノ鑑定ニ徴シテ明ラカナルカ故ニ胃加答兒症ノ増進ヲ以テ直チニ食道狭窄症ノ自覺症狀ナリト言フコト能ハズ然レトモ明治三十三年八月中龜次郎カ醫師ノ診察ヲ受ケ服藥ヲ爲シ醫師ノ勸告ニ從ヒ八月六日ヨリ全日十二日マテ葉山ニ轉地療養ヲ爲シタル事實ハ原告ノ自認スル所ニ

シテ其轉地療養ヲ爲スニ至リタルハ慢性咽頭炎及胃加答兒ノ爲ナリシコト石井久成ノ證言スル所ナリ而シテ本件ノ契約ハ龜次郎カ轉地先ヨリ歸京後二十餘日ヲ經過シタル九月五日ニ於テ締結セラレタリトスレハ此受診服藥轉地療養及ヒ二十四日前ニ歸京シタル事實ハ生命保險契約ヲ締結スルニ付被告ニ於テ知ルコトヲ要スル重要事項ナリト認ムルヲ至當トス何トナレハ被告此等ノ事實ヲ知ルトキハ充分ナル牒格検査ヲ爲シ或ハ全ク契約ヲ締結セサルヘク或ハ異リタル條件ノ下ニ契約ヲ締結セシナラント認ムルコトヲ得レハナリ死亡ノ主因タル食道狹窄症ハ何時發生セシモノナルヤ之ヲ判定スルコト甚タ難シト雖モ高山正雄ノ鑑定ニ依レハ食道狹窄症ノ初期ヨリ死亡ニ至ルマテノ時間ハ該症ヲ生セシメタル原因ニ醫療患者ノ攝養狀態ノ如何ニ依リテ一定セサルモ最モ難症タル食道癌ニ因ルモノト雖モ大約一年乃至一年半ニシテ死ニ至ルカ如シ本件ニ於テ龜次郎ノ死亡シタルハ明治三十四年一月十四日ニシテ契約ノ締結セラレタルハ前年九月五日其間僅ニ四ヶ月半ナリ而シテ死亡當時ノ病症ハ食道狹窄症及ヒ左肺結核症ナリシト雖モ左肺結核症ハ明治三十四年一月ニ及ヒテ其徵候ヲ顯ハシタル者ニシテ主要ナル病症ハ食道狹窄症ナリシコト龜次郎ハ轉地療養ヲ爲ス前ニ於テ嚥下ノ際温液ノ食道ニ刺激ヲ與フルコトヲ訴ヘシコト轉地先ヨリ歸京後俄然餘リ固形物ヲ嚥下スルコト能ハサルニ至リ大ニ驚キ來リテ診察ヲ受ケシニ顯然タル食道狹窄症ノ徵候アリテ其後病勢ノ進捗頗ル急速ナリシコト及ヒ食道狹窄症ノ原因不明ナリシコトハ石井久成カ甲第二號證及乙第三號證ニ記載

スル所ニシテ其記載ノ真正ナルコトハ同人カ當公庭ニ於テ證言スル所ナリ此等ノ事實ヲ湊合シテ考フルトキハ龜次郎カ九月五日即チ事實ヲ確然認メ得サルトスルモ其病原ヲ有セシ事實ハ之ヲ認ムルニ難カラス果シテ然ラハ龜次郎カ八月中醫師ノ診斷ヲ受ケ服藥シ其勸告ニ因リ轉地療養ヲ爲シ二十餘日前歸京シタル事實ハ本件契約ニ於ケル重要ナル事項ナルコト愈明ナリ然ルニ龜次郎ハ此重要ナル事項ヲ告ケズ唯既往ノ病歴トシテ天然痘及麻疹ヲ經タル外他ニ疾病外症ナシト陳述シタルハ即チ重要ナル事項ノ告知ヲ爲サザリシモノニシテ本件ノ契約ハ其約款ニ從ヒ當然無効ナリト云ハサルヘカラス食道狹窄症ハ患者ノ自覺的症狀ヲ聞クニ非サレハ醫師之ヲ診斷スルコトヲ得サルヲ通例トストハ高山正雄ノ鑑定スル所ナリ故ニ被告方ノ醫員カ牒格検査ヲ爲シタル際該症ノ病原ヲ發見スルコト能ハザリシハ決シテ其過失ニ因ルモノニアラス之ヲ要スルニ本件契約ハ被保險者山取龜次郎ノ告知義務不履行ニ因リ當然無効ナルヲ以テ被告ニ保險金支拂ノ義務ナク原告ノ請求ハ不當ナリ因テ主文ノ如ク判決ヲ爲シタリ

明治三十四年十二月廿七日

東京地方裁判所第二民事部

裁判長判事 和 仁 貞 吉 判事 設 樂 勇 雄 判事 横 田 五 郎

附 言

本判決モ亦五十藤ノ木ハツ對北海生命保險會社事件ト同シク商法第四百廿九條ノ完全ナル適用ニシテ非難スヘキ點ナシ但シ裁判官カ被保險者ノ葉山ヘ轉地療養シタル事實ヲ重要ト見做シテ論スルカト思ヘハ或ハ食道狹窄症ヲ主トシテ論スルカ如ク終始一貫セサルノ感アルハ聊遺憾ナリトス

六十五 山取ミ子對共濟生命保險株式會社事件 控訴

判決要旨

被保險者ハ契約ノ當時重要ナル疾病ヲ自覺セス故ニ之ヲ陳述スルノ義務ナシ

判決正本

東京市本所區表町十六番地平民無職業

控訴人 山 取 ミ 子

東京市日本橋區小舟町三丁目九番地

被控訴人 共濟生命保險株式會社

東京市日本橋區小網町四丁目十八番地平民右會社取締役

右訴訟代理人辯護士 平 井 恒 之 助

右法定代理人 安 田 善 四 郎

右訴訟代理人辯護士 太 田 資 時

右當事者間ノ保險金請求ノ控訴ニ付判決スルコト左ノ如シ

主 文

明治三十四年十二月廿七日東京地方裁判所ノ言渡シタル判決ヲ廢棄ス

被控訴人ハ控訴人ノ請求ノ金五百圓ヲ辨濟スヘシ
訴訟費用ハ第一第二審共ニ被控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴人ハ主文掲記ノ一定ノ申立ヲ爲シ被控訴人ハ本件控訴ノ棄却ヲ求ムト申立テタリ當事者ノ演述シタル事實上ノ主張ハ原判決ノ事實摘示ニ同シキヲ以テ之ヲ引用ス

理 由

本件ノ爭點ハ被保險者山取龜次郎カ明治三十三年九月五日保險契約締結ノ際告知スヘキ重要事項タル食道狹窄症ニ罹リ居ルコトヲ知リツ、之ヲ被控訴人ニ告知セザリシヤ否ヤニ在リ
按スルニ第一審ノ證人石井久成ノ證言並ニ同人ノ作リタル甲乙第三號證及ヒ乙第三號證ニ右龜次郎ノ死因タリシ食道狹窄症ハ明治三十二年十月十九日龜次郎カ證人方ニ來リタル際診斷シテ同症ノ初期ト診斷シタリ證人ハ龜次郎ニ訊問シタルニ龜次郎ハ四五日前ヨリ時々嚥下ノ際困難ヲ覺エ流動物ノミ自由ノ嚥下ヲ許スモノナリト訴タリ其以前七月九日診察ノ際ハ慢性咽喉炎及ヒ胃加答兒症ナリトアリ又高山正雄ノ鑑定書ニ依レハ胃加答兒ト食道狹窄病トハ直接ノ關係ナシトアリ右各證ニ據レハ龜次郎ハ保險契約締結ノ際食道狹窄病ニ罹リタルコトヲ自覺シ居タリト認ムルヲ得ス隨テ之ヲ被控訴人ニ告知スルニ由ナキヲ以テ重要事項ヲ隱蔽シタリト謂フヲ得ス然ラハ甲一號證契約ニ基ク本件控

訴人ノ請求ハ正當ナリトス依テ主文ノ如ク判決ス

明治三十五年七月七日

東京控訴院民事第一部

裁判長判事

榑原幾久若

判事 宮島謙三郎

判事 松岡義正

判事

橋爪捨藏

判事 淺見倫太郎

附言

本判决ヲ下スニ方リテハ裁判官ハ被保險者ノ既往症ノ隱蔽即チ第一審判決ノ要點ハ之ヲ排斥シテ問ハヌ契約ノ效力ヲ左右スルモノハ直接ノ死因タル食道狹窄症ノ自覺有無ノ告知ノミナリトシタルハ證據ノ認定方ニモ因ルヘケレト甚當ヲ得サル判決ト評セサルヘカラス其理由ニ至リテハ多クノ同種判決例ニ對シテ之ヲ論シ盡セルカ故ニ茲ニ贅言セス

第二部 火災保險

(一) 田中藤作對家屋物品火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

甲 保險料拂込ノ爲メニ定メラレタル期日內ニ保險料ヲ拂込マサレハ保險契約ハ當然效力ヲ失フ

乙 危險發生後保險者カ保險料ヲ領收シタルハ法律行爲ノ錯誤ニシテ契約ハ成立セス

判決正本

東京市下谷區坂本町二丁目十六番地

原告 田中藤作

右訴訟代理人辯護士

長谷川菊太郎

同市神田區堅大工町十八番地

被告 家屋物品火災保險株式會社

右同所右會社々長

右法定代理人

右訴訟代理人辯護士

小林藤次郎

中鉢美明

主文

右當事者間ノ明治三十二年(ハ)第七四五號保險金請求事件ニ付當區裁判所ハ審理判決スル左ノ如シ

明治三十二年三月二十四日言渡ノ當廳三三二(ハ)第七四五號缺席判決ハ之ヲ廢棄ス

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ノ内明治三十二年三月廿四日口頭辯論ノ分ハ被告ノ負擔トス其ノ他ハ原告之ヲ負擔スヘ

シ

事實

原告代理人一定ノ申立トシテ被告ハ原告ニ金五拾圓ヲ支拂フヘシトノ判決ヲ請フトノ陳述ヲナシ其事實ハ原告ハ明治三十一年五月十三日被告會社ト契約シ其所有ニ係ル京橋區八丁堀岡崎町一丁目廿五番地所在木造鐵力二階家一棟ヲ被告會社ニ保險セシメ若同被保險物ノ火災ニ罹ル時ハ被告會社ハ保險金五拾圓ヲ原告ニ支拂フヘキ筈ナリ然ルニ被保險物ハ明治三十一年十二月廿三日火災ノ爲メ全部燒失セシニ付原告ハ契約ノ趣旨ニヨリ被告ニ對シ保險金支拂ヲ請求セシモ之ニ應セス而シテ明治三十一年五月十三日ヨリ同明治三十二年五月十二日ニ至ル迄ノ保險料ニ幾度ノ不拂アリタルハ事實ナレモ被告會社ハ嘗テ解約ノ通知ヲ原告ニ爲シタルヲナク又罹災當時ニ至ル迄原告ヲ被保險者トシテ取扱ヒ來タル事實ニ徴スルモ保險契約ノ有效ニ存スル間ニ保險シタル危險ニ遭遇セシモノナレハ被告會社ハ保險金支拂ノ義務アリト云フニアリテ甲三號證ヲ提出セリ被告代理人ハ原告ノ請求棄却ノ判決ヲ求ム其事實ハ原告ト保險契約ヲ締結セルハ相違ナシト雖トモ被告會社ノ契約ニ基キ保險料ノ支拂ヲ怠ル時ハ保險契約ハ當然無効トナルヘキナリ原告ハ支拂ヲ怠リタル爲メ被告ハ明治三十一

年十一月十五日付ヲ以テ同年四月廿三日迄ニ拂込ヲナスヘキ旨通知セルモ原告ハ何等ノ回答ヲ爲サス故ニ本件契約ハ此日ヲ以テ無効ニ歸シタルモノナリ然ルニ原告ハ被保險物タル家屋カ同年十二月廿三日火災ニ罹リタルヲ寄貨トシ翌廿四日ニ至リ被告會社ニ保險料ヲ持參セリ仍テ被告ハ罹災ノ事實ヲ知ラサルヲ以テ保險契約ヲ復活セシメントシ之ヲ受取タルトモ當時目的物存在セサルヲ以テ原告ト保險ノ契約成立スヘキ筈ナシ又甲二號證ノ内十二月十六日付ノ分ハ會社ニテ一般ノ關係人ニ對スル廣告ナル以テ原告ヲ被保險者トシテ取扱タリトノ證明トスルニ足ラス仍テ原告ノ請求ニ應スル能ハスト云フニアリテ甲一號證中第四條ヲ援用シ以テ被告代理人主張ノ事實ヲ立證スト云フニア

理由

本件ニ於テハ先當事者間ノ保險契約ハ豫メ被保險物罹災當時迄繼續セシヤ否ヲ決スルヲ要ス甲一號證第四條ニ保險料拂込ナキ時ハ契約ハ當然無効トス云々トアリ去レハ拂込ナキ場合ニ於テ被告會社ハ殊更ニ破約ノ通知ヲ爲スヲ要セス契約ノ無効ヲ主張スルノ地位ニアリ然レモ被告ハ甲二號證ヲ以テ明治三十一年十一月廿二日迄ノ期間ハ無効ヲ主張スルノ利益ヲ拋棄セシヲ以テ原告ハ其期間内ニ保險料ノ拂込ヲナスニ於テハ保險料ヲ遲滞ナク支拂タルト同一ノ地位ヲ得ヘシト雖モ其期間ヲ經過セルヲ以テ右期間滿了ト共ニ本件保險契約ハ無効ニ歸シタルモノト云ハサルヘカラス而シテ被告

ハ猶同年十二月十六日付ノ甲號證ヲ以テ原告ニ送致セシハ新ナル契約締結ノ申込ト見ルノ外ナシ何者若シ假リニ被告ニ於テ無理ニ無効ヲ主張スルノ利益ヲ拋棄セシ書面ト解釋スルハ被告會社ノ甚シキ不利益ヲ來スヘキ以テ如此不利益ナル意思表示ヲナシタリト想像スル難キ耳ナラス其書面中必シモ被保險者耳ニ發セル文書ト認メ難ク却テ被保險者ヲ募集スル廣告ト看做スヘキ文詞ニ外ナケレハナリ去レハ原告ハ被告ノ申込ニ對シ被保險者タルヘキ承諾ヲ表シタルモノナレモ被保險物ニ付キ危險ノ既ニ生シタル事實ハ原告ノ能ク之ヲ知リタルモ被告會社ハ之ヲ知ラヌシテ保險料ヲ受取リタルモノナレハ法律行爲ニ錯誤アリタルモノナルヲ以テ此新契約ハ無効ノモノナリ仍テ危險發生ノ際當事者間ニ有效ナル保險契約存セサルヲ以テ原告ノ請求ハ其當ヲ得サルモノトシ民事訴訟法第二百六十一條ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス

明治三十二年五月九日

東京區裁判所

判事 櫻井駒次郎

附 言

本件ノ事實ハ頗ル簡單ニシテ爭訟ノ餘地ナキカ如シト雖トモ被保險者ハ保險會社カ契約繼續ノ爲メニ發シタル勸誘ノ書面ヲ以テ把柄トシ之ヲ以テ保險契約ノ有效ヲ主張セントシ又保險會社ヨリ

解約ノ通知ヲ受ケサリシヲ以テ契約ハ無効トナラスト訴ヘタルナリ而シテ判官カ共ニ之ヲ排斥シタルハ至當ノ判決ナリトス

(二) 大澤宅次郎對家屋物品火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ自己ノ所有ニアラサル物件ヲ其所有物ナリト陳述シテ締結シタル保險契約ハ無効ナリ

判決正本

東京市淺草區北區助町四拾五番地平民

原告 大澤宅次郎

右訴訟代理人辯護士

結城隆太郎

同市神田區堅大工町十八番地

被告 家屋物品火災保險株式會社

右法律上代理人取締役

中鉢美明

右當事者間ノ明治三十二年(ハ)第六二四號保險金支拂請求事件ニ付被告ノ故障ニ因リ新辯論ニ基キ判決スルコト左ノ如シ

主 文

明治三十二年十月十九日言渡シタル關席判決ヲ廢棄ス

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ關席ニ因テ生シタル分ハ被告ニ於テ其他ハ原告ニ於テ負擔スヘシ

事實

原告ハ被告ハ原告ニ對シ金七百圓ニ明治三十二年八月ヨリ判決執行濟ニ至ル迄年五分ノ損害金ヲ加ヘ辨濟スヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決アランコトヲ申立テタリ其陳述シタル事實ハ原告ハ訴外淺水米藏ヨリ借受ケ居ル東京府南足立郡千住町字千住中組八百五十八番地家屋内ニ貯藏スル商品ニ對シ明治三十二年七月十七日被告ト火災保險契約ヲ結ヒタリ其被保險物ハ一ケ年平均在高壹萬貫目ノ紙數其保險金ハ七百圓其保險料ハ金十九圓六十錢其保險期間ハ明治卅二年七月十七日ヨリ明治卅三年七月十六日マテナリ而シテ原告ハ保險料ノ内金五圓六十八錢四厘ヲ被告ニ拂込ミ火災保險證書ヲ受取リタリ然ルニ被保險物ヲ貯藏スル所ノ前掲家屋ハ明治卅二年七月廿七日午前二時頃燒失シ被保險物モ亦悉皆燒失シタリ因テ保險金ノ支拂ヲ求ムト云フニ在リ證據トシテ甲第一乃至第六號證ヲ提出シ植村市太郎ノ證言ヲ援用シタリ而シテ乙號證ノ成立ヲ認メタリ

被告ハ原告ノ請求ヲ棄却シ訴訟費用ハ原告ノ負擔タルヘキ旨判決アリ度ト申立テタリ其陳述シタル事實ハ被告カ原告ト火災保險契約ヲ結ヒタルコト并ニ火災ノアリタル事實ハ原告主張ノ通相違ナシ然レトモ被保險物ハ原告ノ云フカ如ク單ニ紙類ノミニ非スシテ之ヲ貯藏スル家屋一棟ヲ含ムモノナ

リシ被告ハ原告ヨリ被保險物燒失ノ通知ニ接スルヤ成規ノ調査ヲ遂ケシ處豈圖ランヤ原告カ其所有ナリト稱シテ保險ニ附シタル家屋ハ訴外淺水米藏ノ所有ニシテ又契約當時其所有ナリトシテ示シタル商品ハ訴外小倉景一郎ノ所有ナルコトヲ發見シタリ抑々原告ハ反古屑宰取ヲ爲シ居ルモ營業組合ニ加入セス又公ノ諸届等ニハ無職ト爲シ居ルモノニシテ資産アル者ニ非ス加フルニ刑餘ノ人ナル等ノ事實ヲ綜合スレハ原告ハ契約ノ際惡意ヲ以テ被保險物所有ヲ偽リタルモノナルコト明カナリ故ニ其契約無効ナリト云フニ在リ證據トシテ乙第一號證ノ一、二ヲ提出シ小倉景一郎ノ證言ヲ採用シタリ又甲第一第二號證ノ成立ヲ認メ第三第五號證ハ不明第四號證ハ知ラス第六號證ハ認メスト陳述シタリ

理由

本件ノ爭點ハ當事者間ニ約シタリト稱スル保險契約ノ被保險物ハ家屋ト商品ト二者ナリシコト結約當時被保險物ニ付虛偽ノ陳述アリシ爲メ其契約ノ効ナキヤ否ヤニ點ニ在リ

第一點ニ付キ原告ノ成立ヲ認メタル乙第一號證ヲ徵スルニ其一即チ保險申込書ノ被保險物表示欄内ニハカヤ葺木造建家ト記シ次ニ商品紙類ヲ連記シ其ノ二即チ被保險物圖面ニハ建物ノ構造坪數等ヲ詳記シアルヲ以テ原告ノ申込ハ家屋ト商品ト二者タリシコトヲ認ムルニ足ル又甲第一號證カ火災保險證書ノ被保險物表示ニハ内譯木造葺云々建物壹棟ト掲ケ次ニ商品紙類壹萬貫云々ト掲ケ直ニ其

後ニ時價ヲ示スニ當リ合計云々ト掲ケアルヲ以テ之ヲ乙第一號證ノ申込書ニ照シ双方ノ意思ヲ推尋
 スルハ被保險物ハ家屋ト商品ノ二者ヲ含ムモノナリト解釋スルヲ相當トス
 第二點ニ付キ乙第一號證ノ一ヲ見ルニ被保險物トシテ家屋ト商品トヲ掲ケ被保險物所有者始メ右表
 示欄内ニハ大澤宅次郎ト記載セリ然ルニ右家屋ハ訴外淺水米藏ノ所有ナル其争ナキ所ナリ而テ家屋
 所有者ヲ過テ陳告スル如キハ通俗ノ事實ニ反スルヲ以テ原告ハ故ラニ自己ノ所有ト稱シタルモノト
 認ムルヲ相當トス殊ニ被保險物ノ所有者如何ハ保險ノ重要ナル事項ニ屬スルヲ以テ此點ニ付キ故ラ
 ニ不實ノ事ヲ告ケタル以上ハ其ノ契約全体ヲ無効ト看做ササルヲ得ス
 右ノ理由ニヨリ原告ノ請求ヲ不當ト爲シ民事訴訟法第二百六十一條第二百六十二條第七十二條ニ從
 ヒ主文ノ如ク判決シタリ

明治三十二年十二月廿五日

東京地方裁判所第二民事部

裁判長判事 横山 寛平 判事 嘉山 幹一 判事 水原 親次

附言

本件ニ於ケル被保險者ハ會社ノ主張スル如ク惡意ナリシヤ否ヤヲ知ラズト雖トモ兎モ角保險契約ノ
 何物タルヲ辨セス又申込書ニ何事ヲ記載セシヤモ知ラサル不注意ナル人物ト謂ハサルヘカラス此ノ
 如ク餘リニ常識ヲ脱シタルカ爲ニ判官ヲシテ故意ノ陳述ト認定セシメタルナリ而シテ判決ノ趣旨ニ
 至リテハ固ヨリ當然ニシテ批評スヘキ餘地ナシ

(三) 高木壽治對日本酒造火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險契約ノ繼續ハ契約自體ノ繼續ニ止マリ前契約ニ付テ有スル第三者ノ權利マテモ繼續セシ
 ムルモノニアラス

判決正本

神奈川縣横濱市眞砂町一丁目三番地平民自轉車業 大坂市東區今橋四丁目四十一番地
 原告 高木 壽治 被告 日本酒造火災保險株式會社
 同縣同市住吉町五丁目六十五番地辯護士 右會社東京支店支配人
 右訴訟代理人 安齋 林 八郎 右法律上代理人 横田 良介
 右訴訟代理人辯護士 岸 清一
 全 辯護士 宮澤 近一
 全 辯護士 伊藤 和三郎

右當事者間ノ明治三十二年第五五九號保險金支拂請求事件ニ付判決スル左ノ如シ

主文

原告ノ請求ヲ棄却ス
訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實

原告訴訟代理人一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ對シ金千五百圓及ヒ之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本件判決執行濟ニ至ルマテ年百分ノ六ノ利息ヲ支拂フヘシトノ判決ヲ求ムト云フニ在リテ其事實陳述ノ要旨ハ訴外仁木與七ハ明治三十一年十一月十九日其所有ニ係ル神奈川縣橫濱市足曳町二丁目及ヒ雲井町所在木造瓦葺二階建住宅一棟外住宅一棟ニ付キ被告會社ト火災保險契約ヲ締結シ保險金額ハ金二千圓保險期間ハ一ケ年トシ尙ホ滿期ノ日ヨリ三十日以内ニ更ニ次期ノ保險料ヲ拂込ムトキハ別ニ申込ノ手續ヲ要セス前契約ヲ繼續スルコトアルヘキ旨ヲ約シタリ其後明治三十二年八月ニ至リ仁木與七ハ該家屋ヲ訴外鈴木辰次郎ニ讓渡シタル結果同年同月十八日被告ノ承諾ヲ經テ右保險契約ヨリ生シタル權利ヲ同人ニ讓渡セリ然ルニ同人ハ其原告ニ對スル債務ノ擔保トシテ原告ノ爲メニ該家屋ノ上ニ抵當權ヲ設定シタル結果原告ハ明治三十二年八月二十日同人及ヒ被告ノ承諾ヲ得テ被保險物カ火災ニ罹リ被告ヨリ保險金額ヲ支拂フヘキ場合ニ於テ其金額中一千五百圓ヲ受取ルヘキ權利ヲ取得シタリ而シテ該家屋ハ明治三十三年二月二十三日火災ニ罹リ燒失シタルヲ以テ原告ハ被告ニ對シ屢々前記金額ノ支拂ヲ請求セシモ應セサルニ因リ本訴ヲ提起シタリト云ニ在リ又被告ノ

答辯ニ對シテハ鈴木辰次郎ハ契約ノ趣旨ニ從ヒ次期ノ保險料ヲ拂込ミ前契約ヲ繼續シタル者ニシテ更新シタル者ニアラス從ツテ其繼續シタル契約ノ效力ハ原告ニ及フヘキヤ當然ナリ又鈴木辰次郎カ家屋物品火災保險株式會社ト保險契約ヲ締結シタルハ被保險物ノ價格カ八千五百圓ヨリ一万餘圓ニ増加シタルニ基キ其増加ノ部分ヲ更ニ復タ保險ニ附シタル者ニ過キサルカ故ニ之ヲ以テ重複保險ニ付シタルモノト謂フヲ得スト陳述シ乙第一、二號證ノ成立ヲ認メ且ツ乙第一號證ヲ引用シタリ被告訴訟代理人一定ノ申立ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云フニ在リテ其答辯要旨ハ被告カ仁木與七ト原告主張ノ如キ契約ヲ締結シタルコト明治三十二年八月十六日右建物ヲ鈴木辰次郎カ讓受ケタル結果同人カ被告ノ承諾ヲ經テ契約上ノ權利ヲ繼承シ同年八月二十日同人カ原告ノ爲メ被告ノ承諾ヲ經テ契約上ノ權利ヲ原告ニ讓渡シタルコト右契約ハ滿期ニ至テ更ニ一ケ年間延期繼續シタルコト並ニ右建物カ明治三十三年二月二十三日火災ニ罹リ燒失シタルコトハ事實ナリ然レトモ所謂延期繼續ハ法律上更新ノ性質ヲ有スルモノ假令然ラストスルモ第三者ニ對シテ其效力ヲ及ホスヘキモノニ非サルカ故ニ當初契約ニ定メタル一ケ年ノ期間經過後ニ生シタル損害ニ付キ原告ニ對シ賠償ノ義務ヲ負フヘキニ非ヌ加之契約第二條第七號ニ據レハ被保險人カ被保險物ニ付キ他ノ保險會社ニ重複保險ヲ申込マントスルトキハ直チニ被告ニ届出テ被告ニ於テ保險證書ニ裏書スルカ又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ承諾スルニ非サレハ保險契約ハ無効ニ歸スヘキモノナ

ルニ鈴木辰次郎ハ明治三十二年十月八日家屋物品火災保險株式會社ト重複ニ保險契約ヲ締結シナカラ被告ニ對シテ其届出ヲ爲サス其結果本件契約ハ無効ニ歸シタルモノナリ一步ヲ譲リ右家屋物品火災保險株式會社トノ契約ヲ以テ重複保險ニ付シタルモノニアラストスルモ契約第二條第八號ニ據レハ總テ火災保險申込書若クハ保險證書ニ記載シタル事項ノ變更シタルトキハ亦前同様ノ手續ヲ爲スニ非サレハ保險契約ハ無効ニ歸スヘキモノナリ而シテ他會社トノ契約アルコトハ保險申込證書及保險證書ニ記載ナキ事項ナリシカ故ニ前記家屋物品火災保險株式會社トノ契約ハ本號ノ規定ニ基キ之ヲ被告ニ届出ツヘキモノナルニ其届出ナキモノナレハ此點ヨリスルモ亦本件契約ハ無効ニ歸シタルモノナリ又被告保險物ノ價格カ金一萬圓餘ニ増加シタリトノ事實ハ之ヲ認メスト云フニ在リ其立證トシテ乙第一號第二號證ヲ提出シタリ

理由

乙第一號證保險規則第十七條第二項ニ據レハ保險契約滿期ノ日ヨリ三十日以内ニ更ニ次期ノ保險料ヲ拂込ムトキハ別ニ申込ノ手續ヲ要セス前契約ヲ繼續スルコアルヘシトアリテ當然繼續スヘキ旨ヲ規定シアラサルカ故ニ仁木與七ト被告トノ間ニ締結シタル當初ノ契約ハ單ニ一ケ年ノ期間ニ付キテノミ効力ヲ有スルモノト解釋セサルヲ得ス從テ鈴木辰次郎ヲ經テ同人ノ權利ヲ讓受ケタル原告モ亦單ニ一ケ年間ニ生シタル損害ニ付テノミ保險金額ノ拂渡ヲ受クルノ權利ヲ有スル者ト認メサルヲ得

ス而シテ本件損害ノ右一ケ年ノ期間内ニ生シタルモノニ非サルコトハ當事者間ニ爭ナキ所ナルカ故ニ原告ノ本訴請求ハ理由ナシトス依テ民事訴訟法第七十二條ヲ適用シ主文ノ如ク判決ス
明治三十三年九月二十六日

東京地方裁判所第三民事部

裁判長判事

松岡 義正

判事 野田 捨藏

判事 三宅 徳業

附言

本件判決ノ理由ハ簡單ニ過キテ甚不深切ノ感アリト雖トモ要スルニ保險規則ノ條項ニ基ケル契約ノ繼續ナルモノハ只申込ノ手續ヲ省略スルノミニシテ新ナル契約ヲ結フモノナルカ故ニ舊契約ニ於テ保險金受取ノ權利ヲ第三者ニ讓渡シタル事實アルモ新契約ニ於テハ更ニ其手續ヲ爲サレハ當然此讓渡ノ事實カ繼續スルモノトハ見做スヲ得スト謂フニアリ法理上當然ノ判決ニシテ保險契約ノ權利ヲ讓受ケタル者ノ最注意スヘキ要點ナリトス而シテ被告會社ノ主張ハ此點ニ加フルニ被保險者カ重複保險ノ事實ヲ告ケサリシコトヲ以テ單ニ原告ノ權利ヲ認メサルノミナラス保險契約自躰ヲモ無効ナリトシタルニ判決ハ第二點ヲ看過シテ更ニ之ニ論シ及サ、リシハ粗漏ト言フヘキカ將又巧ナリト謂フヘキカ

(四) 高木壽治對日本酒造火災保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決ニ同シ

判決正本

神奈川縣横濱市武蔵町一丁目二番地平民自轉車業

控訴人 高木 壽 治

右訴訟代理人辯護士

大坂市東區今橋四十一番地

被控訴人 日本酒造火災保險株式會社

右會社東京支店支配人

安齋 林 八 郎

右訴訟代理人辯護士

横 田 良 介

右當事者間ノ明治三十三年(子)第八百二十八號保險金支拂請求事件ニ付當控訴院ハ判決スルコト左ノ

如シ

主 文

明治三十四年二月二十一日ノ欠席判決ヲ維持ス

右缺席判決以後ニ生シタル訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴代理人ハ前掲欠席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ爲シタリ

控訴代理人ニ於テハ第一審判決ノ全部ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ對シ金壹千五百圓并ニ之ニ對スル明治三十三年二月二十日ヨリ本件判決執行濟ニ至ルマテ年百分ノ六ノ損害金ヲ支拂フヘシトノ判決ヲ求ムト申立テ被控訴代理人ニ於テハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムト申立テタリ而シテ當事者双方ノ供述セル事實上ノ關係ハ第一審判決ニ指示スル處ト同一ナルヲ以テ爰ニ之ヲ引用ス

立證方法トシテ被控訴代理人ハ乙一號乃至七號證ヲ提出シ控訴代理人ハ乙一號證ヲ援用シタリ

理 由

故障ハ適法ナリ

控訴人ハ訴外仁木與七ノ所有家屋ニ對スル保險金額一千五百圓ヲ控訴人ニ支拂フヘシトノ被控訴人ノ意思表示ニ基キ本訴ヲ提起シタル旨主張スルモノニシテ被控訴人カ右意思表示ヲ爲シタルハ當事者間ニ爭ナキ所ナリ控訴人ノ援用シタル乙一號證中第十七條第一項ヲ閱スルニ「保險契約滿期ノ日ヨリ三十日以内ニ更ニ次期ノ保險料ヲ拂込ムトキハ別ニ申込ノ手續ヲ要セス繼續スルコトアルヘシ」トアリテ次期ニ於テハ申込ノ手續ヲ省略シテ更ニ前契約ト同一ノ契約ヲ爲スコトアルヘキ旨ヲ示シタルモノナリ故ニ仁木與七ト被控訴人トノ間ニ締結シタル當初ノ契約ハ單ニ一ケ年ノ期間内ニ於テノミ其效力ヲ有スルモノト認メサルヲ得ス從テ鈴木辰次郎ヲ經テ保險金額ヲ受取ル可キ與七ノ權利ヲ讓受ケタル控訴人モ亦單ニ右一ケ年ノ期間内ニ生シタル損害ニ付テノミ保險金額拂渡ヲ受ク

ルノ權利ヲ有スルモノト云ハサルヘカラス而シテ仁木與七ノ所有家屋カ火災ニ罹リテ燒失シタルハ
當初契約ニ定メタル一ケ年ノ期間經過後ナルコトハ當事者間ニ爭無キ所ナルヲ以テ控訴人ハ被控訴
人ニ對シ本訴金圓ヲ請求スルノ權利ナキモノトス
以上説明スルカ如ク控訴人ノ本訴請求ハ不當ナリトスルヲ以テ自余ノ攻撃及防禦ノ方法ニ關シテ説
明ヲ與フルノ必要ナシ因テ民事訴訟法第四百八條第二百六十一條前段ニ依リ主文ノ如ク判決スルモ
ノナリ

明治三十四年十月十四日

東京控訴院民事第二部

裁判長判事 小 山 温

判事 齋藤十一郎

判事 高 橋 覺

判事 折原吉之助

(五) 近江綴通株式會社對明教保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ契約ノ條項ニ反シテ重複保險ノ事實ヲ保險者ニ通知セザリシ故ニ契約ハ無効タリ

判決正本

滋賀縣大津市御藏町十五番地

原告 近江綴通株式會社

全會社取締役

右法定代理人 阿 部 元 太 郎

大津地方裁判所 屬辯護士

望 月 長 夫

京都市三條通寺町西入

被告 明教保險株式會社

全會社取締役

右法定代理人 古 畑 寅 造

大阪地方裁判所 屬辯護士

右訴訟代理人 砂 川 雄 峻

全 柿 崎 欽 吾

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告ハ訴狀ニ基キ被告ハ金千三百九十九圓五十錢ヲ原告ニ支拂フヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トスト
ノ判決ヲ求ムル申立ヲ爲シ其事由トシテ原告ハ明治卅二年四月原告會社所有ノ工場其他ノ建物時價
九千四百四十二圓五十錢並ニ機械類買得格金二万八千二百七圓五十三錢六厘合計價格金三万七千六
百五十圓三錢六厘ヲ有スル物件ノ爲メ金二万圓ノ火災保險ヲ附スル内議ヲ決シ被告會社大津代理店
西村卯兵衛ニ其申込ヲ爲シタル處同人ハ本社即チ被告會社ヘ協議スルノ必要アリトシテ直ニ其旨ヲ

申送リタルニ本社ニ於テハ一万圓タケ被告會社ニ於テ引受ケ殘一万圓ハ他ノ會社ヘ引受シテラレ度旨ニテ會社副支配人美野田外吉ナルモノ大津市ニ出張シ西村卯兵衛立會ノ上其旨申出タルニヨリ原告ハ被告ノ申出ニ從ヒ被告會社ノ引受ケサル一万圓ハ原告ノ隨意ニ他ノ會社ト契約スヘキコトトシ而シテ被告會社ト明治三十二年四月二十九日付ヲ以テ全日ヨリ明治三十三年四月廿八日迄滿一ケ年間金一万圓ノ保險契約ヲ爲シ全時ニ年掛保險料金一百二十圓ヲ支拂ヒ保險契約全ク成立シタリ然ルニ原告會社ハ不幸ニシテ明治三十三年三月二十日不慮ノ火災ニ罹リ建物及器械時價三万五千七百三十七圓五十一錢七厘ノ内燒殘價格金七千四百拾八圓四拾七錢七厘ヲ控除シ殘額金貳万八千五百八十九圓四錢ハ全ク損害ニ歸シタリ右ハ被告會社ノ保險金額壹万圓并ニ兼テ被告會社ト同様保險契約ヲ爲シ置キタル東京日本明治橫濱ノ四火災保險會社ノ保險金額合計一万圓及原告ノ自己保險ニ屬スル部分ニ割合東京外三會社ニ於テ金七千九百九十九圓五十錢ヲ負擔シ被告會社ニ於テモ同様七千九百九十九圓五十錢ヲ負擔スヘキ等ナルニヨリ全年三月二十三日付ヲ以テ火災屆書火災原因取調書ヲ送附シ保險金ノ請求ニ及ヒタルニ東京外三會社ハ直チニ其負擔額ヲ支拂ヒタルモ被告會社ハ僅カニ内金六百圓ヲ支拂ヒタルモノニシテ其殘額ヲ支拂ハサルニ付不得已茲ニ本訴ニ及ヒタリト演述シ立證方法トシテ甲第一號乃至第三號證ヲ提出シ西村卯兵衛船本務高田清次郎清水耕太郎風卷平ノ證人訊問ヲ申請セリ

事實

被告ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムル申立ヲ爲シ其事由トシテ原告ハ明治三十二年四月中乙第一號證ノ如ク拙者ニ於テ保險證書ニ記載シタルケ條ニ違背スル事有之候ハ、拙者ハ全ク損害金要求ノ權利ヲ失ヒ且貴社ヘ拂込ミタル保險掛金ハ損失ト相成候トモ異議無之候「トノ條件ヲ以テ其所有ノ工場及器械類ニ對シ金一万圓ノ火災保險ヲ被告ニ申込タルニ付被告ハ之ヲ承諾シテ甲第一號證ノ如ク火災保險證書ヲ原告ニ交付シタリ然ルニ其後明治三十三年三月二十日原告會社ハ火災ニ罹リ保險目的物大部分ヲ燒失シタルニ付被告ハ直チニ其取調ニ着手シタル處原告ハ被告會社ト保險契約ヲ締結シタル後被告ノ承諾ナキニモ拘ハラヌ同一目的物ニ付別ニ一万圓ノ重複保險ヲ東京日本明治橫濱ノ四保險會社ト契約セル事實ヲ發見セリ是實ニ原告ガ甲第一號證保險證書ノ約旨ニ違背セルモノニシテ當時者間ノ契約ハ之カ爲メ全ク無効ニ歸シタルモノトス何トナレハ前記保險證書第六條ニ「當會社ニ於テ保險シタル建物又ハ物品ヲ以テ重テ他ノ會社ニ保險契約ヲ結ハントスルトキハ豫メ當會社ニ通知シ當會社ニ於テ之ヲ承諾シ其旨ヲ保險證書ニ裏書セサレハ此保險證書ハ無効ノモノタルヘシ」トアリ然ルニ原告ハ會テ此手續ヲ盡ササルヲ以テナリ又原告ハ被告ヨリ保險金ノ内入トシテ金六百圓ヲ受取リタリト云フモ箇ハ社長阿部元太郎ノ一個人ニ對シ挨拶金トシテ交付シタルモノニ係リ保險金ノ一部ヲ原告ニ拂渡シタルモノニアラスト演述シ立證方

法トシテ乙第三乃至第四號證ヲ提出セリ

理由

第一甲第二號證保險證書ノ裏面ニ記載アル第六條ノ規定ハ超過保險ノ場合ヲ指ス者ナリヤ將タ重複保險ノ場合ニ係ルモノナリヤ是本件ニ於テ審究スヘキ第一ノ論點ナリトス仍テ茲ニ之ヲ案スルニ右保險證書ニハ「重テ他ノ會社ニ保險契約ヲ結ハントスル時ハ云々」トアルノミニテ「モ超過保險ノ場合タルコトヲ意味スヘキ文字ナキノミナラス抑被保險物ノ利益ヲ超過スル保險即所謂超過保險ハ法律上其效ナキモノニ付被告會社ガ故ラニ斯ル無効ノ約款ヲ設ケタルモノト解釋スルヲ得ス故ニ右第六條ノ約款ハ重複保險ノ場合ノミヲ指スモノナリト判定ス尙此點ニ對スル證人申請ノ理由ナキコトハ次項ノ説明ニ依リ了解スヘシ

第二保險證書第六條ノ規定ハ被告主張ノ如ク重複保險ノ場合ニノミ適用スヘキモノト解釋スルモ當事者ハ本件契約ニ此約款ヲ附セザリシヤ否是本訴ニ於テ審究スヘキ第二ノ論點ナリトス而シテ原告ハ此點ニ關シテ二個人再抗辯ヲ提出シ第一甲第一號證第六條ノ約款ハ當今各保險會社ノ保險證書ニ慣用セラルル所ナルモ箇ハ單ニ儀式的空文ニ屬シ實際上契約ノ條項ト爲ルヘキモノニ非ス本件當時者間ノ契約ニ於テモ斯カル約款ニ付合意シタルコトナシ第二第六條ノ如キ約款カ實際上其適用ヲ見ルコトアリトスルモ本件被告ハ契約締結ノ際既ニ保險物カ重複保險ニ附スルコトヲ熟知スルモノニ

ニ付キ更ニ通知書裏書ノ手續ヲ爲スノ必要ナシト陳辯シ第一ノ主張ヲ證セン爲メ明治火災保險會社京都支店長船本務外三名ノ證人訊問ヲ申出タルモ凡ソ契約ノ趣旨如何ヲ解釋スルニハ先ツ當事者ノ作成セル契約書ニ據ルヲ以テ本則トシ契約書ヲ作成セザリシ場合カ又ハ契約書中何等ノ規定ヲ存セス若クハ規定アルモ其意義不明瞭ナル場合ニ非レハ濫リニ慣習若クハ事例ヲ採テ當事者ノ意思ヲ推斷スヘキモノニ非ス然ルニ本件甲第一號證第六條ノ約款ハ其文言ヨリ之ヲ見ルモ保險契約證書全体ノ趣旨ヨリ之ヲ考フルモ其意義炳トシテ毫モ疑ヲ容ルルノ餘地ナキヲ以テ縱シヤ他會社ノ實例ニシテ原告主張ノ如シトスルモ是ヲ以テ本件契約ノ趣旨ヲ推斷スルニ足ラス且本件契約成立當時ノ法律タル明治廿三年法律第三十二號商法ハ其第六百四十三條ニ於テ「保險契約ハ保險者又ハ契約取結ノ權アル代人ノ保險申込書及之ニ屬スル陳述書ヲ異議ナク承諾シタルル之ヲ取結ヒタリト見做ス」ト規定シ其六百四十九條ニ於テ「保險契約ノ趣旨ニ係ル證據ハ保險證券又ハ附屬書類ヲ以テ之ヲ舉クルコトヲ得但し證券及附屬書類カ最早存在セス又ハ其發行ヲ爲サルトキハ此限ニアラス」ト規定シ契約ノ趣旨ニ關スル證據方法ヲ保險附屬書類ニ限定スルカ故ニ原告ニ於テ其主張ヲ貫カント欲セハ宜シク申込書若クハ陳述書等ノ記載ニ基キ舉證ヲ爲スヘキ筋合ナルニ原告ハ前顯證人訊問ヲ申請セル外何等ノ舉證ヲ爲ス能ハサルノミナラス第一號證(原告ノ差入タル保險申込書)中「拙者ニ於テ保險證書ニ記載シタル條ニ違背スルコト有之候ハ、拙者ニハ全ク損害金要求ノ權利ヲ失ヒ且貴

社ニ拂込ミタル保險掛金ハ損失ト相成候トモ異議無之候云々」ノ文詞ニ依レハ原告ハ明カニ第六條ノ約款ヲ承諾セルモノト認メサルヲ得ヌ又原告ハ前記第二ノ主張ヲ證明セン爲メ證人西村卯兵衛ノ供述ヲ援用スルモ保險契約ノ趣旨ニ關スル事項ハ證書ニ依リテノミ證明スルコトヲ得ヘキハ前説明ノ如クナルヲ以テ證人ノ供述ハ到底乙第一第二號證ニ依ル認定ヲ覆スニ足ラサルノミナラス證人西村卯兵衛ハ乙第三號證ノ如ク原告會社ノ重役ニシテ會社ト利害ヲ同フスルモノナレハ其供述ハ本來深ク信ヲ措ク價値ナク且其供述ニ依ルモ被告カ果シテ通知及裏書ノ責務ヲ免除シタリト認ムルニ足ルモノアルナシ

以上之ヲ要スルニ本件當事者カ甲第一號證ノ保險契約ヲ締結セル際特ニ第六條ノ約款ヲ除外シタリトノ證據ナキヲ以テ原告カ重複保險ノ通知ヲ爲サ、リシ結果本契約ハ全ク無効ニ歸シタルモノト認ムルノ外ナシ既ニ本訴請求ノ基本タル甲第一號ノ契約ニシテ其効ナキモノトセハ本訴請求ノ理由ナキ勿論ニ付數額ニ付テハ別ニ判斷ヲ與フル要ナキモノトス

明治三十三年九月廿六日

京都地方裁判所民事部

裁判長判事 小野 寛

判事 谷田 三郎

判事 村上 政藏

附 言

本件判決ノ要旨ハ至當ナリ事實ハ被保險者カ所謂重複保險ノ事實ヲ保險者ニ通知セサリシカ爲ニ保險契約ノ條項ニ從ヒ契約ハ無効ニ歸セルナリ而シテ被保險者ハ事實上此通知ノ義務ニ羈束セラレサルコトヲ立證スルニ勉メタレトモ皆薄弱ニシテ裁判官ヲ動スニ足ラサリシヲ以テ終ニ敗訴ニ歸シタルナリ而シテ所謂重複保險トハ如何ナル場合ヲ指シヤト言フニ我現行商法ニハ此語ヲ用ヒス舊商法第六百三十七條ニ於テ同一ノ物又ハ利益ニ關シ二人以上ノ保險者ヨリ保險ヲ受クル場合ヲ重複保險ト稱スルカ如ク見ユルカ故ニ裁判官ハ超過保險ノ場合ニアラスシテ重複保險ノ場合ナリト論斷シタルナリ然レトモ學理上重複保險ナル語ハ總保險金額カ保險價額ヲ超過シテ一ノ利益カ重複シテ保護セラル、場合ヲ指シ然ラサル場合ヲ共同保險ト稱スルモノタルヲ記慮セサルヘカラサルナリ(粟津清亮著保險法第一二三頁以下參觀)

(六) 鈴木辰次郎對日本酒造火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險申込書記載ノ事項ニ變更ヲ生シタルコトヲ保險契約者カ保險者ニ通知セサリシトキハ保險契約ハ其効力ヲ失フ

判決正本

神奈川縣橫濱市松影町三丁目百番地平民荒物商

原告 鈴木辰次郎

全縣全市住吉町三丁目六十五番地平民辯護士

右訴訟代理人 安齋林八郎

東京市京橋區銀座三丁目九番地支店地
大坂市東區今橋四十一番地本店地

被告 日本酒造火災保險株式會社

右東京支店支那人

橫田良介

東京市京橋區加賀町一番地辯護士

右訴訟代理人 岸清一

全所辯護士

右訴訟代理人 宮澤近市

右當事者間明治三十三年(ワ)第五五六號保險金請求訴訟事件ニ付當裁判所ハ審理判決スルヲ左ノ如シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告ハ訴狀記載ノ通り被告ハ原告ニ對シ金五百圓ニ之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本案執行濟マテ年六米ノ損害金ヲ併セ支拂フヘントノ判決ヲ受度旨ノ申立ヲ爲セリ而シテ事實上陳述ノ要領ハ被告ハ訴外仁木與七カ橫濱市雲井町三丁目九番地及同市足曳町十五番地ニ於テ所有スル二棟ノ家屋ニ付キ明治三十一年十一月十九日ヨリ向一ケ年ヲ限リ保險金額二千圓ヲ以テ訴外人トノ間ニ

火災保險契約ヲ締結シタル處同三十二年八月十六日原告ハ右訴外人ヨリ右保險家屋ノ讓渡ヲ受ケ之ト共ニ被告ノ承諾ヲ以テ右家屋ニ付從來訴外人ト被告間ニ成立セル保險契約ヲ承繼シ更ニ前契約滿限後一ケ年間延期繼續ヲ爲セリ次テ原告ハ被告ノ承諾ヲ以テ右被保險家屋ヲハ原告カ訴外高木壽治ニ對スル金一千五百圓ノ債務ヲ負擔スル爲メ書入抵當トナシ同時ニ二千五百圓ノ保險債權ヲハ高木壽治ニ讓渡セリ然ル處右被保險家屋ハ明治三十三年二月二十三日火災ノ爲メ燒失シタルニヨリ原告ハ正サニ受クヘキ五百圓ノ支拂ヲ被告ニ求メタルモ之ニ應セサルヨリ本件ヲ提起スルニ至レリト云フニアリ而シテ原告ハ重複保險契約ヲ締結セルニ拘ハラヌ被告ノ承諾ヲ求メサリシニヨリ原告被告間ニ成立セル火災保險契約事項ニ違背シタルモノナルヲ以テ被告ニ於テ其責無シトシ抗辯ニ對シ原告ハ其他保險會社ト契約ヲ爲シタルハ被告ノ承諾ヲ經シモノニアラサレトモ被保險利益ノ範圍内ニ於テ爲シタルニヨリ約款ノ所謂重複保險契約ニ非スト主張セリ
被告ハ答辯書并ニ答辯書補正書ニ本ツキ原告ノ請求ハ之ニ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ受ケ度旨ノ申立ヲ爲シ其答辯ノ要旨ハ原告主張ノ如キ事實ハ凡テ之ヲ認ムト雖モ第一原告カ同一家屋ニ付キ明治三十二年十月八日家屋物品火災保險會社ト重複保險契約ヲ締結シ乍ラ被告ニ之ヲ届出テ其承諾ヲ求メサリシハ原告ト被告間ノ約款ニ反スルモノナリ第二若シ之ヲ重複保險契約ナリト云フヲ得ストスルモ原告カ他保險會社ト更ニ保險契約ヲ締結シ從テ保險契約申込證書記載事項ニ

變更ヲ來シタルニ係ハラス直ニ被告ニ届出テ承諾ヲ求メサリシハ明ニ被告ノ約款ニ反スルモノニシテ約款第二條ニ依リ何レモ本契約ノ無効ヲ來スモノナルニヨリ原告ノ請求ニ應スヘキ限ニ非スト云フニアリ乙第一號第三號證ヲ提出セリ

理由

本件事實ニ付テハ原告モ争ナキヲ以テ其争點ハ原告間ニ一定ノ事項ヲ定メ之ニ違由セサリシトキハ契約ノ無効ヲ來スヤ否ヤト云フニ歸スヘシ要スルニ法律ノ禁止セサル範圍内ニ在テ法律行為ノ効力ヲ當事者ノ意思表示ニ委スルハ民法ノ通則トス然レハ本件モ亦之ニ從テ決スヘキヲ相當トス案スルニ本件原告間ニ定メタル約趣ノ如キ法令ノ禁止スル處ニアラス故ヲ以テ原告カ被告ト契約ヲ爲シ乍ラ同一保險物ニ付キ他會社ト契約ヲ爲シタルハ原告主張ノ如ク保險契約利益ヲ超過スルモノニアラサルヲ以テ固ヨリ重複保險ト稱スヘカラス然レトモ此場合ニアリテハ乙第一號證ノ示ス如ク保險申込書記載事項カ他會社契約ノ有無ト題スル目次ノ下ニアル「ナシ」トアル記載事項ニ變更ヲ來スモノニシテ且第二號ニ示ス如ク被告ノ承諾ヲ經タルモノニ非ストシ契約ノ無効ヲ來スヘキハ當然ノ事ト云ハサルヲ得ス此點ニ於テ被告抗辯ノ趣旨ヲ理由アルモノト認メ訴訟費用ノ點ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第二項ニ依リ主文ノ如ク判決セリ

明治三十三年十一月十七日

東京地方裁判所第四民事部

裁判長判事 今村 恭太郎

判事 永島 親次

判事 鈴木 英太郎

附言

本判決ハ保險契約ニ關シ三個ノ要點ヲ説明セリ即チ第一保險契約ハ隨意契約ニシテ法律ノ禁セサル限度ニ於テ當事者ノ意思ニ委スヘキ者タルヲ第二被保險利益ノ範圍内ニ於テ數多ノ保險契約ヲ結フヲハ所謂重複保險ト言フヘカラスアルヲ並ニ第三保險契約者カ契約ノ條項ニ反シ申込書記載ノ事項ニ變更ヲ來シタルヲ即チ他ノ保險者ト契約シタルヲ保險者ニ告ケテ其承諾ヲ求メサリシカ契約無効ノ原因タルヲ説明セルモノニシテ皆至當ナル見解ナルカ故ニ原告ノ請求立タサリシハ當然ナリ

(七) 鈴木辰次郎日本酒造火災保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決ニ同シ

判決正本

神奈川縣横濱市松影町三丁目百番地売物商
控訴人 鈴木辰次郎
右訴訟代理人辯護士 安齋 林八郎

東京市京橋區銀座三丁目九番地支店地
大阪東區今橋四十一番地本店地
被控訴人 日本酒造火災保險株式會社
右東京支店支配人

右法定代理人 横田 良介

右訴訟代理人辯護士 岸 清 一

右當事者間ノ明治三十三年(元)九七三號保險金支拂請求控訴事件ニ付キ判決スルコト左ノ如シ

主 文

本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訟訴費用ハ控訴人ノ負擔トス

事 實

控訴人ハ第一審判決ノ全部ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ對シ金五百圓并ニ之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本案執行終結ニ至ルマテ年六朱ノ割合ニ於ケル損害金ヲ支拂フヘシトノ判決ヲ求ムト申立テ被控訴人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムル旨申立テタリ
當事者双方ノ事實上ノ供述ハ第一審判決ノ摘示スル處ト全一ナルヲ以テ之レヲ引用ス
控訴人ハ證人北村熊三郎ノ供述ヲ引用シ被控訴人ハ乙第一號證乃至第十六號證ヲ提出シ證人新井傳ノ證言及ヒ第一審ノ明治三十三年十月十六日ノ口頭辯論調書ヲ引用シタリ

理 由

一、本件控訴ハ適法ナリ

二控訴人ハ證人北村熊三郎ノ證言ヲ引用シ本件ノ家屋ニ付テハ重複保險ヲ附シタルコトナシト主張スルモ被控訴人カ本訴家屋ノ全部ニ對シ保險ヲ約シタルモノナルコトハ控訴人ノ爭ハサル處ニシテ又此家屋ノ全部及他ノ六棟ノ家屋ヲ併セ家屋物品火災保險會社ニ於テ更ラニ保險ヲ約シタルコトハ信用スヘキ證人新井傳(全證人ハ家屋物品火災保險會社ニ於テ保險契約ヲ爲ス際直接ニ干與シタル者ナリ)ノ證ニ依リ認メ得ヘシ左レハ其重複保險タルコトハ明瞭ナリトス本件當事者間ニ於テ爭ヒナキ乙第二號證ニ因レハ控訴人ニ於テ他ノ保險會社ト重複保險契約ヲナサントスル場合ニハ被控訴會社ノ承諾ヲ受ケサル可カラス若シ其承諾ヲ得シテ重複保險ヲ約シタル時ハ本件當事者間ノ保險契約ハ無効ナル旨ヲ明約シ居レリ然ルニ控訴人ニ於テ被控訴人ノ承諾ヲ經スシテ前段說示ノ如ク重複保險ヲ約シタルヲ以テ當事者間ノ保險契約ハ已ニ無効ニ歸シタルモノト云ハサルヲ得ス其後ニ至リ火災ニ罹リタリトテ控訴人ハ保險金ヲ請求スルノ權利ヲ有スルモノニアラス控訴人ノ援用スル北村熊三郎ノ證言ハ當院ニ於テ之ヲ信セス

三前項二個ノ保險ハ重複保險ニアラストスルモ乙第二號證ニハ保險申込證書ニ記載シタル事項ノ變更シタルトキハ直ニ被控訴會社ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ保險契約ハ無効タル可キコトヲ明約シ居レリ而シテ乙第一號證ナル火災保險申込證書中他會社ト契約ノ有無ノ欄下ニ「ナシ」ト記載アリ故ニ本件ノ如ク其後ニ至リ控訴人カ他保險會社ト保險契約ヲ爲シタルハ明カニ火災保險申込證書ニ記載

シタル事項ニ變更ヲ生シタルモノニシテ直チニ被控訴會社ノ承諾ヲ經サル以上ハ當事者間ノ保險契約ハ無効ニ歸シタルモノト云ハサルヘカラス已ニ無効ニ歸シタル後ニ至リ火災ニ罹リタリトテ控訴人ハ保險金ヲ請求スルノ權利ヲ有セサルナリ控訴人ハ乙第二號證中ニ火災保險申込證書中記入スル事項ニ變更ヲ生シタル場合ニ被控訴會社ノ承諾ヲ要スルハ火災危險ニ關スル場合ニ限ルノミニシテ他ノ會社ト保險契約ヲ爲スモ其憂ナキヲ以テ更ラニ被控訴會社ノ承諾ヲ要スルモノニアラスト云フモ乙第二號證中控訴人主張ノ如キ區別ヲ爲シアラサルヲ以テ之レヲ是認セス

四訴訟費用ハ民事訴訟法第七十七條ニ因ル

明治三十五年一月廿一日

東京控訴院民事第二部

裁判長判事 小山 温

判事 三木 登明

判事 折原吉之助

判事 藤波 元雄

判事 中村 太郎

(八) 河野イタ對日本酒造火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險契約ノ更新ハ契約自體ノ繼續ニ止マリ前契約ニ付テ第三者ノ有セル權利マテモ繼續セシ

ムルモノニアラス

判決正本

東京市日本橋區橋物町三番地

原告

河野 イタ

右訴訟代理人辯護士

安齋 林 八郎

東京市京橋區銀座三丁目九番地

被告

日本酒造火災保險株式會社

右法定代理人

渡 邊 徹

右訴訟代理人辯護士

岸 清 一

全

宮 澤 近 市

右當事者間ノ明治三十三年(第五六〇)號保險金請求事件ニ付判決スルコト如左

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人ハ被告ハ原告ニ對シ金貳千三百圓ト之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本件執行濟迄六朱ノ割合ニ於ケル損害金ヲ支拂フヘントノ判決アリタキ旨申立テ其事實上供述ノ要領ハ訴外人仁木與七ハ明治三十一年十一月十九日其所有ノ木造板葺二階建住家一棟外二棟ノ家屋ヲ被告會社ニ金一千五百圓ノ火災保險ニ附シ越テ三十二年八月中被保險物タル家屋ヲ訴外人鈴木辰次郎ニ

讓渡シ次テ同月十八日被告ノ承諾ヲ得テ保險債權ヲモ辰次郎ニ讓渡シタリ辰次郎ハ依テ同月二十七日各保險家屋ニ對シ八百圓ノ保險金額ヲ増加シタリ然ルニ該被保險家屋ハ原告ノ辰次郎ニ對スル債權ノ擔保ト爲リ居ルヲ以テ明治三十二年十二月二十日辰次郎及被告ノ同意ヲ經テ被保險家屋ノ火災ニ罹リタル節被告ヨリ辰次郎ニ支拂フヘキ保險金ヲ原告カ直ニ受取ヲ爲スノ權利ヲ得タリ而シテ右被保險家屋ハ明治三十三年二月二十三日火災ニ罹リタルヲ以テ屢々保險金支拂ノ請求ニ及フモ被告ハ之ニ應セサルヲ以テ本訴ニ及ヒタリト云フニ在リテ被告會社規則第十七條ニ期間滿了後三十日內ニ次期ノ保險料ヲ支拂ヘハ更ニ契約締結ノ手續ヲ要セスシテ前契約ヲ繼續ズルコトアルヘシトアルヲ引用シ本訴保險契約ハ明治三十二年八月二十七日以降更新ナク繼續シ契約締結ノ際保險規則第一條ニヨリ無効ト爲ルカ如キ事實ヲ隱蔽シタルコトナシト主張シ甲第一號證三ヲ提出シ乙第一號證ノ一ヲ否認シタリ

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔タルヘシトノ判決アリタキ旨申立テ其事實上供述ノ要旨ハ訴外人仁木與七ト被告間ニ火災保險契約ヲ締結シタル後訴外人鈴木辰次郎ニ於テ該契約ヲ繼承シ且ツ其後保險金額ヲ増額シタルコトハ原告陳述ノ如シト雖モ該契約ハ明治三十二年十一月十八日ヲ以テ消滅ニ歸シ同日更ニ辰次郎ハ被告ニ對シ金二千三百圓保險期間一ケ年ノ火災保險ノ申込ヲ爲シ被告ハ之ヲ承諾シタリ而シテ原告ハ同年十二月二十八日右保險契約上ノ權利ヲ

被告ノ承諾ヲ得テ辰次郎ヨリ讓受ケタルモノナリ然ルニ辰次郎ハ被告ニ保險申込ノ際他會社ト保險契約ヲ締結シタルコトナキ旨ヲ記載シナカラ其實明治三十二年一月八日本件ノ目的家屋ニ關シ家屋物品火災保險會社ト一ケ年ノ保險契約ヲ締結シ居リタルモノナレハ本件契約ハ保險契約ノ原則ハ勿論被告ノ火災保險契約書第一條第一號ニ違背スル無効ノ契約ナリトス從テ該契約上ノ權利ヲ基礎トスル本訴原告ノ請求ハ全然其理由ナシト云フニアリテ乙第一號證一、二第二號第三號證一乃至六ヲ提出シ北村熊三郎ノ證人訊問ヲ申立テタリ

理 由

本訴ノ爭點ハ第一訴外人鈴木辰次郎ト被告會社トノ間ニ締結セル火災保險契約ハ明治三十二年十一月十八日ニ於テ更新シタリヤ否第二若シ更新シタリトスレハ其際訴外人辰次郎ハ同一被保險目的物ニ付他會社ト保險契約締結ノ事實ヲ隱蔽シタルヤ否第三若シ隱蔽シタリトスレハ其不法行爲ハ被告火災保險契約書第一條第一號ニヨリ無効ヲ來スヤ否ヤニアリトス仍テ案スルニ被告ノ提出ニ係ル乙第一號證ノ一火災保險申込證書ハ原告ノ否認スル所ナリト雖モ之レ訴外人鈴木辰次郎ノ作成ニ係リ而モ真正ナリト認メ得ヘキヲ以テ之ヲ採用シ右保險契約ハ明治三十二年十一月十八日新ニ成立シ從テ前債權ハ消滅シタルモノト認定ス已ニ前債權ニシテ消滅シタリトスレハ該債權カ繼續シタリトシテ之ニ基テ原告ノ請求ハ其理由ナキモノトナレハ他ノ爭點ヲ論決スルノ要ナクシテ之ヲ棄却シ訴訟

費用ニ付テハ民事訴訟法第七十二條第一項ニヨリ主文ノ如ク判決ス

明治三十四年二月八日

東京地方裁判所民事第四部

裁判長判事 今村恭太郎 判事 鈴木英太郎 判事 佐々木道彦

附言

本件ハ(三)高木壽治對日本酒造火災事件ト全然同一ノ場合ナリトス

(九) 河野イク對日本酒造火災保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

法律上ノ代理人トシテ表示セラレタル者カ實際訴訟行為ヲ爲サルニ之ニ對シテ判決ヲ下シタルハ訴訟手續ヲ誤リタル不當ノ判決ナリ

判決正本

東京市日本橋區横物町三番地

控訴人 河野イク

右訴訟代理人辯護士

安齋林八郎

東京市京橋區銀座三丁目九番地支店地
大阪市東區今橋四十一番地本店地

被控訴人 日本酒造火災保險株式會社

東京支店支配人

右法律上代理人 横田良介

宮田 四八

右訴訟代理人辯護士

岸 清 一

主文

右當事者間ノ明治三十三年(ネ)第二三〇號保險金請求控訴事件ニ付キ判決スルコト左ノ如シ

第一審判決及ヒ其判決ヲ爲シタル手續ヲ廢棄ス

本件ヲ東京地方裁判所ニ差戻ス

事實及理由

控訴代理人ハ原判決ヲ廢棄シ被控訴人ハ控訴人ニ對シ金貳千三百圓并ニ之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本件執行濟迄ノ年六分ノ割合ノ損害金ヲ支拂フ可シ訴訟費用ハ一二審共被控訴人ノ負擔トストノ判決相成度旨一定ノ申立ヲ爲シ被控訴人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムル旨一定ノ申立ヲナシ且ツ被控訴代理人ハ第一審判決ニ掲ケタル被告ノ法律上代理人渡邊徹ハ被告會社ノ取締役ナレトモ訴訟行為ヲ爲シタル者ハ全人ニアラスシテ支配人横田良介ナリト陳述シ控訴代理人ハ之ヲ争ハスト陳述シタリ

因リテ案スルニ第一審判決ニハ渡邊徹ナル者ヲ被告會社ノ法律上代理人ト表示シ之レニ對シテ判決ヲナシテトモ右渡邊徹ナル者カ本件ノ訴訟行為ヲ爲シタル事無キハ當事者双方ノ認ムル處ナルノ

ミナラス第一審ノ被告訴訟代理委任狀及ヒ辯論調書ニ因レハ被告會社カ東京支店支配人横田良介ナ
ル者ヨリ辯護士岸清一外二名ニ訴訟行為ノ代理ヲ委任シアリ從テ一切ノ訴訟行為ハ總テ全辯護士ニ
ヨリテ代理セラレ居リ第一審裁判所ノ以テ法定代理人ト爲シタル渡邊徹ナル者ハ毫モ本件ノ訴訟行
爲ニ關係シタル事蹟ナシ然ルニ之レヲ被告會社ノ法律上代理人ト表示シ之レニ對シテ判決ヲナシタ
ルハ訴訟手續ヲ誤リタル不當ノ判決ト云ハサルヲ得ヌ因テ民事訴訟法第四百二十三條ニ從ヒ主文ノ
如ク判決ス

明治三十五年一月二十八日

東京控訴院民事第二部

裁判長判事 小山 温 判事 齋藤十一郎 判事 高橋 覺
判事 折原吉之助 東京控訴院判事代理判事 中村 太郎

(十) 河野イク對日本酒造火災保險株式會社事件(再始審)

判決要旨

原告口頭辯論ノ期日ニ出席セザルトキハ裁判所ハ缺席判決ヲ以テ其訴ヲ却下ス

欠席判決

東京市日本橋區船場町三番地平民貸金業

原告 河野 イク

全市京橋區銀座三丁目九番地支店地
大坂市東區今橋四十一番地本店地

被告 日本酒造火災保險株式會社

右會社取締役

右法定代理人 渡邊 徹

右訴訟代理人辯護士 岸 清 一

右當事者間ノ明治三十五年(ワ)第八五號保險金請求事件ニ付當裁判所ハ左ノ如ク欠席判決ヲ爲ス

主 文

原告ノ訴ヲ却下ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實及理由

明治三十五年三月三十一日午前九時口頭辯論期日ニ原告ハ出頭セス被告訴訟代理人岸清一ハ出頭
シテ原告ノ訴ヲ却下ストノ欠席判決ヲ求ムト申立タリ仍テ當裁判所ハ民事訴訟法第二百四十六條第
二百四十七條及第七十二條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決セリ

明治三十五年四月十日

東京地方裁判所第四民事部

裁判長判事 岩田 一郎 判事 林 賴三郎 判事 西川 一男

(十一) 角石シマ對日本酒造火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ保險契約ノ條款ニ依リテ重複保險ノ事實ヲ保險者ニ告ケサリシヲ以テ契約ハ無效
タリ

判決正本

神奈川縣足柄下郡小田原町幸町三丁目二十番地

平民貸金業

原告 角石シマ

東京市京橋區銀座三丁目九番地支店地

大坂市東區今橋四十一番地本店地

被告 日本酒造火災保險株式會社

全縣橫濱市松影町三丁目百番地地物商

右會社取締役

從參加人 鈴木辰次郎

右法定代理人 渡邊徹

右當事者間ノ明治三十三年(第五五七號)保險金支拂請求事件ニ付キ當裁判所ハ判決スルコト左ノ如
シ

主 文

原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告一定ノ申立ハ被告ハ原告ニ對シ金千二百圓ニ明治三十三年二月二十四日ヨリ本件執行濟ニ至ル

マテ年六分ノ利息ヲ加ヘ辨濟スヘシトノ判決相成度ト云フニ在リテ被告ハ原告ノ請求ヲ棄却ス訴訟
費用ハ原告ノ負擔トストノ判決受度ト申立テタリ

原告ノ事實上陳述ノ要旨ハ訴外者仁木周藏ハ明治三十二年五月十九日橫濱市雲井町二丁目六番地ト
同市足曳町二丁目十五番地ニ跨リタリシ木造板葺二階建一棟此建坪三十四坪五合及ヒ木造板葺平家
建一棟此建坪二十六坪二合五勺ニ對シ被告ト保險金千二百圓ノ火災保險契約ヲ締結シ其保險價格ハ
千七百圓ナリシ同人ハ同年七月中右家屋二棟ヲ從參加人鈴木辰次郎ニ讓渡シタルノ結果同月十四日
被告ノ承諾ヲ經テ右保險契約モ亦從參加人ニ讓渡シタリシモ從參加人ハ右二棟ノ家屋ニ對シ原告ノ
爲ニ抵當權ヲ設定シタルニ因リ同年九月四日被告并ニ從參加人ノ承諾ヲ得テ該家屋火災ニ罹リタル
時ハ原告ニ於テ右保險金ノ支拂ヲ被告ヨリ受クヘキ權利ヲ取得シタリ然ルニ右家屋二棟共ニ明治三
十二年二月二十三日火災ニ罹リタルヲ以テ被告ニ對シ該保險金ノ支拂ヲ請求スルモ被告ハ其義務ヲ
履行セスト云フニ在リ而シテ被告ノ抗辯ニ對シテハ本件二棟ノ家屋ト同一ノ場所ニ存在スル他ノ六
棟ノ家屋合計八棟ノ内本件二棟以外ノ一棟ハ先ニ從參加人ト東京物品火災保險株式會社間ニ保險金
千二百圓ノ保險契約アリテ其他ノ七棟ニ對シテハ同人ト被告トノ間ニ保險金五千五百圓ノ保險契約
在リタリ而シテ其後右八棟ノ家屋ニ對シ更ニ家屋物品火災保險株式會社ト保險金三千圓ノ保險契約
ヲ締結シ且其再度ノ保險ニ付キテハ被告ニ届出テ又隨テ其承諾ヲ得タルヲナキモ同會社ハ右八棟ニ

對シ保險價格ヲ一萬千四百五十圓ト見積リタルヲ以テ前兩保險會社ト約定シタル保險金合計六千七百圓ヲ控除シ殘額四千七百五十圓ニ對シテ保險ヲ受ケタルモノナレハ重複保險ニアラス又保險申込證書ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタル時ニハ被告ニ届出且其承諾ヲ求ムヘキ契約存在スルコトナシ假ニ其契約アリトスルモ爲ニ本件保險契約全体ヲ無効ニ歸セシムルモノニアラスト陳述シ乙第三號證ノ四及ヒ乙第五號證ノ成立ヲ認メ乙第一號證ハ之ヲ否認シ其他ハ不知ノ陳述ヲ爲シタリ

被告答辯ノ要旨ハ訴外者仁木周藏ト被告トノ間ニ本件家屋二棟此保險價格千七百圓ニ對シ明治三十二年五月十九日保險金千二百圓期間一ケ年ノ定メニテ火災保險契約ヲ締結シタルコト同年七月中右家屋ヲ從參加人カ讓受ケタル結果被告ノ承諾ヲ經テ右保險契約ヲ繼承シタルコト并ニ同年九月右建物ニ對シ同人カ原告ノ爲ニ抵當權ヲ設定シタルニ因リ右保險契約ノ有効期間中保險ノ目的物カ火災ニ罹リ被保險者ニ於テ保險金ヲ受取リ得ヘキ場合ニ於テ原告カ該保險金ヲ受取ルヘキコトニ付キ被告ノ承諾ヲ得タルコトハ原告主張ノ如シ然レモ第一右火災保險契約書第二條第七號ニ依レハ被保險人カ他ノ保險會社ニ重複保險ヲ申込マントスルトキハ直チニ被告ニ其旨ヲ届出テ且被告ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ該保險契約ハ無効ニ歸スヘキモノナリ然ルニ從參加人ハ其後明治三十二年十月八日本件家屋并ニ之ト同一ノ場所ニ在ル他ノ六棟ノ家屋合計八棟ニ對シ家屋物品火災保險株式會社ト保險價格一萬千四百五十圓トシ全体ニ付キ保險金ヲ三千圓ト定メ重複ニ保險契約ヲ締結シタルニ拘

ハラス被告ニ其届出ヲ爲サス隨テ被告ノ承諾ヲ經タルコト無キヲ以テ本件保險契約ハ全然無効ニ歸シタルモノナリ第二假令從參加人カ右會社ト締結シタル第二保險カ重複保險ニアラストスルモ前記火災保險契約書第二條第八號ニ依レハ保險申込證書ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ被告ニ届出且被告ノ承諾ヲ得サルヘカラス然ルニ前記仁木周藏カ明治三十二年五月十九日被告ト保險契約締結ノ際他ノ保險會社ト保險契約ナキ旨ヲ本件保險申込證書ニ記載シタルニ拘ハラス其承諾人タル從參加人カ前記ノ如ク他ノ會社ト保險契約ヲ締結シナカラ之ヲ被告ニ届出テス隨テ被告ノ承諾ヲ得サルモノナルヲ以テ本件保險契約ハ當然無効ニ歸シタルモノナリ因テ原告ノ請求ニ應スル能ハスト云フニ在リテ尙本件家屋所在地ニ從參加人ノ有スル家屋ハ本件二棟ノ家屋ト共ニ總計八棟ニシテ内七棟ハ被告ト同人トノ間ニ保險價格七千二百五十圓保險金五千五百圓ノ保險契約アリ本件二棟以外ノ残り一棟ニ付キテハ先ニ東京物品火災保險株式會社ト同人トノ間ニ保險價格千五百圓保險金三千圓ノ保險契約アリト陳述シ乙第一號證乃至五號證ヲ提出シ且證人トシテ北村熊三郎大平是正及ヒ新井傳ノ訊問ヲ申請シタリ

理 由

按スルニ本件從參加人カ本訴二棟ノ家屋ニ對シ保險價格千七百圓ノ定メニテ保險金千二百圓ノ保險契約ヲ被告ト締結シ其被告ニ届出テス且其承諾ヲ得スシテ更ニ之ヲ家屋物品火災保險會社ノ保

險ニ附シタルノ事實ハ當事者間ニ争ヒナキヲ以テ本訴ノ争點ハ第一右事實ハ所謂重複保險ト稱スヘキモノナリヤ第二重複保險ニアラストルモ本件保險申込證書ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルモノナリヤ第三右第一若クハ第二條項ノ一ニ相當ストセハ本件保險契約ハ當然無効ナリヤ否ニ在リ

第一本件契約成立時期ハ舊商法ノ施行セラレタル時ナルヲ以テ其解釋モ亦舊商法ニ依リ判斷スヘキモノトス一人カ同一ノ物及ヒ同一ノ利益ニ關シ時ヲ同シクシ又ハ時ヲ異ニシテ二人以上ノ保險者ヨリ各別ニ保險ヲ受ケ而シテ其各保險金ノ總額カ一ノ保險者ト定メタル保險價格ニ超過シタル部分ニ限リ之ヲ重複保險ト稱ス是レ舊商法第六百三十七條同第六百三十八條ニ照ラシ亦明瞭ナリ故ニ本争點ニ付テハ本件二棟ノ家屋ニ對シ被告カ約シタル保險金ト同シク家屋物品火災保險株式會社カ約シタル保險金トノ總額カ同シク被告カ附シタル前記保險價格ニ超過シタルヤ否ヤヲ判斷スレハ則チ足ル

家屋物品火災保險會社カ本件二棟及ヒ其他六棟合計八棟ノ家屋ニ付キ保險價格ヲ一萬千四百五十圓ト定メ其全部ニ對シテ三千圓ノ保險金ヲ附シタルノ事實ハ證人北村熊三郎及新井傳ノ證言ニ依リテ其成立ヲ認メタル乙ニ對シテ證人ニ時價合計一萬千四百五十圓保險金三千圓トノミアリテ他ニ特別ノ規約ナキト全新井傳カ八棟ノ時價一萬千四百五十圓ヨリ被告及ヒ東京物品火災保險會社トカ契約セラル總保險金ヲ差引キ其殘格ニ對シ三千圓ノ保險ヲ附シタルニ非ストノ證書ニ依リ之ヲ認定ス此點ニ

關スル原告ノ再抗辯ハ理由ナキモノトス然ラハ右場合ニ於テハ當事者ニ別段ノ意思表示ナキ以上ハ右三千圓ノ保險金ハ該八棟ノ各保險價格ノ割合ニ應シテ之ヲ附シタルモノト看做スヘキハ理論上并ニ當事者ノ意思解釋上正當ナルノミナラス舊商法第六百三十九條ヨリ之ヲ推論スルモ亦然ラサルハカラヌ

證人新井傳ノ證言ニ依レハ家屋物品火災保險會社カ保險ヲ諾シタル前記八棟ノ家屋中木造板葺二階建一棟此建坪三十四坪五合ノ分ハ時價千八百圓同平家一棟此建坪二十六坪二合五勺ノ分ハ時價七百八十圓ニ定メタリト然ルニ右二棟ノ建坪カ本訴二棟ノ建坪ニ相當スルノミナラス同ク同人カ證言セラル他ノ六棟ノ家屋中本訴二棟ノ家屋ニ類似セル物ナキトヨリ之ヲ見レハ前記二棟ノ家屋ハ則チ知ル本訴ノ家屋ニシテ之ニ對シ同會社カ定メタル保險價格ハ合計二千五百八十圓ナルコトヲ認ム故ニ同會社カ本訴二棟ノ家屋ニ對シテ附シタル保險金ハ前記全保險價格一萬千四百五十圓ニ對スル全保險金三千圓ノ割合ヲ以テ定ムヘキモノナルニ因リ六百七十五圓九千錢強ナリト認ム而シテ之ヲ被告カ該家屋ニ對シテ附シタル前記保險金千二百圓ト加算スルトキハ千八百七十五圓九十錢強ニシテ此保險金總額ヲ同ク該家屋ニ對スル前記保險價格千七百圓ト比照シ其保險金超過額百七十五圓九十錢強ハ則チ所謂重複保險ナリト認定ス

第三成立ニ争ナキ乙第五號證ニ依レハ

左ノ場合ニ於テハ直ニ當會社ニ届出テ當會社ニ於テ保險證書ニ裏書スルカ又ハ他ノ方法ヲ以テ承諾
スルニアラサレハ此保險契約ハ無効タルヘシ

一他ノ保險會社ニ重複保險ヲ申込マントスルトキ

トアリ而シテ茲ニ無効タルヘシトアルハ當然效力ヲ失フト解釋スルヲ至當トス然ルニ本件從來參加
人カ前掲ノ如ク他ノ會社ニ重複保險ヲ爲シタルニ拘ハラズ被告ニ届出テス隨テ其承諾ヲ得サリシコ
トハ争ヒナキヲ以テ本件保險契約ハ從參加人カ家屋物品火災保險會社ト重複保險ヲ締結シタル時ニ
於テ既ニ其效力ヲ失ヒタルモノトス然ルニ該家屋ノ火災ニ罹リタルハ本件保險契約ノ效力ヲ失ヒタ
ル後ナルコト勿論ナレハ該契約ニ基ク原告ノ本訴請求ハ不當ナリトス

以上第一及ヒ第三争點ニ付キテ既ニ本訴ノ裁判ヲ爲スニ充分ナルヲ以テ第二ノ争點ニ付キテハ別ニ
判斷ヲ爲サス而シテ訴訟費用ニ付キテハ民事訴訟法第七十二條第一項ヲ適用シ主文ノ如ク判決セリ

明治三十四年三月四日

東京地方裁判所第一民事部

裁判長判事 岩田一郎 判事 島田鐵吉 判事 横田五郎

附言

本件判決ニ於テハ裁判官カ重複保險ナル用語ヲ解スルコト(五)近江鐵通株式會社事件ニ於ケルカ如ク

ナラス舊商法ニ於ケル規定ヲ解釋シテ總保險金額カ保險價額ヲ超過スル場合ニ限ルトセリ而シテ原
被兩造モ此點ニ於テ異議ナキカ故ニ争點ハ要スルニ當該建物二棟カ後ノ會社ニ保險ニ附セラル、ニ
方リテ兩會社ノ保險金額カ其價額ニ超過セリヤ否ヤノ事實如何ニアリ而シテ裁判官ハ之ヲ超過保險
即チ重複保險ト認メタルカ故ニ當事者間ノ契約條項ニ照シテ無効ヲ宣言シ以テ被告ノ利益ニ判決シ
タルハ至當ニシテ他ノ争點ニ就テ説明スル所ナキモ亦當然ナリトス

(十二) 角石クマ對日本酒造火災保險株式會社事件(控訴)

判決正本

神奈川縣足柄下郡小田原町幸町三丁目
二十番地平民無業

控訴人 角石クマ

東京市京橋區銀座三丁目九番地支店地
大阪市東區今橋四丁目四十一番地本店地

被控訴人 日本酒造火災保險株式會社

東京市銀座三丁目九番地
右會社東京支店支配人

横田良介

右當事者間ノ保險金支拂請求事件ノ控訴ニ付キ當院ハ判決スルコト左ノ如シ

主文

明治三十四年三月四日東京地方裁判所カ本件ニ付言渡シタル判決ヲ左ノ如ク變更ス

被控訴人ハ控訴人ニ對シ金千二百圓并ニ之ニ對スル明治三十三年二月二十四日ヨリ本件執行濟ニ

至ルマテ年六米ノ割合ニ於テ損害金ヲ支拂フヘシ訴訟費用ハ第一、二審共被控訴人ノ負擔トス

事實及ヒ理由

控訴人ハ主文記載ノ如ク判決ヲ求ムト申立テ事實上供述ノ要旨ハ訴外仁木周藏ハ明治三十二年五月十九日横濱市雲井町二丁目九番地ト同市尾曳町二丁目十五番地ニ跨リタル本訴二棟ノ家屋ニ對シ被控訴人ト保險價格千七百圓ニテ保險金千二百圓ノ火災保險契約ヲ締結シ同年六月中鈴木辰次郎ナル者ニ右家屋二棟ヲ讓渡シタル結果同月十四日被控訴人ノ承諾上該保險契約モ亦同人ニ讓渡シタリ尋テ鈴木辰次郎カ右二棟ノ家屋ニ對シ控訴人ニ抵當權ヲ設定シタルニ因リ同年九月四月被控訴人并ニ同人ノ承諾ヲ經テ控訴人ハ該家屋火災ニ罹リタル時ハ右保險金ノ支拂ヲ被控訴人ヨリ受クヘキ權利ヲ取得シタリ然ルニ右家屋二棟共明治三十三年二月二十三日火災ニ罹リタルヲ以テ被控訴人ニ對シ本件ノ請求ヲ爲スト云フニ在リ乙第一號證ヲ援用シ石川順ノ鑑定ヲ申請セリ

被控訴人ハ前段控訴人ノ主張事實ハ之ヲ認ムルモ第一本件火災保險契約書ニ依レハ被保險人カ他ノ保險會社ニ重複保險ヲ申込マントスルトキハ被控訴人ニ届出テ其承諾ヲ得ルニアラサレハ該保險契約ハ無効ニ歸スヘキモノナリ然ルニ鈴木辰次郎ハ其後同年十月八日本件家屋ト外六棟合計八棟ノ家屋ニ對シ家屋物品火災保險株式會社ト保險價格ヲ一万四千四百五十圓トシ全体ニ付キ保險金三千圓ノ重複保險ヲ爲シタルニモ不拘被控訴人ニ届出テ其承諾ヲ經タルコトナキヲ以テ本件保險契約ハ無効

ニ歸シタルモノナリ第二假リニ右第二回ノ契約ヲ以テ重複保險ニアラストスルモ契約書第二條第八號ニ依レハ保險申込證書ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルトキハ其旨被控訴人ニ届出テ被控訴人ノ承諾ヲ經サルヘカラス然ルニ仁木周藏カ他ノ保險會社ト保險契約ナキ旨ヲ保險申込書ニ記載シタルニ拘ハラヌ其後鈴木辰次郎カ他會社ト保險契約ヲナシ乍ラ之ヲ被控訴人ニ申出テ承諾ヲ經タルコトナキヲ以テ本件保險契約ハ無効ナリト云ヒ乙第一號乃至第五號證ヲ提出シ原審證人大平是正新井傳ノ證言ヲ援用セリ依テ第一鈴木辰次郎カ明治三十二年十月八日本件家屋外六棟合計八棟ニ對シ家屋物品火災保險株式會社ト締結シタル第二回保險契約ハ果シテ重複保險ナリヤ否ヤニ付之ヲ審案スルニ信ヲ措クニ足ルヘキ鑑定人石川順ノ鑑定書ニ依レハ前記八棟ノ家屋ニ付明治三十二年十一月頃ノ時價ハ全年五月十八日頃ノ時價ニ比シ三割四分ノ昂騰トアルヲ以テ第二回保險契約當時ニ於テ本件家屋二棟ノ保險價格ハ第一回保險契約當時ノ時價ト認ムヘキ保險價格千七百圓ニ三割四分ヲ加算シタル額即チ二千二百七十六圓ト認ム今之ヲ右全部ノ保險價格一万四千四百五十圓其保險金三千圓ニ比例スルニ本件二棟ノ保險金ハ五百九十六圓強ナリトス而シテ之ニ第一回ノ保險金千二百圓ヲ加ヘタル額合計千七百九十六圓強ハ尙ホ保險價格二千二百七十六圓ニ達セサルコト明カナルヲ以テ右第二回ノ保險契約ハ重複保險ニアラス依テ此ノ契約ノ締結ニ付キ鈴木辰次郎カ控訴人ニ届出テ若クハ其承諾ヲ經サリシトスルモ本件契約ヲ以テ無効ナリトスルコトヲ得ス第二乙第一號證ノ一ニ於ケル記載ハ

頗ル不明確ニシテ果シテ他會社ト保險契約ナキ旨ヲ記載シタルモノトハ認メ難キニ因リ鈴木辰次郎
カ本件家屋ニ付キ他會社ト保險契約ヲ締結シタルニ拘ハラヌ之ヲ被控訴人ニ届出テ其承諾ヲ經サリ
シトスルモ此ヲ以テ保險契約申込書ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルモノト云フコトヲ得ス其他乙第一
號證乃至乙第五號證ハ孰レモ被控訴人ノ抗辯事實ヲ證明スルニ足ラス且ツ證人大平是正新井傳ノ證
言ハ信ヲ措キ難キヲ以テ之ヲ採用セス

本件ハ商事ニ係ルヲ以テ年六米ノ損害金ヲ相當ト認ム

以上ノ理由ナルニ因リ控訴人ノ請求ヲ相當トナシ民事訴訟法第四百二十條第七十二條ニ則リ主文ノ
如ク判決ス

明治三十五年十月十日

東京控訴院民事第二部

裁判長判事 榊原幾久若 判事 松岡義正 判事 平島及平

判事 相原裕彌 判事 淺見倫太郎

附言

本件ハ第一審ニ於テ被告ノ勝訴ニ歸セシカハ第二審ニ於テハ原告即チ控訴人ハ重複保險ニアラサル
事實ヲ證明センカ爲ニ鑑定人ヲ申請シ裁判所之ヲ納レタルニ鑑定人ハ被保險建物ノ時價カ前契約ノ

時即チ三十二年五月頃ニ比シテ後契約ノ時即チ同年十一月頃ニハ三割四分ノ昂騰ナリト鑑定シタル
ヲ以テ裁判官ハ僅ニ半年ノ間ニ三割四分ノ昂騰ヲ爲シタリト云フ鑑定ニ信ヲ措キテ後ノ契約ニ際シ
テハ建物ノ保險價額ハ既ニ前契約ニ際スル價額ヲ超過スルニト三割四分ナルヲ以テ保險金額ノ合計
未タ之ニ及ハヌ故ニ重複保險ニアラスシテ從テ之ヲ告ケサルハ被保險者ノ缺點ニアラスト論決シタ
ルモノニシテ事實果シテ此ノ如シトセハ別ニ非難スヘキ點ナシトス因ニ云フ本件ノ外日本酒造火災
保險會社ニ對スル三件ノ訴訟ハ相手方皆異ナレリト雖トモ事實上ハ同一事件トモ謂フヘキモノナル
カ故ニ宜シク互ニ參照スヘシ

(十三) 角石クマ對日本酒造火災保險株式會社事件(上告)

判決正本

東京市京橋區銀座三丁目九番地

上告人 日本酒造火災保險株式會社

右法定代理人右會社東京支店支配人 横田良介

右訴訟代理人辯護士岸清一

神奈川県足柄下郡小田原町幸町三丁目二十番地平民無業

被上告人 角石クマ

右當事者間ノ保險金支拂請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十五年九月二十六日言渡シタル判決ニ對

シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告諭旨ノ第一點ハ原判決ハ「鈴木辰次郎カ明治卅二年十月八日本件家屋外六棟合計八棟ニ對シ家屋物品保險株式會社ト締結シタル第二回保險契約ハ重複保險ナルヤ否ニ付之ヲ審案スルニ信ヲ措クニ足ルヘキ鑑定人石川順ノ鑑定書ニ依レハ前記八棟ノ家屋ニ付明治卅二年十一月頃ノ時價ハ同年五月十八日頃ノ時價ニ比シ三割四分ノ昂騰トアルヲ以テ第二回保險契約當時ニ於テ本件家屋二棟ノ保險價格ハ第一回保險契約當時ノ時價ト認ムヘキ保險價格千七百圓ニ三割四分ヲ加算シタル額即チ二千二百七十六圓ト認ム今之ヲ右全部ノ保險價格二万四千五百五十圓其保險金三千圓ニ比スルニ本件二棟ノ保險金ハ五百十六圓強ナリトス而シテ之ニ第一回保險金千二百圓ヲ加ヘタル額合計千七百九十六圓強ハ尙ホ保險價格二千二百七十六圓ニ違セサルヲ明ナルヲ以テ右二回ノ保險契約ハ重複保險ニアラス」ト説明シ即チ第一回第二回ノ兩保險金ヲ通算シタル金額カ第一回保險ニ於ケル保險價格ニ超過スルモ第二回保險ニ於ル保險價格ニ超過セサルヲ以テ第二回ノ保險ハ重複保險ニアラサルヲ以テ結局乙第五號證ナル保險證券ノ約款ニ違背シタルモノニアラスト説明セリ本件契約ノ成立ノ時期ハ

舊商法ノ施行セラレタル時期ナルコトハ當事者間ニ爭ナキ處ナリ而シテ舊商法第六百三十七條ニ依レハ重複保險トハ一人カ同一ノ物及ヒ同一利益ニ關シ時ヲ同クシ又ハ時ヲ異ニシテ二人以上ノ保險者ヨリ各別ニ保險ヲ受クルコトヲ指スモノニシテ其保險金ノ總額カ必スシモ被保險利益額ヲ超過スルコトヲ必要トスルモノニ非ス言ヲ替ヘテ之ヲ云ヘハ同一ノ物及ヒ同一ノ被保險利益ニ關シ一個以上ノ保險ヲ爲ス場合ハ皆重複保險トナルモノトス而シテ舊商法第六百三十八條ハ重複保險ノ一種ノ場合即チ超過保險ノ結果ヲ生スル場合ヲ規定シタルニ過キササルヲ以テ同條ノ規定ヲ以テ一切ノ重複保險ニ適用シ得ヘキモノニアラス蓋シ同一ノ物及ヒ利益ニ關スル保險金額ノ多少ハ危險ノ程度ニ大影響ヲ及ホスモノナルヲ以テ例令超過保險ノ場合ニアラストモ二個以上ノ保險ヲ受クル場合ニ於テハ各保險者ハ他ノ保險ノ存在及ヒ内容ニ付キ通知ヲ受クルノ必要アリ是レ上告人カ乙第五號證第二條第七號ノ約款ヲ設ケタル所以ニシテ舊商法第六百三十七條ノ規定モ亦此精神ニ基クモノナリ然ルニ原判決ハ前陳ノ如ク同一ノ利益ニ關シ二個以上ノ保險アリタルコトヲ認メナカラ第二回ノ保險カ重複保險ニ非スト説明シタルハ違法ナリトス然レトモ假ニ一步ヲ讓リ重複保險トハ常ニ超過保險ノ場合ニ限ルモノナリト假定スルモ數個ノ保險金額ヲ合算シタルモノカ各保險者ト定メタル總テノ保險價格ニ超過セサルトモ其内一人ノ保險者ト定メタル保險價格ニ超過シタルトキハ即チ之ヲ重複保險ナリトセサルヲ得ス何トナレハ各保險者カ定メタル保險金額カ同一ナラサル場合ニ於テハ之ヲ共

同保險ト見做スコヲ得サルヲ以テ結局各保險契約ニ就キ損害額ヲ定メ其損害額ニヨリテ舊商法第六百三十八條ノ賠償ノ割賦ヲ他ノ保險者ニ請求スルノ外ナキヲ以テナリ而シテ本件ニ於テハ第一回第二回ノ兩保險金額ノ總額ハ金千七百九十六圓強ニシテ上告人カ第一回保險ヲ爲スニ當リテ定メタル保險價格金一千七百圓ニ超過スル上ハ第二回ノ保險ハ重複保險ナルコト明瞭ナルニモ拘ハラス原判決カ其保險金ノ總額カ第二回ノ保險者カ定メタル保險價格ニ超過セサル以上ハ重複保險ニ非ララスト判定シタルハ不法ニ法則ヲ適用シタル違法アルモノナリト云フニ在リ

然レモ舊商法第六百三十七條ノ規定ハ一人カ同一保險物ノ利益ニ關シ二人以上ノ保險者ヨリ各別ニ保險ヲ受ルトキニ於テ各保險金ノ合算額カ保險價格ニ超過セル場合ヲ規定シタルモノニシテ各保險金ノ合算額カ保險價格ニ超過セサルニ於テハ同條ニ所謂重複保險ト稱スヘキモノニ非ス而シテ其次條ナル第六百三十八條ノ規定ハ第六百三十七條ノ重複保險ノ場合ニ於ル各保險金額ノ請求及其割合ノ方法ヲ規定シタルモノトス何トナレハ各保險金ノ合算額カ保險價格ニ超過セサル場合ニ於テハ被保險者ハ當然各保險者ニ對シ各保險金ヲ請求シ得ルノミナラス之ヲシテ第六百三十七條ノ要件ヲ遵守セシメサルモ保險價格ヲ超過シタル保險金ヲ取得セシムルノ虞ナク且各保險金額ノ多寡ハ固ヨリ保險ニ付シタル危險ノ程度ニ毫モ影響ヲ及ホスヘキモノニ非サレハ特ニ第六百三十七條第六百三十八條ノ如キ規定ヲ設ルノ必要ナキモノナレハナリ故ニ上告論旨ノ如ク第六百三十七條ハ二回以上ノ

保險ヲ契約シタル總テノ場合ヲ重複保險トナシテ規定シタルモノニシテ第六百三十八條ハ第六百三十七條ノ重複保險中ノ一種ノ場合ヲ規定シタルモノナリトノ上告人ノ解釋ハ其當ヲ得サルモノトス故ニ此點ニ於ケル原判決ハ適法ニシテ上告論旨ノ前段ハ其理由ナシ又物ノ價格ハ一定不動ノモノニ非スシテ時ニ從ヒ昂低アルヲ免レヌ而シテ第一回ノ保險契約ヲ取結ヒタル後被保險物ノ價格カ騰貴シタル場合ニ於テ更ニ第二回ノ保險契約ヲ取結フモ各保險金ノ合算額カ騰貴價格ニ超過セサルトキハ重複保險ヲ以テ論スヘキモノニ非ス而シテ原判決ハ全ク此事由ニ基ツキ本件二個ノ保險契約ハ重複保險ニアラスト判定シタルモノナレハ上告論旨ノ後段モ亦其理由ナシ

上告論旨ノ第二點ハ本件第一審判決ニハ渡邊徹ナル者ヲ被告會社ノ法律上代理人ト表示シ之ニ對シテ判決ヲ爲シアレトモ右渡邊徹ナル者カ本件ノ訴訟行為ヲ爲シタルコトナキハ當事者双方ニ爭ナキ處ナルノミナラス第一審ノ被告訴訟代理委任狀ニ依レハ被告會社ノ東京支店支配人横田良介ヨリ辯護士岸清一外一名ニ訴訟代理ヲ委任シアリ一切ノ訴訟行為ハ總テ同辯護士ニ依リテ代理セラレ居リ第一審裁判所カ法定代理人ト爲シタル渡邊徹ナル者ハ毫モ本件ノ訴訟行為ニ干與シタル事蹟ナシ然ルニ之ヲ被告會社ノ法律上代理人ト表示シ之ニ對シテ判決ヲ爲シタルハ訴訟手續ヲ誤リタル不當ノ判決ナルニ原院カ該判決ヲ爲シタル手續ヲ廢棄セザリシハ違法ナリト云フニ在リ

然レトモ渡邊徹ナル者ハ上告會社ノ取締役ニシテ該會社ヲ代表スヘキ資格ヲ有セシモノナルノミナ

ラス第一審判決書ニハ被告トシテ明カニ日本酒造火災保險株式會社ト記載シアルヲ以テ當事者ノ表
示ヲ誤マリタルモノニモアラサレハ其法定代理人ヲ渡邊徹ト記載シタルモ實際ニ於テ毫モ其判決ニ
影響ヲ及ホササルモノナルヲ以テ原院カ其判決ヲ廢棄セサルモ是等ノ瑕疵ヲ以テ原判決ヲ破毀セサ
ル可ラサル要ナキモノトス故ニ此點モ亦上告ノ理由ト爲スニ足ラス
以上説明セシ如ク上告論旨ハ總テ適法ノ理由ナキヲ以テ民事訴訟法第四百三十九條第一項ニ從ヒ主
文ノ如ク判決ス

明治三十六年二月十三日

大審院第一民事部

裁判長判事 井上正一

判事 岡村爲藏

判事 今村信行

判事 芹澤政温

判事 馬場愿次

判事 掛下重次郎

判事 志方 鍬

(十四) 前田瀧藏對家屋物品火災保險株式會社事件(始審)

判決要旨

被保險者カ辨識力アル未成年者ヲシテ石油ノ取扱ヲ爲サシメ其過失ノ爲ニ火災ヲ惹起シタル場合ト

雖トモ之ヲ以テ被保險者ノ過失ト謂フヘカラサルカ故ニ保險者ハ保險金支拂ノ責ヲ免ルノヲ得ス

判決正本

新潟縣新潟市西厩島町二千三百五十番地平氏雜業

東京府東京市日本橋區吳服町十八番地

原告 前田 瀧 藏

被告 家屋物品火災保險株式會社

右訴訟代理人辯護士

古 関 定

右法定代理人同社取締役

齋 藤 利 三 郎

右訴訟代理人辯護士

沼 野 兼 吉

右當事者間ノ明治三十四年(丙)第二〇八號火災保險金及損害金請求第一審事件ニ付キ判決スルコト左
ノ如シ

主 文

被告ハ金八百圓及ヒ之レニ對スル明治三十四年十月十八日ヨリ辨濟當日迄一ヶ年六分ノ利率ニ相當
スル損害金ヲ原告ニ辨濟ス可シ
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人ハ主文掲記ノ通り判決ヲ求ムル旨一定ノ申立ヲ爲シ其演述セル事實ノ要旨ハ原告所
有ノ新潟市西厩島町二下三百四十九番地同五十番地同五十一番地ノ建設木造木羽葺平家立家屋二棟

明治三十二年十月二十日ヨリ全三十五年十月十九日迄保険金三百圓ニテ被告會社ト火災保險契約ヲ締結シ尙同町二千三百五十番地同五十一番地ニ建設セル木造木羽葺二階建家一棟ヲ明治三十四年三月二十三日ヨリ同三十五年三月二十三日迄保険金千圓ニテ被告會社ト火災保險契約ヲ締結シ孰レモ原告ニ於テ保險金受取人タリシ處其後第二ノ保險金一千圓ノ内五百圓ハ原告ノ都合ニ因リテ訴外風間要吉ヲ保險金受取人ト改メタリ然ルニ右保險物ハ明治三十四年八月十二日午前九時過燒失シタルニ付契約保險金ノ拂渡ヲ被告會社ニ請求セシ處言ヲ左右ニ托シテ應セサルニ付本訴ヲ提起シタル次第ナリト云フニ在リテ立證トシテ甲第一號乃至第三號證ヲ提出シタリ

被告訴訟代理人ハ原告ノ請求ヲ排斥シ訴訟費用ハ原告ノ負擔タル可キ旨ノ判決ヲ求ムル旨ノ申立ヲ爲シ其抗辯ノ要旨ハ本件被保險物ナル家屋燒失ノ原因タル原告カ其ノ養女「イサ」ヲシテ多量ノ石油ヲ取扱ハシメ而シテ「イサ」ハ其漏洩セシ石油ハ殘火アル熱灰ヲ撒布シタルニ基キタルモノニシテ「イサ」ノ不注意ノ甚シキハ勿論「イサ」ノ如キ未成年者ニ多量ノ石油ヲ取扱ハシムルニ至リテハ原告ハ大注意ヲ以テ監督セサル可カラサル等ナルニ之ヲ「イサ」ニ一任シテ願ミサリシハ保險契約者タル原告ノ重大過失アリト云ハサル可カラズ殊ニ一家ノ戸主ハ其家族ノ家事ヲ取ルノ際生シタル過失ノ損害ハ普通ノ道理トシテ戸主ニ於テ其責ニ任セサル可カラサルヲ以テ本件ノ如キハ保險約款ニ基ツキ被告ハ原告ノ保險金支拂ノ義務ナキモノトスト云フニアリテ立證トシテ乙第一號證ヲ提出シ

尙甲第一、二號ヲ援用シタリ

理由

原告ノ其所有ニ係ル新潟市西厩島町二千三百四十九番地全五十番地全五十一番地ニ建設セル木造木羽葺平家建家屋二棟ヲ明治三十二年十月二十日ヨリ全三十五年十月十九日迄保險金三百圓ニテ被告會社ト火災保險契約ヲ締結シ尙同町二千三百五十番地同五十一番地ニ建設セル木造木羽葺二階建家屋一棟ヲ明治三十四年三月二十三日ヨリ同三十五年三月二十三日迄保險金一千圓ニテ被告會社ト火災保險契約ヲ締結シ孰レモ原告ニ於テ保險金受取人タリシ處其第二ノ保險金一千圓ノ内五百圓ハ原告ノ都合ニヨリテ訴外風間要吉ヲ保險金受取人ト改メタル事實右被保險家屋ハ明治三十四年八月十二日午前九時過訴外者前田「イサ」カ石油取扱ノ際其漏洩セシ石油ハ殘火アル熱灰ヲ撒布シタル爲メ發火シテ燒失シタル事實並ニ右「イサ」ハ原告ノ養女ニシテ且其家族ナル事實ニ付テハ當事者間ニ爭ナキ處ナリ

被告ハ「イサ」ノ失火ハ原告カ其監督ヲ怠リタル過失ニ基因スルヲ以テ被告ニ保險金支拂ノ義務ナキカ如ク主張スルモ戸主ハ戸主トシテ家族ニ對シ監督ノ責任ヲ負フヘキ道理ナク又無能力者ヲ監督スヘキ法定ノ義務アル者ト雖モ其無能力者カ行爲ノ責任ヲ辯識スルニ足ル可キ知能ヲ具ヘス且其監督義務者カ監督ヲ怠リタル場合ニアラサル以上ハ何等ノ責任ヲモ負フ可キ者ニアラサルニ「イサ」

ハ失火ノ當時行爲ノ責任ヲ辯識スルニ足ル可キ知能ヲ有シタルコト甲第二號證ニ徴シテ明カナレハ原告ハ「イサ」ノ失火ニ對シ監督ヲ怠リタル責ニ任スヘキ謂ハレナキハ勿論原告カ成長シタル「イサ」ニ石油ノ取扱ヲ爲サシメタル事實ノ如キハ到底原告ニ過失アルモノト認メ難キヲ以テ被告ハ原告請求ニ應スルノ義務アルモノトス又訴訟費用ハ民事訴訟法第七十二條第一項ニ從ヒ被告ヲシテ負擔セシムルヲ相當トス

以上ノ理由ナルヲ以テ主文ノ如ク判決セリ

明治三拾五年一月十六日

新潟地方裁判所民事部

裁判長判事 千谷 泰次郎

判事 松 井 郡 治

判事 篠原重次郎

(十五) 前田瀧藏對家屋物品火災保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

被保險者カ普通家裏ノ使役ニ堪ユヘキ者ニ洋燈石油ノ取扱ヲ命シタルハ異常ナル事柄ト謂フヲ得ス從テ其者ノ過失ヨリ起リタル火災ニ對シテ責ヲ負フヘキモノニアラス

判決正本

東京日本橋區吳服町拾八番地

控訴人 家屋物品火災保險株式會社

右法定代理人會社取締役 齋藤利三郎

右訴訟代理人辯護士

徳田直吉

新潟縣新潟市西區島町二千貳百五十番地平民

被控訴人 前 田 瀧 藏

右訴訟代理人辯護士

古 閑 定

右當事者間明治三十五年(一)二一五火災保險金及損害金請求事件ニ付當院ハ判決スルコト左ノ如シ
本件控訴ハ之ヲ棄却ス

事 實

控訴人ハ原判決ノ全部ヲ廢棄シ被控訴人ノ請求ヲ却下ストノ判決ヲ求ムル旨ヲ申立被控訴人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求ムル旨ヲ申立タリ而シテ當事者ハ事實上ノ主張ヲ原判決ニ揭示スル所ト同一ナルヲ以テ茲ニ之ヲ引用ス
立證トシテ控訴人ハ乙第一號證ヲ提出シ甲第一二四號證ヲ引用シ被控訴人ハ甲第一號乃至四號證ヲ提出シタリ

理 由

當事者間本案ノ保險契約ノ成立セルコト保險ノ目的物カ燒失セシコト并ニ其燒失ハ被控訴人ノ養女ニシテ家族タルイサカ洋燈ニ石油ヲ注入スルニ當リ保險家屋ノ板塲ニ漏シタル石油ヲ除去セントテ

殘火アル熱灰ヲ撒布シタルニ原因スルコトハ當事者ノ爭ハサル事實ナリトス而シテ右イサカ當時滿十八年三月ノ年齢ニ達シ居タルコトハ甲第四號證ニ依リテ明ナレハイサハ普通家裏ノ使役ニ堪フヘキ智能ヲ有セシ者ト認メサルヲ得ス從テ被控訴人カイサヲシテ洋燈ノ拂拭并ニ石油ノ取扱ヲ爲サシメタルハ異常ノ事柄ニアラサルカ故ニイサカ石油ノ浸潤セル板面ニ熱灰ヲ撒布セルカ如キハ慎密ノ注意ヲ欠キタルノ嫌ナキニアラスト雖モ之レカ爲メニ被控訴人ニ重大ナル過失アリト云フヲ得ス畢竟控訴人ノ立證ニ依リテハ保險家屋ノ燒失ハ被控訴人ノ重過失ニ起因スルコトヲ認ムルヲ得サルヲ以テ控訴人ハ本案ノ請求ヲ拒ムヲ得サルモノトス

右ノ理由ニ依リ主文ノ判決ヲ爲ス

明治三十五年五月五日
東京控訴院民事第三部

裁判長判事 坂 崎 備

判事 布施文四郎

判事 平 野 正 富

判事 折原吉之助

判事 中村 太 郎

附 言

被保險者カ重大ナル過失ニ因リテ損害ヲ發生セシメタルトキハ保險者之ヲ填補スル責任ナキハ保險契約上ノ原則ニシテ孰レノ火災保險會社ノ約款ニ於テモ見ル所ノ條項ナリ而シテ本件ハ事實カ果シ

テ之ニ該當スルヤ否ヤノ證據並ニ認定問題ニ過キス而シテ裁判官ノ之ニ對スル意見亦不穩當ナリト云フヘカラサルカ故ニ第一審第二審共ニ非難ヲ容ルヘカラサルナリ

第三部 海上保險

(一) 廣海二三郎對日本海上保險株式會社事件(始審)

判決要旨

船舶カ契約以外ノ航路ニ於テ遭難シタルトキハ保險者ハ損害填補ノ責ニ任セサルモノトス

判決正本

大阪府西區江ノ子島東之町八拾八番屋敷石川縣士族海運業

大阪府西區江戸堀南通三丁目百四拾四番屋敷

原告 廣海二三郎

被告 日本海上保險株式會社

右訴訟代理人辯護士

吉田長敬

右會社々長取締役

渡邊尙

全 柿崎欽吾

右訴訟代理人辯護士

菅沼豐次郎

右當事者間ノ保險金請求訴訟事件ニ付當地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

主 文

原告ノ請求相立タス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告訴訟代理人陳述ノ要領ハ原告ハ明治廿九年五月六日ヨリ引續キ原告所有汽船奈良丸ヲ被告會社

ハ金七萬圓ノ船舶保險ヲ爲シ甲第一號證ノ一ノ如ク保險契約ヲ締結シ其契約通常航路ハ内國船規定ノ航路日本朝鮮浦羅斯德ニシテ其他本船ガ外航新嘉坡以東米國西海岸以西臺灣澎湖島八重山群島等ハ航行スルトキハ其航海日數ニ應シ割増保險料ヲ支拂ヒ其危險ヲ擔保セシムルコトナシタリ而シテ本船ハ明治三十年中三月ニ一回八月ニ一回十二月ニ一回都合三回外航ヲ爲シ其都度外航割増保險料ヲ支拂ヒ其危險ヲ擔保セシメタリシカ第三回航海ノ際不幸ニモ全年十二月廿四日臺灣海峽島附近ニ於テ暗礁ニ乗揚ケ全船沈没シタリ故ニ原告ハ保險契約ニ基キ全年三十日被告會社ハ船舶委棄ノ申込ヲ爲シ同時ニ併セテ保險金支拂ノ請求ヲ爲シタルニ被告ハ拒絕シテ之レカ支拂ヲ爲サス而シテ被告ハ甲第一號證ノ一ノ保險契約ト其ノ二ノ保險契約トハ其約旨ニ於テ相違スル所アリ且澎湖島ハ臺灣行航路中ニ包含スルモノニアラスト主張スルモ甲第一號證ノ一ノ保險契約ハ其ノ二ノ契約ヲ承繼存續シタルモノニシテ二者毫モ異ナル所ナク即チ原告ハ明治廿九年五月六日甲第一號證其二ノ如ク本船ニ對シ被告會社ト保險契約ヲ締結シ三十年三月中臺灣行外航ヲ申込ミ澎湖島ニモ寄港スヘキ旨ヲ明示シ其旨新聞紙ニ廣告シ歸航ノ后被告會社ヘ其日數ニ對スル割増保險料保險金壹百圓ニ付三十日間金拾貳錢ノ割合ニテ廿九日分合計金八拾壹圓貳拾錢ヲ支拂ヒ臺灣航行割増保險料ノ領收書ヲ受領シタリ然ルニ其保險期間ハ一ケ年ナルヲ以テ明治三十年五月六日甲第一號證ノ一ノ如ク保險狀ヲ更正シ全年八月中右ト同一ノ手續ヲ以テ臺灣行外航ヲ申込ミ澎湖島ニ寄港シ前割合ヲ以テ割増保

險料ヲ支拂ヒ前同一ノ領收書ヲ受領シ尙ホ明治三十年十二月中前兩度ノ手續ト同一ノ手續ヲ以テ臺灣行外航ヲ申込ミ其航行中全月廿四日本船ハ前述ノ如ク沈没ノ難ニ遭遇シタルモノニシテ航海毎ニ新聞紙ニ澎湖島ニ寄港スル旨ヲ廣告シタルヲ以テ被告ニ於テ之レヲ知ラサルノ理ナク又被告ハ澎湖島寄港ノ臺灣行ニ對シ同一ノ割合ヲ以テ割増保險料ヲ領收シ特ニ明治三十年三月中ノ臺灣行ニ付テハ拾六日間澎湖島碇泊ノ事實ヲ認メ其日數ヲ臺灣航行割増保險料中ニ算入シテ領收シタル者ナレハ臺灣行外航ニハ澎湖島ニ寄港スベキモノナルコトハ豫テ被告カ承認スル所ニシテ甲第一號證ノ一二ノ契約ハ其同一ノモノナルヲ見ルニ足レリ又澎湖島ハ臺灣ナル名稱中ニ包含セサルモノ、如ク主張スルモ拓殖務省官制ニ拓殖務省ハ單ニ臺灣ヲ管轄ストアリテ澎湖島ヲ特記セス臺灣總督府條例ニ臺灣總督ハ臺灣島及澎湖島ヲ管轄スル旨規定アリ又大阪商船株式會社カ臺灣總督府ヨリ得タル命令書ノ臺灣沿岸航路中澎湖島ヲ指示シアリ甲第十一號證ノ海圖ニ奈良丸沈没ノ島島附近ヲ臺灣海峽ト明示シアリ訴外人右近權右衛門ト帝國海上保險株式會社トノ漁船福井丸ノ特約ニモ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメアリ故ニ是等ノ點ヨリ觀察スルモ臺灣ナル名稱中ニハ澎湖島ヲ包含スルコトヲ知ルニ十分ナリ加之明治三十年八月及ヒ十二月航行ノ際被告ハ奈良丸搭載ノ澎湖島行貨物ニ對シ貨物保險ヲ爲シ且ツ原告所有漁船千代丸カ明治三十年十二月中本件遭難ノ奈良丸救助ノ爲メ澎湖島ヘ回航スルコトヲ申込ミ保險繼續ノ爲メ割増保險料ヲ支拂ヒタル際モ全シク臺灣行割増保險料トシ

テ領收書ヲ交付シ該船ノ貨物ニ付テモ澎湖島行ハ航路外ニ係ルヲ以テ原告ヨリ日本海陸帝國海上東京海上及ヒ被告トノ四保險會社ニ特ニ保險ヲ申込ミタルニ被告ハ他ノ三會社ト共ニ之ヲ承諾シ危險ヲ擔保シタル次第ニテ被告ハ澎湖島ヲ臺灣海峽トシ臺灣行ニハ必ラス澎湖島ヲ包含スルモノトシテ保險ノ取扱ヲ爲シタルモノナリ又甲第一號證ノ其二ニハ臺灣澎湖島八重山群島及ヒ新嘉坡以東云々トノ條項アリテ甲第一號證ノ一ニ其條項ナキモ其取扱ト同一ニシテ京都九千代丸九千九百九十九ノ保險契約書ニモ如右條項アルニ拘ハラヌ均シク承諾狀ナルモノヲ發行シ其條項ノ記載ナキモノト其取扱ニ於テ聊カ異ナル所ナシ即チ甲第一號證ノ一ノ契約ト其二ノ契約ハ同一ニシテ其一ハ其二ノ契約ヲ繼續シタルモノニ外ナラス依リテ保險金七萬圓ヨリ原告カ被告會社ニ支拂フ可キ未納ノ保險料金壹千五百圓ヲ差引キ被告ハ其殘額金六萬八千九百五拾圓ニ出訴ノ日明治三十一年二月十二日ヨリ判決執行濟迄法律上ノ利子ヲ付シ原告ニ支拂フベシトノ判決アリタシ又相當ノ保證ヲ立ツルニ付假執行ノ宣言アラントヲ求ムト云ヒ其事實ハ甲第一號乃至第二拾一號證ヲ以テ立證シタリ

被告訴訟代理人陳述ノ要領ハ被告ハ原告所有漁船奈良丸ニ對シ明治三十年五月六日甲第一號證一ノ如ク海上保險契約ヲ結ヒ其期限ハ全六日正午ヨリ翌三十一年五月六日正午迄滿一ケ年間ニシテ約定航路ハ內國航船規定ノ航路ニテ臺灣澎湖島八重山群島并ニ十月廿一日乃至四月二十日間ハ北見國網走以東及千島列島ヲ取除キタリ而シテ該契約ハ其以前ノ甲第一號證ノ其二ノ保險契約トハ全ク異ニシ

ヲ甲第一號證一ノ契約ニハ其二ノ契約ノ如キ追加條項ナリ又一ノ保險契約ニハ通常航路ナルモノナク其約定航路ハ前記ノ如クナルヲ以テ其航路以外ニ於テハ被告會社ニ於テ何等ノ危險ヲ擔保シタルコトナシ故ニ原告ニ於テ被告ヲシテ約定航路外ノ危險ヲ擔保セシメントスルニハ新タニ保險ノ申込ヲ爲シ被告ノ承諾ヲ經サルベカラサルナリ原告ハ明治三十年十二月十五日約定航路外ナル臺灣ヘ航行セントスルニ際シ更ラニ保險申込ヲ爲シ被告ハ之ヲ承諾シ原告ヨリ臺灣航行ニ對スル割増保險料ヲ領收シタルニ汽船奈良丸ハ全月廿三日臺灣ヲ發シ澎湖島ヘ向ヒ其航行中全月廿四日全島附近ニ於テ沈没シタリ即チ奈良丸ノ沈没シタル個所ハ約定船路外ノ海難ナルヲ以テ其海難ニ對シテハ保險金ヲ支拂フベキ義務ナキナリ元來澎湖島ト臺灣トハ其名稱ノ異ナルカ如ク其區別アルコトハ乙第一號證海圖ニ某島ヲ臺灣ト記シ某々島ヲ澎湖列島ト記シ及ヒ外國語ニテ臺灣ヲ「フワーモサ」ト稱シ澎湖島ヲ「ベスカドアー」ト稱シ明治二十八年五月十日締結ノ日清講和條約第二條ニ清國ハ左記ノ土地ノ主權(中略)ヲ永遠日本國ニ割與ス一左ノ經界内ニ在ル奉天省南部ノ地(中略)ニ臺灣全島及其附屬諸島嶼三澎湖列島乃チ英國「グリーンウイチ」東經百十九度乃至百二十度及北緯廿三度乃至廿四度ノ間ニ在ル諸島嶼トアルヲ以テ見ルモ明ニシテ甲第一號證一ノ航路部但書ニ「但臺灣澎湖島八重山群島ト列記シ臺灣ナル語中ニ澎湖島ヲ包含セシメサルノ意思ヲ表示シタルヲ以テ奈良丸カ澎湖島ニ航行シタルハ臺灣行ノ契約以外ノ航路ヲ航行シタルモノナリ而シテ甲第一號證一ノ契約ハ臺灣

灣澎湖島等ノ航路モ追加條項ヲ以テ被告カ其危險ヲ擔保シ只タ割増保險料ヲ支拂フベキ條件アルニ依リ被告ハ假令危險發生後ニ及ヒ其通知ヲ受クルモ割増保險料ヲ提供セラル、ニ於テハ保險金支拂ヲ拒ムコトヲ得サルヲ以テ航行前豫メ其通知ニ接スルトキハ承諾ヲ與フベキハ固ヨリ當然ノコトナリト然レモ甲第一號證一ノ契約ハ如右追加條項ノ記載ナキヲ以テ第一回三月中ノ航海ノ場合ト全一ノ手續ニ依ルコト能ハス必ラス豫メ被告ノ承諾ヲ受ケ保險料ヲ前納セサルベカラサル者ナルヲ以テ原告ハ第二回臺灣航行ニ付テハ明治三十年八月二十六日豫メ臺灣行ノ事ヲ申込み被告カ之ヲ承諾シタルニ依リ同日割増保險料三十日分ノ概算金八拾四圓ヲ支拂ヒタリ故ニ被告ハ便宜上之ヲ預リ金トシ帳簿ニ記入シ同年九月十三日ニ至リ原告ヨリ奈良丸ハ全月十二日長崎ニ着港シタリトノ通報アリタルニ依リ全十四日直チニ精算ヲ爲シ甲第四號證ヲ交付シタリ而シテ該保險料ハ第一回分ノ如ク航海日誌ニ就キ精算シタルニアラス乙第五號證原告ノ通知ニ依リタル者ニシテ奈良丸カ澎湖島ニ航行シタルハ更ラニ被告ノ與知セサル所ナリ又原告ハ明治三十年十二月中第一回第二回ノ航行ト同一ノ手續ヲ以テ臺灣行外航ヲ申込み被告モ亦タ同一ノ手續ヲ以テ取扱ヒタリト云フモ全十二月十五日原告ヨリ奈良丸臺灣行申込アリタルニ依リ被告ハ之ヲ承諾シ翌十六日第二回ノ場合ノ如ク概算三十日分割増保險料金八拾四圓ヲ領收シ第一回ノ場合トハ全ク其手續ヲ異ニシ第一回ノトキ保險料領收書ニ臺灣行割増保險料ト記シタルハ既ニ成立シタル契約ニ基キ授受シタル金錢受取書ニシテ契約書本体ニ

アラサレハ其簡單ナランコトヲ欲シ特ニ臺灣ナル著名ノ名稱ヲ掲ケテ澎湖島ヲ省略シタルモノニ
 外ナラサレハ臺灣ノ語中ニ澎湖島ヲ包含セシメタルモノニアラス又漁船福井丸ニ對スル訴外人右近
 權右衛門ト帝國海上保險株式會社間ノ保險契約ハ被告ノ干知セサルモノナルモ假リニ原告陳述ノ如
 クナリトスルモ本訴原告間ノ契約ニハ明カニ臺灣ト澎湖島ヲ區別シタルヲ以テ彼是同一ノ斷定ヲ
 爲シ得ベキモノニアラス殊ニ明治廿九年四月中東京海上日本海陸帝國海上ノ三保險株式會社間ニ締
 結スル所ノ規約モ臺灣ト澎湖島トハ明カニ區別ヲ爲シタルニヨリ考フルモ保險契約上此二者ヲ區別
 スルハ當營業者間ノ普通ノ事例ナルコトヲ知ルニ足ル又原告ハ澎湖島行ノ旨ヲ新聞紙上ニ廣告シタ
 ルヲ以テ被告ニ於テ之ヲ知ラサルノ理ナシト云フモ其廣告ハ保險契約ニハ何等ノ關係ナク該廣告ハ
 原告カ船客貨物ヲ募集スル爲メノ廣告ナレハ之レカ爲メ保險ノ申込ヲ爲シタル臺灣ナル指定地ノ内
 ニ澎湖島ヲ包含セシムルコトヲ承認シタル者ト爲ヌ又被告ハ奈良丸搭載ノ澎湖島行貨物ニ對シ
 保險契約ヲ爲シタリトスルモ船体ト貨物ト保險トハ全ク別個ノモノナルヲ以テ澎湖島行ノ船体ニ付
 其危險ヲ擔保シタルモノト爲ヌヲ得ヌ何トナレハ無保險ノ船舶搭載貨物ヲ保險スルハ當業者ノ常ニ
 爲ヌ所ナレハナリ漁船千代丸ニ對シテハ奈良丸ニ對スル前契約即チ甲第一號證ノ其二ノ如キ契約ヲ
 爲シタルモノナルヲ以テ原告ハ豫メ被告ノ承諾ヲ得ルヲ要セス澎湖島ニ回航セシメ其危險ヲ擔保セ
 シムルコトヲ得ルト雖モ原告ハ千代丸ニ對シ臺灣行保險ノ期間延長ノ申込ヲ爲シタルヲ以テ被告ハ

之ヲ承諾シタルモノニシテ果シテ奈良丸救助ノ爲メ澎湖島ニ回航セシムルモノナルヤ否ヲ知ラス又
 其意思アリシコト知ルニ由ナカリシナリ故ニ該船ノ航行ニ對シ臺灣行割増保險料ノ領收書ヲ交付シ
 タル次第ニテ被告ハ奈良丸カ澎湖島航行ニ對シ船舶危險ノ擔保契約ヲ爲シタルコトナケレハ本訴原
 告カ保險金請求ニハ應スルコトヲ得ヌト云フニ在リ

理由

本件所争ノ點ハ多岐ニ亘ルカ如キモ要スルニ一臺灣ト澎湖島ハ同一ニシテ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島
 ヲ包含セシムルモノナルヤ否ニ本訴奈良丸カ澎湖島航行ハ被告カ承諾シタル者ナルヤ否ヤニ在リ右
 第一點ヲ審案スルニ甲第一號證ノ一ノ船舶保險狀ニハ其保險航路規定ノ部ニ於テ内國航船規定ノ航
 路但臺灣澎湖島八重山群島并ニ十月廿一日ヨリ四月廿日ニ至ルノ間ハ北見國網走以東及千島列島ヲ
 除クト記シ内國航船規定ノ航路外ノ航行地ニ付テハ臺灣ト澎湖島トヲ明示シ各其地名ノ指定アルヲ
 以テ考フルトキハ本訴當事者間ニ締結シタル保險契約ニハ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメタ
 ルモノニアラスト解釋セサルヲ得ヌ若シ臺灣ト澎湖島トヲ區別セス臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含
 セシメタルモノトセハ特ニ澎湖島ナル名稱ヲ明示スルノ必要ナキモノト云ハサルヲ得ヌ然リ而シテ
 甲第一號證一ノ保險狀ト其二ノ保險狀即チ二個ノ保險契約書ヲ對照比較スルニ其二ノ保險狀ニハ航
 路ノ部ニ於テハ航路日本朝鮮沿岸及浦鹽斯德但臺灣澎湖島八重山群島云々トアリ又其約定條項ノ部

ニ於テハ一十月廿一日ヨリ四月廿日ニ至ル間網走及千島列島ニ航行スルトキハ保險金百圓ニ付一ヶ月金五錢ノ割合ヲ以テ航海日數ニ應シ割増保險料ヲ拂込ムベシ一臺灣澎湖島八重山群島及新嘉坡以東米國西海岸以西ヲ航行スルトキハ保險金百圓ニ付一ヶ月金貳拾錢ノ割合ヲ以テ航海日數ニ應シ割増保險料ヲ拂込ムベシトアリテ其一ノ保險狀航路部ニハ日本朝鮮沿岸及浦鹽斯德ノ名稱ヲ掲ケス又約定條項ノ部ニハ右ニケノ條項ヲ記セサレバ假令其一ハ其二ノ契約滿期後引續キ締結シタル保險契約書ナリトスルモ其一ト其二トハ約定條項ノ異ナル所アルカ如ク其約書モ亦自ラ相違スルモノト認メサルヲ得ス故ニ其一ノ保險契約ハ其契約ニ依リテ當事者双方ノ意思ヲ解釋スベキモノニシテ甲第一號證一ノ保險狀ニハ前記ノ如ク航路ノ部ニ於テ臺灣澎湖島ト明示シタルヲ以テ他ノ特約ナキ限りハ澎湖島航行ノ保險ニ付更ラニ被告ノ承諾ヲ要スルモノト云ハサルベカラス故ニ好シ地理上或ハ行政上ノ區別ニ於テ臺灣ト澎湖島ト同一視スルコトアリトスルモ船舶航海保險契約ノ如キハ其到着地ノ指定アルヲ以テ右等ノ事實ニ依リ臺灣航行ノ保險ハ澎湖島航行ノ保險ヲモ包含スルモノト爲スヲ得ス因リテ本訴甲第一號證一ノ保險契約ハ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメタルモノニアラスト論結セサルヲ得ス

右第二點ヲ審究スルニ前述ノ如ク甲第一號證一ノ契約ニシテ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメタルモノニアラサル以上ハ臺灣航行ト澎湖島航行トハ各其指定地ヲ異ニスルヲ以テ澎湖島ニ航行スルニハ其承諾ヲ要スベキモノナルコトハ論ヲ俟タス故ニ假令千代丸京都丸其他ノ船舶ニシテ臺灣航行トノ保險ヲ申込ミ被告會社ニ於テ其申込ニ依リ澎湖島航行ノ保險ヲモ爲シタルモノトスルモ右等ノ船舶ト奈良丸トハ船体ヲ異ニスルノミナラス其約定條項ニ於テモ聊カ相違スル所アレハ彼是同一ノ論斷ヲ爲シ難ク而シテ船舶航海ノ保險契約ハ其指定ノ航行中ノ危險ヲ擔保スルモノニシテ指定ノ航路ハ即チ保險契約ノ一要素ト看做スベキモノナレバ原告カ奈良丸ノ臺灣航行保險ノ申込ヲ爲シ被告カ千代丸京都丸等ト同一ノ手續ヲ以テ其取扱ヲ爲シタリトスルモ其取扱同一ナルカ故ニ其契約モ亦同一主旨ノモノト云フヲ得ス又原告ニ於テ奈良丸カ第一回臺灣航行ノトキ被告ハ同船カ澎湖島ニ航行シ同島ニ碇泊シタル其日數ヲ臺灣航行中ノ日數ニ算入シテ其割増保險料ヲ領收シタル如キ又奈良丸搭載ノ澎湖島行貨物ニ對シ保險ヲ爲シタル如キ同船カ臺灣航行ノトキ澎湖島ニ航行スルコトハ被告ノ承諾シタルモノナルコトヲ證スルニ足ルト主張スルモ甲第一號證ノ其一ノ契約ハ明カニ臺灣航行ト澎湖島航行ヲ區別シ澎湖島航行ニ付テハ更ラニ其承諾ヲ經ベキモノニシテ而シテ該保險料領收ノコトハ航海後即チ事後ノコトニ屬シ且ツ貨物ノ保險ト船体ノ保險トハ格別ノモノナルヲ以テ假令被告カ同船ノ澎湖島ニ寄港シタルコトヲ承知シテ保險料ヲ領收シ或ハ同船搭載ノ澎湖島行貨物ニ對シ保險ヲ爲シタルコトアリトスルモ是等ノ事實ニ依リ契約ノ本体ヲ觸動シ被告ハ奈良丸ニ對シ臺灣ナル指定地ノ航行以外ニ澎湖島航行ノ危險擔保ヲモ承諾シタルモノト斷定スルヲ得ス又原告ニ於

テ奈良丸カ澎湖島ニ航行スベキコトヲ新聞紙上ニ廣告シタルカ如キハ原告自己ノ隨意行爲ニシテ當事者合意上爲シタルモノニアラサレハ該廣告アリタルカ爲メ被告カ奈良丸ノ澎湖島航行ノ保險ヲ承諾シタルモノト看做スニ由ナク故ニ奈良丸カ澎湖島航行ハ被告カ其保險ヲ承諾シタルモノニアラスト断定ス

以上説明ノ如クニシテ奈良丸カ澎湖島ニ向ヒ其航行中同島ニ接シタル島附近ニ於テ暗礁ニ乗揚ケ沈没シタルハ保險契約指定外ノ航路ニ於テ發生シタ事故ナルヲ以テ被告ハ保險契約ニ基キ其損害ヲ填補スベキ責任ナキモノトス因リテ各證ニ付テハ説明ノ必要ナキモノトシ説明ヲ省略シ主文ノ如ク判決ス

明治三十一年五月十六日

大阪地方裁判所民事第三部

裁判長判事

前田道一

判事 櫻田正彦

判事 更谷嘉一

(二) 廣海二三郎對日本海上保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決ニ同シ

判決正本

大阪市西區江ノ子島東之町八十八番屋敷士族海運業

控訴人

廣海二三郎

右訴訟代理人東京地方裁判所々屬辯護士

岡村輝彦

大阪地方裁判所々屬辯護士

梯崎欽吾

全

吉田長敬

大阪市西區江戸堀南通二丁目百四十四番屋敷

被控訴人

日本海上保險株式會社

右取締役

渡邊 尚

右訴訟代理人大阪地方裁判所々屬辯護士

菅沼豊次郎

全

砂川雄峻

右當事者間ノ保險金請求控訴事件ニ付當控訴院ハ判決スルヲ左ノ如シ
本件控訴ハ之ヲ棄却ス

訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事實

事實ハ第一審判決ヲ表示セルモノト同一ナルニ付之ヲ引用ス而シテ控訴人ハ原判決ノ全部ヲ廢棄シ金六萬八千九百五拾圓ニ起訴ノ日即チ明治三十一年二月十二日ヨリ判決執行濟マテ法律上ノ利子ヲ付シ被控訴人ヨリ控訴人ニ支拂フベキ旨ノ判決ヲ受度ト云ヒ被控訴人ハ控訴棄却ノ判決ヲ受度旨申立テタリ

理由

本訴奈良丸カ明治三十年十二月二十四日澎湖島附近ニ於テ沈没シタルコトハ當事者間爭ナキ所ニシテ本訴主要ノ争點ハ當事者間ノ所謂臺灣航行ト稱セシ奈良丸ノ航路中ニハ澎湖島ヲモ包含スルヤ否ヤ又付隨ノ争點トシテハ甲第一號證ノ二ノ如ク追加條項アルモノト甲第一號證ノ如ク之ナキモノトハ全ク別個ノモノナルヤ換言セハ追加條項アル保險契約ニ於テハ其除外航路ニ航行スルモ別ニ被控訴會社ノ承認ヲ要セス只割増保險料ノ支拂ヲ爲サハ被控訴會社ハ其危險擔保ノ責ニ任スヘキヤ又追加條項ナキモノニ付テハ特ニ被控訴會社ノ承諾ヲ經サル限リハ被控訴會社ハ危險擔保ノ責ニ任セサルヤ否ニ在リ依テ先ツ第二ノ争點ニ付キ案スルニ追加條項アル保險者ハ往々ニシテ自己カ保險セル船ハ何レノ方向何レノ場所ニ航行シツ、アルヤヲ知ラス從テ其了知セサリシ航路ニ於テ果シテ危險ノ發生スルコトアルハ事理ノ免カレサル所トス凡ソ斯ノ如キ場合モ亦保險者ヲシテ補償ノ義務ヲ負擔セサルヲ得サルノ結果ヲ見ルニ至ラシムルモノトスルハ他ノ諸般ノ契約ニ比シテニ約定事項ノ精密ニシテ且ツ當事者ノ最上ノ誠意ヲ要スヘキ保險契約ノ性質上當ニアリ得ヘキニ非サルノミナラス現ニ追加條項アル保險狀ノ場合ニ於テモ甲第十三號證ノ三同第十四號證ノ六ノ如ク除外航路ノ航行ニ保險ニ付テハ特ニ承諾狀ヲ交付シ居ル事實ニ徴スルモ追加條項ノ有無ニ係ハラス除外航路ノ航行ニハ更ラニ被控訴會社ノ承諾ヲ要スルモノナルコト明ナリトス被控訴代理人カ斯ノ如キ承諾狀ハ之ヲ出タスノ必要ナキモ被控訴會社ニ何等ノ欠損ナキカ故先方ノ所望ニ應シ之ヲ交付シタルモノト辨スレ

凡既ニ説明セル如ク保險契約ノ性質上承諾ヲ要スルノ理由アルノミナラス果シテ無用ノ承諾狀ナラシカ何人モ之ヲ求ムルモノナカルヘク被控訴會社モ亦之ヲ與フルノ理ナキモノニテ結局追加條項ハ單ニ除外航路ニ航行スル場合ノ保險料ノ標準ヲ示シタルニ過キサレモノトス
 上來說明ノ如ク除外航路ノ航行ニ付テハ更ラニ被控訴會社ノ承諾ヲ要スルヤ明ナリ而シテ臺灣澎湖島等ハ除外航路ナレバ被控訴會社ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ被控訴會社カ危險擔保ノ責ニ任セサルコト亦論ナキ所トス依テ本訴ノ臺灣ト稱セシ名稱ノ内ニハ當事者ハ澎湖島ヲモ包含セシメタルヤ否ヤヲ審按スルニ元來臺灣ナル土地ノ名稱ハ地理上澎湖島ヲモ包含シタルモノニ對シ付シタル總稱ニ非アシテ臺灣ト澎湖島トハ行政區劃ニ於テハ或ハ臺灣ナル名稱ノ下ニ澎湖島ヲ包含セシメタルコトアルヘキモ地理上ノ區劃ニ於テハ全ク異名別地ナルコト敢テ喋々ヲ待タサルトコロトス故ニ單ニ臺灣航行ト稱セル保險契約ハ當然澎湖島航行ノ保險契約ヲモ包含セルモノト云フヲ得サルナリ而シテ甲第一號證ノ一ノ保險狀ハ明治三十年五月六日ニ締結サレタルモノニシテ尙ホ該保險狀ニハ保險料割合年六歩トアルモ甲第一號證ノ二ノ保險狀ニハ年六歩五厘トアリテ其約旨モ相異ナリ居ルカ故縱令ヒ前者ハ後者ノ契約満期トナルト同時ニ締結サレタルハトテ別個ノ契約ト認メサルヲ得サルハ勿論而シテ尙ホ右孰レノ保險狀ニ於テモ保險狀自体ヨリ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメ居ル事實ハ毫モ之ヲ見ルニ足ル所ナク而シテ臺灣ナル名稱中ニハ當然澎湖島ヲ包含スルモノニ非ラスシテ被控訴代

理人ハ本訴ノ保險ニ於テハ澎湖島ノ航行ヲ保險シタリトノハ全然認メサルヲ以テ之ヲ包含セシメタリトノ舉證ノ責任カ控訴人ニ在ルコトモ亦喋々ヲ要セス控訴人ハ先ツ甲第三號證ノ一二同第四號證ノ一ヲ以テ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメタルヲ明ナル旨主張スレモ縱令被控訴會社カ奈良丸ノ第一二回航行ノ時澎湖島ニ航シ同島ニ碇泊シタル日數ヲ合算シテ臺灣航行割増保險料トシテ領收シタルコトアリトスルモ是只右兩回ノ場合ニ於テ澎湖島航行割増保險料ヲ該證ノ金額中ニ包含セシメ居ル事實ヲ見ルニ止マリ臺灣行増保險料ナル名目中ニハ常ニ當然澎湖島行増保險料ヲ包含スルモノト爲スヲ得ス且ツ右甲第三號證ノ一同第四號證ノ一ノ如キハ孰レモ一片ノ金員領收證ノミ而シテ普通金錢ノ請取書ノ如キハ商事取引ニ於テハ最モ簡單ナランコトヲ欲シ複雜ナル取引ニ於テモ成ルベク文字ヲ省略シ其内著名ナルモノヲ舉クルカ如キハ往々之レアル所ナレハ前掲甲號證ニ於テモ航行シタル澎湖島ヲ掲ケスシテ單ニ臺灣行保險料ト記載シタルハトテ之ヲ以テ當事者双方カ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメ居リシモノト斷定スルヲ得ス右ノ筋合ナルニ依リ被控訴會社カ尙ホ他ノ船舶ノ澎湖島ニ航行シタルモノニ對シ同島ニ碇泊シタル日數ヲ合算シ臺灣行増保險料トシテ領收シタル事實アリトスルモ前同一ノ理由ニ基キ決シテ本件當事者双方カ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲモ包含セシメタリトノコトヲ證明シ得ルモノニ非サルナリ又控訴人ハ奈良丸第二回第三回ノ航行ニ於テ該船搭載ノ澎湖島行貨物ニ對シ長崎ナル被控訴會社代理店カ保險ヲ付シタル事實ヨリ被控訴會社ハ奈

良丸ノ澎湖島ニ航行スルコトヲ知悉シタルモノトシ已ニ之ヲ知悉シテ本件ノ保險ヲ爲シタルモノナレバ臺灣ト稱セシモノ、内ニ澎湖島ヲモ包含セシメタルコト明ナリト主張スレモ本來船体保險ト貨物保險トハ各別ノモノニシテ必スシモ相伴フヘキニ非ス船体ハ全航路ノ一部ニ對シテノミ保險ニ付シタル場合モ貨物ハ全航路ニ對シ若クハ其一部ニ對シ保險ニ付シ得ルヤ勿論ナリ故ニ假ニ被控訴會社ヲシテ奈良丸カ澎湖島ニ航行スルコトヲ知悉セシメタリトスルモ之ヲ以テ本訴臺灣行保險契約中ニ澎湖島航行ノ保險契約ヲモ包含セシメタルモノト論定スルヲ得ス況ヤ貨物ノ保險ヲ爲セシハ遠方ノ代理店ナレハ此事實ヲ以テ本社カ本船ノ澎湖島行ヲ知悉シタルモノト推定シ得サルニ於テヤ又控訴人ハ明治三十年十二月中遭難ノ奈良丸救助ノ爲メ澎湖島へ千代丸ヲ回航セシキモ明ニ其旨ヲ陳示シ保險繼續ノ爲メ割増保險料ヲ支拂ヒタルニ被控訴會社ハ臺灣行割増保險料トシテ領收證ヲ出シタル旨主張スレモ控訴人主張ノ事實通リナリトスルモ結局甲第三號證ノ一甲第四號證ノ一ノ説明ト同一ニ歸スルノミナラス甲第八號證ノ一タル千代丸保險料受取ノ日附ハ明治三十年十二月廿九日ナリ而シテ甲第十八號ノ貨物保險申込狀ノ日附モ明治三十年十二月二十九日トアレモ被控訴會社ハ該申込ハ營業時間後右同日宿直ニ受取タリト主張シ居リテ又該貨物保險契約カ甲第九號證ノ如ク其翌日則チ明治三十年十二月三十日ニ締結サレ居ル事實ニ徴スレハ右甲第十八號證ト同第八號證ノ一カ全日附ナリトテ必スシモ同時ニ申込マレタルモノト認ムルヲ得ス其他控訴人ハ證明スル所ナキヲ以テ被

控訴會社カ千代丸ノ澎湖島ニ航行スルヲ知了シ且ツ之ヲ擔保シタルモノト爲ヌヲ得ヌ故ニ到底甲第八號證ノ一ノ臺灣ナル名稱ニ澎湖島ヲ包含セシメ居リシモノト云フヲ得ヌ而シテ控訴人カ引用シタル三上豊夷ノ陳供ハ信ヲ措キ難キニ付キ之ヲ採用セス尙ホ控訴人ハ實際澎湖島航行保險割増料ト本訴ノ割増料ト同一ナリトノ事實ヲ以テ本件ノ保險ハ澎湖島航行ヲモ包含セシメタルモノ、如ク論スレバ甲第一號證ノ二ニ臺灣澎湖島八重山云々ヲ航行スル片ハ保險金百圓ニ付一ヶ月金貳拾錢ノ割増ヲ以テ航海日數ニ應シ割増保險料ヲ拂込ムヘシトアルニ徴スルモ臺灣八重山澎湖島等ノ航行保險割増ハ皆同一ナルヲ知り得レハ右割増保險料ノ同一ナルヲ以テ當事者双方カ臺灣ナル名稱中ニ澎湖島ヲ包含セシメタルモノト斷定スル能ハス其他甲第四號證ノ二同第五、六號證ニ徴シ奈良丸航行ニ付テハ大阪朝日新聞長崎鎮西日報ニ孰レモ明カニ澎湖島ニ航行スル旨ノ公告アル事實ハ明白ナリ而シテ被控訴會社モ亦右新聞公告ヲ了知シタリトスルモ保險申込人ハ必スシモ全航路ニ對シ保險契約ヲ締結セサルヘカラサルモノニ非スシテ其期間ト航路ニ於テ幾部ノ保險ヲ申込ミ得ルヤ無論ニシテ公告文中ニモ保險契約有無ノコトハ毫モ之ヲ掲ケサレハ澎湖島ニ航行スル旨ヲ公告シタレハトテ被控訴會社カ澎湖島航行ノ保險契約ヲモ爲シタルモノト認ムルヲ得ヌ右ノ外控訴人ハ許多ノ證據ヲ提出スレバ孰レモ主要ノ證據ニ非スシテ間接ニ涉リ結局本訴ノ消長ヲ斷スルニ足ラサルカ故之レカ說明ヲ省略ス而シテ右ノ如ク控訴人カ主張ノ事實ハ之ヲ各個獨立シテ臺灣ナル名稱中ニ當事者双方カ

澎湖島ヲ包含セシメタルモノト斷定スルノ價值ナキノミナラス之ヲ湊合審究スルモ右等事實ノ牽連ヨリ控訴人カ主張ノ事實ヲ認定スルニ足ラサルモノトス只控訴人自分ニ於テハ本件ノ保險契約ニ於テ澎湖島航行ノ保險ヲモ包含セシメタル意思ニテ申込ヲ爲シタルモノナルヘキモ到底被控訴人カ控訴人ト同意思ニテ其承諾ヲ與ヘタリト見ルニ足ルモノナク從テ控訴人カ本件臺灣ナル名稱中ニ當事者双方カ澎湖島ヲモ包含セシメタルモノナリトノ主張ハ之レヲ採用スルニ由ナクシテ被控訴人ハ本訴ノ請求ニ對シ其實ナク控訴ハ結局理由ナキモノトス依テ民事訴訟法第四百廿四條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

明治三十一年十二月二十三日

大阪控訴院民事第三部

裁判長判事 深野達 判事 遠山正綱 判事 池田正誠
判事 江間乙藏 判事 加納哲三郎

附言

本件ハ我國海上保險開始以來ノ大訴訟ニシテ且其爭點頗ル複雑ナルニ似タレトモ要スルニ澎湖島カ臺灣ナル名稱中ニ包含セラル、ヤ縱令事實上包含セラレストスルモ當事者間ノ契約ニ於テ之ヲ包含セシムル意思ナリシヤ否ヤヲ決定スルニ在リ而シテ原告即チ包含説ハ其證據トシテ主張スル所ノモ

ノ皆比較的薄弱ナリシカ故ニ終ニ敗訴ニ歸シタルコト第一審第二審共ニ同一ニシテ之ニ對シテ別ニ批評ヲ施スヘキ餘地ナシトス

(三) 安永千二對帝國海上保險株式會社事件(始審)

判決要旨

積荷カ沈没シタル事實ハ直チニ之ヲ以テ全損ト謂フヲ得ス

保決正本

福岡縣警手郡直方町四百五十七番邸
原告 安永千二

東京市日本橋區南茅場町十一番地本店神戸市榮町通
二丁目三十六番邸神戸出張店
被告 帝國海上保險株式會社

神戶地方裁判所々屬辯護士
右訴訟代理人 津久井 茂

右専務取締役 武井 守正
大阪地方裁判所々屬辯護士

同 草鹿 甲子太郎

右訴訟代理人 高谷 恒太郎

右當事者間ノ明治三十一年(ワ)七四號保險金請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決スル如左
原告ノ請求ヲ棄却ス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實

原告ハ本年二月十一日銑鉄九萬五千六百五磅ヲ和船金明丸ニ積込ミ神戸港ヨリ馬關ニ運送スルニ當リ被告ト保險金額金千七百圓全損ノミ擔保ノ保險契約ヲ締結シタル處該船ハ航海中本年二月二十日山口縣本山沖ニ於テ全船難破シ原告ノ貨物ハ悉ク海中ニ沈没セシヲ以テ右保險契約ニ基キ前記金額ノ請求ヲナスト雖モ被告ハ其義務ヲ履行セサルニヨリ被告ハ原告ニ對シ保險金一千七百圓ヲ速ニ支拂フベシトノ判決ヲ求ムト謂ヒ被告ハ事實ハ原告陳述ノ如クナルモ一旦海中ニ沈没シタル銑鉄ハ被告ニ於テ之レヲ引揚ケ保管シアルニ付全損ト云フヲ得ヌ抑モ全損トハ保險シタル物件ノ全部喪失若クハ元質毀損シテ殆ント廢物ニ歸シタル場合ヲ謂フモノニシテ本件ノ如ク保險シタル物件ノ存在セラル以上ハ被告カ擔保シタル金額ノ場合ニ非ルヲ以テ原告ノ請求ヲ棄却セラレタシト謂ヘリ

理由

原告ハ銑鉄カ全部海中ニ沈没シタルノ事ヲ以テ全損ナリト主張スルモ普通ノ解釋ニヨレハ海上保險ニ於テ全損トハ保險ニ付セラレタル目的物件ノ全部喪失若シクハ之レト同一視サルヘキ損失ノ場合ヲ謂フモノニテ銑鉄ノ如キ容易ニ毀損滅失セサルモノハ假令海中ニ沈没スルモ救助ノ見込ナキ海底ニ沈淪スルカ或ハ腐蝕用ヲ爲サルカ若シクハ救助ノ費用カ著シキ巨額ニ達シ收支相償ハザル等ノ如キ場合ニ非レハ之レヲ全損ト謂フヲ得ヌ然ルニ原告ハ右等ノ事實ノ立證ヲナサルヨリ果シテ幾尋ノ海底ニ沈没シタルカ又其損失ノ程度ハ幾許ナリヤヲ知ルニ由ナキモ乙三號證ニ依レハ却テ被告

カ沈没シタル銑鐵ヲ引揚ケ居ルコトヲ見ルニ足ルモノアリ全號證ハ原告ニ於テ後ニ至リ立證ノ趣旨ヲ否認スト雖モ曩ニ一タヒ之レヲ認メタルコトアルヲ以テ原告ト同號證記載ノ事實ハ了知セルモノト推測スルハ敢テ不當ニ非ス故ニ原告カ漫然沈没ノ一事ヲ以テ全損ナリト主張スルハ其當ヲ得サルモノト謂ハサルヲ得ス依テ主文ノ如ク判決ス

明治三十一年九月廿一日

神戸地方裁判所民事第二部

裁判長判事 三浦順太郎

判事 丹羽綱吉

判事 下山英五郎

附言

本件判決ノ趣旨ハ固ヨリ至當ニシテ特ニ保險者カ一旦沈没シタル銑鐵ヲ引キ揚ケタルカラハ被保險者カ全損ナリトシテ保險金ノ請求ヲ爲スカ如キハ全ク保險契約ノ損害填補ヲ目的トスルモノタルコトヲ知ラサルニ由レルナルヘシ其敗訴スルヤ怪ムニ足ラサルナリ

(四) 原田十次郎對日本海陸保險株式會社事件(始審)

判決要旨

保險者カ條件ヲ附シテ契約ノ申込ヲ承諾シタル場合ニ於テ保險契約者カ其條件ヲ履行セサル

トキハ承諾ハ其效ナシ

判決正本

滋賀縣大津町字松本第四百五番屋敷の内第二號現今大阪
西區阿波堀通五丁目第六十三番屋敷寄留士族航海業

大阪市東區北濱三丁目第十五番屋敷

原告 原田十次郎

被告 日本海陸保險株式會社

右訴訟代理人辯護士

右代表者取締役

武田貞之助

大鐘彦市

砂川雄峻

菅沼豊次郎

右當事者間保險金請求事件ニ付當地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

判決主文

原告ノ請求相立タス

訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事實

原告代理人ハ訴訟ニ基キ被告ハ原告ニ對シ保險金四万五千圓ヲ支拂フヘシトノ判決アリタキ旨一定ノ申立ヲナシ而シテ其主張スル事實ハ曩ニ名越愛助ナル者ノ所有セシ汽船神通丸ヲ被告會社ノ保險ニ付シタル儘明治三十一年三月三十日原告へ買受ケ爾后引續キ被告會社ノ保險ニ付シ定例ノ保險料ヲ原告ヨリ支拂ヒ同年七月十四日迄ノ拂込ヲ了ヘ居ル處右神通丸ハ同年六月廿八日濃霧ノ爲メ伊豆

ノ國大島浮ヶ崎ニ於テ乗揚ヲ爲シ船体其他ニ夥クシキ損害ヲ受ケタルニ付被告會社ニ委棄ヲ申込ミ
 保險金ノ拂渡ヲ求ムルモ苦情ヲ唱ヘ其義務ヲ履行セス尤モ遭難ノ當時乗組ミタル船長ト保險契約ニ
 記載スル船長トハ相違スルモ名越愛助ヨリ買受ケタルコトヲ被告會社ニ申出テタル際同時ニ船長更
 迭ノ事ヲ届出テ其承諾ヲ得タルモノニシテ被告ノ云フ如ク其際特ニ船体ノ検査ヲ受クヘキ條件ヲ約
 シタルコトナク保險ヲ繼續セルコトハ素ヨリ被告ノ認ムル所ニシテ現ニ被告ハ船長更迭ノ後明治三
 十一年四月二十八日ニ於テ原告ヨリ同年七月十四日迄ノ保險料ヲ受取リ居ルノミナラス遭難ノ節ニ
 モ社員ヲ特派シ取調ヲナサシムル事蹟アレハ今更保險契約ノ解消シタル旨ヲ爭フハ不當ナリト云フ
 ニ在リ

被告代理人ハ答辯書ニ原告ノ請求相立タズ訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決アリタキ旨一定ノ申
 立ヲナシ而シテ其主張スル事實ハ汽船神通丸ノ船体ニ對シ明治三十年十月四日ヨリ明治三十一年十
 月十四日ニ至ル滿一ケ年間ノ保險契約ヲ訴外人名越愛助ト締結セシニ明治三十一年四月二日原告ハ
 名越愛助ト連署ニテ船体賣買ニ付保險名義切替ノ事ヲ被告會社ニ申込ミ且ツ船長ヲ更ムル旨届出テ
 タルニ付被告ハ四月中ニ當會社指定ノ検査員ノ検査ヲ受クヘク若シ期間内検査ヲ求メサルトキハ危
 險擔保ノ責ニ任セサルヘキ條件ヲ以テ其申込ヲ承諾シタルニ原告ハ同期間内其検査ヲ受ケス航海ヲ
 繼續シ明治三十一年六月二十八日海難ニ罹リタルモノナルヲ以テ今更ラ被告ニ賠償ノ責任無ク且又

其海難ハ座礁ナルヲ以テ假令被告ニ責任アリトスルモ委棄ノ申込ヲ受クヘキモノニ非スト確信セリ
 仍テ先ツ原告カ明治三十一年四月中ニ船体ノ検査ヲ受ケサリシ爲メ被告ニ保險ノ責任ナキヤ否ヤノ
 爭ニ付原因ノミノ中間判決アリタシト陳述セリ

理 由

被告ノ申立ニ依リ原告カ本訴請求ノ原因ニ付其當否ヲ案スルニ甲第一號證ノ保險狀中契約者間ニ明
 約セル條件第七項ニ當會社ノ承諾ヲ受ケスシテ船長ヲ換ヘ又ハ船体ノ構造ヲ變更シタルトキハ當會
 社ハ保險ノ責ニ任セスト明記シアルヲ以テ船長ノ更迭アルニ拘ラス依然被告ニ保險義務ノ存續スル
 コトヲ主張スル原告ハ宜シク被告ノ承諾ヲ得タルコトヲ舉證スヘキ筈ナルニ毫モ直接ノ舉證ナク只
 被告カ條件ニ付承諾ヲ與ヘタリトノ陳述ヲ採テ無條件ニテ承諾ヲ得タリト主張スルモ此クノ如キ自
 白ハ素ヨリ分割スルヲ得サルモノニシテ又被告カ甲第二號及ヒ第四號證ノ如ク船長更迭ノ后原告ヨ
 リ保險料ヲ領收シタル事實アルモ何レモ明治三十一年四月中ノ事ニテ尙ホ同月中數日ヲ剩スヲ以テ
 之ニ依リ直チニ同月中船体ノ検査ヲ受ケサルモ保險ヲ繼續セシムルコトヲ被告ニ於テ承諾シタルモ
 ノト認メ難ク證人稻富實一ノ供述ニ依レハ神通丸遭難ノ際被告會社ノ社員伊藤ナル者現場ニ臨ミ船
 室内ニ於テ原告本人ト船体ノ救助又ハ委棄ノ事ニ關シ談合シタル事實アルモ伊藤カ果シテ此事項ニ
 付被告會社ヲ代表セシモノナルヤ否ヤ明カナラサレハ之ノミヲ以テ被告ノ猶保險義務ノ存續セルコ

トヲ承認シタリト認ムルニ足ラス要スルニ原告ハ其主張ノ如ク船長更迭ニ付無條件ニテ被告ノ承諾ヲ得タルコトヲ舉證シ能ハサルモノニシテ通常此ノ如キ場合ニハ必ラスシモ確固タル承諾書ヲ出スヘキ筈ナルニ原告ヨリ其承諾書ノ提出ナキヲ以テ見レハ却テ單純ノ承諾ナカリシコトヲ推知シ得ルノミナラス明治三十一年十月三十一日ノ口頭辯論ニ際シ原告ニ被告會社ヨリ原告ニ差入レタル承諾書ナルモノアルカトノ問ニ對シ原告訴訟代理人ハ承諾書ヲ受取リタルニハ相違ナキモ現存スルヤ否ハ分ラスト答ヘタル後裁判長ヨリ其提出ヲ命セラレタルニ拘ラス次回ノ口頭辯論ノ節ニハ被告會社ヨリ名越愛助宛ナル甲第三號證ノ承諾狀ヲ提出シテ原告宛ノモノヲ差出サス船長ノ更迭ニ關スル事ニ對シ双方間更ニ爭ナキ保險金額變更承諾書ヲ提出シタル點ヨリ之ヲ見レハ原告カ被告會社ヨリ船長更迭ノ承諾書ヲ受取リタルコトナシトノ陳述ハ甚タ信ヲ措キ難キノミナラス乙第三號證ハ被告會社ノ營業用「コピーブック」ニ編綴セル承諾狀ニシテ後日ノ作成ニ係ルモノトハ認メ難ク而シテ該證文面ニ依レハ明カニ被告カ船長ノ更迭ヲ承諾スルト同時ニ其條件トシテ明治三十一年四月中神戸港へ回航シ其機關全部ヲ開放シ船体ノ検査ヲ受クヘク若シ其期間内検査ヲ受ケサルトキハ爾后危險擔保ノ責ニ任セサル旨ヲ特約シタルモノナレハ原告ニ於テ右條件ヲ履行シ期間内検査ヲ受ケサル上ハ特約ニ基キ被告ニ危險擔保ノ責ヲ負ハシムルヲ得サルハ勿論ニシテ右乙第三號ノ承諾狀ハ事實上被告ヨリ原告ニ受取リ原告モ書面ノ旨趣ヲ承諾シ居ルニ拘ハラヌ故サラニ之ヲ提出セサルモノト認

ム故ニ原告カ今ヤ尙ホ保險契約ノ存續シアル旨ヲ主張シ本訴ノ請求ヲナスハ不當ニシテ已ニ其原因ナシトスル上ハ終局判決ヲ以テ原告ヲ排斥スルヲ相當トスルヲ以テ民事訴訟法第七十二條ニ則リ主文ノ如ク判決スルモノナリ

明治三十二年三月八日

大阪地方裁判所民事第一部

裁判長判事 奥戸善之助

判事 小泉久時

判事 安藤甲生

(五) 原田十次郎對日本海陸保險株式會社事件(控訴)

判決要旨

第一審判決ニ同シ

判決正本

大阪市西區阿波堀通五丁目六十三番地土旅航海業

控訴人 原田十次郎

右訴訟代理人辯護士

砂川雄峻

同上辯護士

武田貞之助

大阪市東區北濱三丁目十五番地

被控訴人 日本海陸保險株式會社

右代表者取締役

片岡直温

右訴訟代理人辯護士

菅沼豊次郎

同上辯護士

大鐘彦市

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付キ當院ニ於テ判決スル左ノ如シ
本件控訴ハ之ヲ棄却ス
訴訟費用ハ控訴人ノ負擔トス

事實

控訴人ハ第一審判決ヲ廢棄シ被控訴人ヨリ保險金四萬五千圓ニ本訴提起ノ日ヨリ辨濟ニ至ルマテ一
ケ年百分ノ五ノ利息ヲ加ヘ控訴人ニ支拂フヘシトノ判決ヲ求メ被控訴人ハ控訴棄却ノ判決ヲ求メタ
リ而シテ双方事實上ノ陳述ハ第一審判決書ノ事實摘示ト同一ナルヲ以テ茲ニ之ヲ引用ス

理由

控訴人ニ於テハ訴外人名越愛助ヨリ汽船神通丸ヲ讓受ケタルハ即チ明治三十一年四月二日愛助ト連
署ヲ以テ被控訴人會社ヘ保險名義書換ヲ届出テ同時ニ船長更迭ノ事ヲモ申出テ承諾ヲ得タルニ付キ
同年四月二十八日控訴人ヨリ同年七月十四日迄ノ保險科ヲ支拂ヒ又神通丸遭難ノ時ニモ被控訴會社
ヨリ社員ヲ派シテ船体ノ調査ヲナシタル事蹟アレハ四月中ニ船体検査ヲ受クル條件ヲ以テ承諾ヲ受
ケタルモノニアラスト主張スレトモ甲第一號證ニハ其第七項ニ當會社ノ承諾ヲ得スシテ船長ヲ換ヘ
船体ノ構造ヲ變シタル時ハ保險ノ責ニ任セストアリテ船長更迭ニ就テハ當事者間ニ於テ事實上最モ

重キヲ置キタル事ハ右ノ記載ニ依リ明カナレハ控訴人ハ船長更迭ノ時被控訴會社ヨリ承諾書ヲ受取
リ置ク必要アルコト論ヲ俟タス左レハコソ控訴人ハ第一審廷ニ於テ條件附ノ承諾アリタルコトハ之
ヲ認メサルモ承諾書ヲ受取リタルコトハ相違ナキ旨ヲ陳述シ之カ提出ヲ命セラル、ヤ更ニ條件ノ有
無ニ關係ナキ名越愛助名義ノ保險金額増加承諾書ナルモノヲ提出シタル事蹟ヨリ之ヲ看ルモ控訴人
カ當時何等ノ條件ヲモ付セスシテ單純ニ承諾ヲ得タリトノ主張ハ信ヲ措キ難ク反テ乙第二號證ハ眞
正ニ授受セラレ神通丸ヲ四月中ニ神戸港ニ廻航シテ船体機關全部ヲ開放シ検査ヲ受クヘシ若シ検査
ヲ受ケサレハ危險擔保ノ責ニ任セス云々ノ條件ヲ以テ承諾ヲ與ヘタリト云フ被控訴人ノ主張ヲ適實
ナリト云ハサルヲ得ヌ又控訴人ハ被控訴會社カ明治三十一年四月二十八日ニ同年七月十四日マテノ
保險料支拂ヲ受ケタルコト及遭難ノ時社員ヲ特派シタルヲ以テ保險繼續ノ證據ナリト主張スレトモ
四月二十八日ニ保險料ヲ領收スルモ四月中尙ホ二日ノ日時ヲ餘ヌヲ以テ無條件承諾ノ證據ト爲スニ
足ラス遭難ノ當時社員ヲ特派セシハ荷物保險ノ調査ヲ要スル爲メニシテ船体検査ノ爲メニアラスト
抗辯スルノミナラス假リニ社員等カ船体救助又ハ其委棄ニ關シ控訴人ト談判スル所アラントスルモ
單ニ社員一巳ノ所爲ヲ以テ被控訴會社ニ於ケル保險契約ノ存續ヲ認ムヘキ證據ト爲ヌヲ得サルヤ論
ヲ俟タス要スルニ被控訴人ハ明治三十一年四月二日乙第三號證ノ條件ヲ以テ船長更迭ノ承諾ヲ受ケ
ナカラ其條件ヲ履行セサルヲ以テ保險契約ハ當然解約ニ歸シタルモノトス

右ノ理由ニ依リ前記本文ノ如ク判決ス

明治三十二年五月五日

大坂控訴院民事第二部

裁判長判事 大倉 鎌藏

判事 江間 乙藏

判事 井上 廣克

判事 濱田 道記

判事 三浦 順太郎

(六) 原田十次郎對日本海陸保險株式會社事件(上告)

判決正本

上告人 原田 十次郎

被上告人 日本海陸保險株式會社

右當事者間ノ保險金請求事件ニ付大坂控訴院カ明治三十二年五月五日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲セリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ名古屋控訴院ニ移送ス

理由

上告第三點ハ原判決書ニ「假ニ社員カ船体救助又其委棄ニ關シ控訴人ト談判スル處アラントスルモ

單ニ社員一個ノ行爲ヲ以テ被控訴會社ニ於ケル保險契約ノ存廢ヲ認ムヘキ證據ト爲ヌヲ得サルヤ論ヲ俟タス」トアレトモ上告人カ第二審ニ採用シタル(第二審口頭辯論調書)第一審第一回口頭辯論調書(明治三十二年十月)第一問答被告代理人曰ク神通丸遭難ノ際ハ被告會社ノ社員カ往キタルノミナラス技師ヲモ連行シ該船ハ横濱マテハ引得ルコトヲモ鑑定セシメ居レリ同第二問答ニ「被告會社ハ成ルヘク穩ニ話ヲスル云々」トアリ即此被上告人ノ陳述ニ對シ說明ヲ爲サス且ツ汽船神通丸遭難ノ當時被上告會社カ特ニ此遭難ニ關シ社員ヲ出張セシメ其特派社員ノ行動ナルニ拘ハラヌ原院ハ漫然社員一個ノ行爲ニシテ保險契約ノ存廢ニハ寸毫ノ證據ト爲ラスト說明セラレタルハ到底理由不備ノ裁判タルヲ免レサルナリ況ンヤ原裁判所カ會社ノ社員トセス單ニ一已ノ資格ニ於テセシ行爲ト見做シ之ヲ認定セラル、ニ付テハ其然ル所以ノ事實理由ヲ說明セサルヘカラス且判決書前段(判決書理由中假リニ社)ニ於ケル荷物調査ニ付テハ會社ノ社員トシテ船体ニ關シテハ一已ノ資格トセラレタルノ矛盾不法アリテ加之カモ其前後異例ノ一已ノ資格タルコトノ如キハ被上告會社ニ於テ立證スヘキ筋合ノ者タルナリ然ルニ前判決書ノ審理說明共ニ此ニ及ハサルハ實ニ理由不備モ亦甚タシト云ハサルヘカラスト云フニアリ之ニ對スル被上告人ノ答辯ハ上告論旨第三點ハ要スルニ(一)第一審口頭辯論調查書ニ依リ神通丸遭難當時被上告會社カ特ニ社員ヲ出張セシメタルニモ拘ハラヌ何等ノ理由ヲ表示セスシテ漫然之ヲ社員一己ノ行爲ト認定シ以テ保險契約ノ存廢ヲ認ムル證據ト爲ヌヲ得ヌト表示シタルノミナ

ラス(ニ)同一人ニ對シテ荷物調査ニ付テハ會社ヲ代表スルモノト認定シナカラ船體検査ニ付テハ一
 巳ノ資格ナリト認メタルハ前後撞着ノ議論ニシテ到底理由不備ノ裁判タルヲ免レスト主張スルニ在
 リト雖トモ(イ)凡理由不備トハ判決主文ニ對スル理由ノ不備ヲ云フモノニシテ其理由ニ對スル理由
 ノ不備ト云フモノニアラサルノミナラス(ロ)原判決ハ遭難ノ當時社員ヲ出張セシメシハ其目的荷物
 調査ノ爲メニシテ船體検査ノ爲メニアラストノ被上告人ノ抗辯ヲ是認シ假ニ船體救助又ハ委棄ニ關
 シテ上告人ト談判スル處アリトスルモ之レ素ト會社ノ爲メニ出張シタル目的以外ノ行動ニシテ即チ
 會社ノ行動ニアラス社員一己ノ行爲ト認ムヘキモノナレハ之ヲ以テ保險契約ノ存廢ヲ判定スルノ標
 準ト爲スヲ得スト認定シタルモノニシテ上告論旨(イ)ハ獨リ其假定ノ理由ニ對シ批難ヲ試ムル(御
 院判決例明治三十一年第百二十一號假令付加ノ理由不法ノ點アルモ主タル理由ニ瑕疵ナキ以上ハ亦
 タ以テ上告適法ノ理由トナルモノニアラス)ノミナラス(ロ)凡ソ會社社員ナルモノハ取締役若クハ
 支配人ト異ニシテ常ニ當然會社ヲ代表スルモノニアラス只タ會社ヨリ命セラレタル行動ニ付テノミ
 會社行動ト見做スヘキモノトス故ニ原院カ本件荷物検査ニ付テハ被上告人ノ供述ニ基キ會社ヨリ命
 セラレタル行動即チ會社行動ト爲シ而シテ上告人ノ之ニ對シ敢テ反證ヲ擧ケサリシ船體検査ニ
 對シテハ社員一己ノ行動ナリト規定シタルモノナレハ毫モ違法アルコトナキモノトス(ハ)況ンヤ
 原判決ハ單ニ社員ノ行動カ一ハ會社ヨリ命セラレタル範圍内ニアルト他ハ其範圍タルヲ認定シタ
 ルニ過キヌシテ敢テ會社員ノ資格ヲ二個ニシタリトノ批難ヲ受クヘキモノニアラサルヲヤト云フニ
 在リ

案スルニ原判決中「假リニ社員等カ船體救助又ハ其委棄ニ關シ控訴人ト談判スル處アラントスルモ
 單ニ社員一個ノ行爲ヲ以テ被控訴會社ニ於ケル保險契約ノ存廢ヲ認ムヘキ證據ト爲スヲ得サルヤ論
 ヲ俟タス」トノ理由ハ一見付加ノ理由ニ過キサレモノ、如シト雖トモ判決ノ前後ヲ閱スルニ「控訴
 人ハ被控訴會社カ明治三十一年四月二十八日ニ同年七月十四日迄ノ保險料ノ支拂ヲ受タルコト及ヒ
 遭難ノ節社員ヲ特派シタルヲ以テ保險存續ノ證據ナリト主張スルモ云々遭難ノ當時社員ヲ特派セシ
 ハ荷物保險ノ調査ニ要スル爲メニシテ船體検査ヲ爲ス爲メニアラスト掲ケタル迄ノ抗辯ノ當否ニ
 付何等ノ判断ヲモ下シタルモノナケレハ即チ前記ノ社員等カ船體救助又ハ其委棄ニ關シ控訴人ト談
 スル所アラントスルモ以下ノ理由ハ之ヲ附加ノ説明ナリト云フヲ得ス隨テ此點ニ對スル上告論旨ハ
 假定ノ理由ニ對シ批難ヲ試ムルモノナリトノ被上告人ノ抗辯ハ其理由ナシ夫レ然リ而シテ上告人カ
 此點ニ關シ原院ニ於テ主張シタル事實ハ被上告會社カ明治三十一年四月二十八日ニ同年七月十四日
 迄ノ保險料ノ支拂ヲ受ケ居ル事實及ヒ被上告會社代理人カ第一審廷ニ於テ爲シタル供述ヲ採用シテ
 神通丸遭難當時被上告會社カ特ニ此遭難ニ關シ社員ヲ出張セシメタル事實ヲ以テ保險契約繼續ノ證
 據ナリト云フニ在リテ之ニ對シ被上告會社ハ遭難ノ當時社員カ出張セシハ荷物保險ノ調査ニ要スル

爲……社員一己ノ行爲ナリト抗辯セシモノナレハ原院ニ於テ之レヲ社員一己ノ行爲ナリトセンニハ其理由ヲ説明セサルヘカラサルニ此點ニ關シ何等ノ説明ヲ爲ス處ナク漫然社員一己ノ行爲ヲ以テ被控訴會社ニ於ケル保險契約ノ存廢ヲ認ムヘキ證據ト爲ヌヲ得サルヤ云々ト判示シタルハ上告人所論ノ如ク裁判ニ理由ヲ附セサルモノニシテ即チ理由不滿ノ違法アリトス已ニ此點ニ於テ原判決ニ違法アリトスル以上ハ自餘ノ上告論旨ニ對シ一々説明ノ要ナシ以上ノ理由ニ依リ民事訴訟法第四百四十七條第四百四十八條ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

明治三十三年九月

大審院民事第一部

裁判長判事 南部 豊 男

判事 岡村 爲 藏

判事 柳 田 直 平

判事 芹 澤 政 温

判事 和 田 收 藏

判事 清 水 一 郎

判事 志 方 鍛

附 言

原田十次郎對日本海陸保險株式會社事件モ亦法理上ノ爭ニアラスシテ單ニ證據ノ爭ニ過キヌ而テ被保險者ハ保險者カ單純ニ契約ノ承諾ヲ爲シタリト云フ證據ヲ舉クルコト能ハヌ之ニ反シテ保險者ノ側ニハ條件附ヲ以テ承諾ヲ與ヘタリトノ證據アルカ故ニ第一審第二審共ニ保險者ノ勝訴ニ歸シタル

ナリ然レトモ保險者カ保險料ヲ領收シ且遭難ニ際シテ社員ヲ派シタルカ如キ事實ヨリ付度スレハ或ハ保險者ニ於テ初ハ契約ヲ有效ナリト思料シタリシモ後ニ無効ヲ主張シタルカノ如シト雖トモ是レ想像ニ過キヌ而シテ被保險者ハ此事實ニ重ヲ置キ且上告ノ主タル理由モ此邊ニ在リテ大審院ハ一タヒ控訴ノ判決ヲ破棄シタリト雖トモ結局被保險者ニ取リテ大ナル利益ヲ與ヘサル事實ナリ尙以後ノ判決ニ就テハ本書發刊ノ時日切迫ノ爲ニ次版ニ讓ラサルヘカラサルニ及ヘリ讀者請フ之ヲ諒セヨ

保險判例集 終

編者著書目錄

(有斐閣及ヒ明法堂發賣)

全	志田鈿太郎著	日本商法論	總論 第一篇 商業	全一冊	定價 金七十五錢
全	著	日本商法論	第二篇 社會	全二冊	定價 金二十八錢
全	著	日本商法論	第三篇 商行為	全一冊	定價 金十一圓
全	著	日本商法論	第四篇 手形	全一冊	定價 金一圓六十錢
全	著	志田氏商法要義	卷之一	正價 金五十錢	
全	著	志田氏商法要義	卷之二	正價 金七十五錢	
粟津清亮著	保險論集	全一冊	定價 金二圓五十錢		
全	著	生命保險代理者	全一冊	定價 金二十五錢	
全	著	保險法	全一冊	定價 金十一圓	

明治三十六年六月一日印刷
明治三十六年六月四日發行

定價金壹圓



編輯者 志田鈿太郎
東京市小石川區原町十二番地

編輯者兼發行者 粟津清亮
東京市神田區三崎町一丁目四番地

印刷者 熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

發賣所

有斐閣書房

(電話本局三二三番)

東京市神田區一ツ橋通町七番地